
白銀の鎧と黃金の剣

あかつきいろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白銀の鎧と黄金の剣

【Zコード】

Z3483Y

【作者名】

あかつきいろ

【あらすじ】

主人公がヒロインと出会い、そこからわがままな事件に巻き込まれる話です。色々な神話や伝説の武器やらが登場します。楽しんでもらえば幸いです。

プロローグ（前書き）

どこかパクリ臭のような物がしても、どうか眞にせずに読んでください。

プロローグ

神話
それは様々な神や英雄などが生き、そして散つて行つた世界。

その力は人間界に生きるあらゆる生物にちりばめられた。その力は様々な者によつてふるわれた。だが、その力を持つ者は人間だけではなかつた。

馬や狼などの生物もその力を持つた。だが、その多くはある理由により死んでいつた。それは 暴走だ。そもそも、この力は神などの上位種がふるつていたものだ。それを生物がふるうのはおこがましいといつう事なのだろうか？

それを見かねたある男はとある組織を作り上げた。
その組織の名前は『神にはむかう者達』 フェンリル

プロローグ（後書き）

初めて書いた作品ですので、どんどん問題点等を教えてもらいたいなら幸いです。

これから、いろいろとよろしくお願いします！

世界は始まりを奏でる（前書き）

取り敢えず始めてみました。プロローグは意味不明かもしれません
が、どうかご容赦ください。

世界は始まりを奏でる

ある陽気な日に仕事場をのぞいてみると、支部長に呼ばれているところことなので俺」と、乾慎也は通路を歩いていた。

神にはむかう者達（「こからせフンコルとする」）は、本来各地で勃発する犯罪とかに駆り出されてしまう。ま、ぶつちやけ警察の裏組織的な？そんな感じだ。

だから支部長に呼ばれなんていひとはめつたにない。仕事をそぼつていかない限りは。

「ンンン

「乾です。支部長、入室してもよろしくですか？」

「構わんよ。早く入りたまえ」

自分で呼び出して、何言つてんだ？あの爺は。もつ年なんだから退職なりなんなりすりやこいのに。もちろんそんなこと一切口には出さなかつたが

「失礼します。それで支部長、どんな……御用……でしょう……か……？」

後半とぎれとぎれになつたのは、綺麗で可愛らしき女性がソファに座つていたからだ。あれ？おかしいな。幻？そんなわけないか。紅茶飲んでるし。その女性の髪は黒色だが、その眼の色は黒ではなく、金色だった。ハーフってやつかな？

「支部長。娘さん……いや、お孫さんですか？」

それならまだぎりぎりわかる。といつか、それ以外に何があるんだ？

「何故そこで依頼者という考えが出んのだ？孫が来ておるなら、おぬしなんぞ呼ばんわ」

「やかましいぞ、クソ爺。文句があるなら、俺はほかの任務を受けただけだからな」

うわ、しまった。つい癖でいつもの調子が出てしまった。俺が呼び出されるときは、たいてい普通の話し合いにならない。なんせ位の違いなんぞ関係なしで悪態つくからな。俺が女性の方に視線を向けてみると、顔をそむけて笑いを堪えていた。そんなに面白いか？

「真由美君、そんなに笑わんでもいいじゃねえ。わし、今すぐく傷ついたんだ」

「申し訳ありません。あまりに一人のやり取りが自然すぎて。……

くつ

まだ笑ってるよ。さすがに受けすぎじゃねえ？

「爺、あんたに纖細な心なんかあるわけないだろ。ついこの間呼ばれたときだつて、あんた確かギャルゲ……」

「あー、あー聞こえない聞こえない。何のことかわしゃ知らんぞ」

ナチュラルに否定しやがったよ、この爺。ま、そりゃビリでもいいんだが。それよりも大切なことがあるしな。

「それで？俺に依頼つて何なんだよ。別に俺じゃなくたつて頼める

やつまこへりでもこるだら?」

俺は支部長の隣のイスに座りつつ訊いた。

「おお、良く訊いてくれた。だが、その前に自己紹介とこいつ。
乾。いちらの女性は組織のとある役職に就いている、神崎真由美君
だ。

真由美君。このいけすかない男は、組織でもうランカーの腕利きの
男じゃ。安心してくれ」

「そうですか。それでは改めてはじめまして、神崎真由美と申しま
す」

「ひかりそはじめまして。乾慎也です。どんな依頼にしり、よう
しくお願ひします」

「あら、受けないという選択肢はないんですね。期待できたりです
「どんな物であれ、とにかくやり抜く。それが俺のポリシーですの
で。それで爺、依頼つて何なんだ?そんな風に固まってないで教え
てくれよ」

爺はなんかしらんがソファで丸まっていた。気持ち悪つ。

「こほん。依頼というのは、彼女、真由美君の警護をしてほしい、
といふ事なんじゃ」

「は?」

「おおつと、何か分からんが不吉な空気が漂つてきたな。どうしよ
うかな?」

世界は始まりを奏でる（後書き）

第一話、出してみました。今のところ読まれておられる方はいらっしゃらないようですが、頑張りたいのでもう少しあお願いします！

護衛の始まり（前書き）

第三話です。でれぬだけ定期更新しようと思こますが、用事でできなくて「お詫び」を赦してください。

護衛の始まり

「仕方ないな。俺は別にかまわないよ。でも、まさか俺だけにやらせるわけじゃないよね？」

「当たり前じゃん。いつもの一人を連れていけ。あれでも一応はAランカーじゃ。役には立つじゃん」

それはもうあっさりと承諾した。正直な話、たかが護衛でAランカー以上を三人も必要とする任務。一体どれだけ危険なのか、気になるとこもあつたがそれよりも重要なのは

「特務なんだろ?」これは

「支部長直々なんじやからそうじゃろ。そんなこと訊かんでもわかつていると思つとつたんじやが」

特務

要するに支部長、または本部から直々に送られてきた任務のことを指す。一応ここは日本支部。一応というのは、本部という物がぶつちやけ存在しないからだ。総局長が滞在している場所が、その時々の総本部になる。いったい今はどこのやう。

「それじゃあ、行くとしようか。準備はいいですか?」

「ええ、私は構いませんが……いいのですか?そんなに軽々しく受けてしまつて」

「そんなこと気にしなくても大丈夫ですよ。こんなクソ爺からといえ、一応特務ですから。受けないわけにはいきません」

「そうですか……。まあ、貴方がそれでいいのならいいんですが

なんか遠慮気味だな。彼女が依頼を持つてきたんじゃないのか?

それとも、彼女が何か重要な役割を担っているのかな?まあ、それ

は置いといて。仕事をするとするか。

俺と神崎さんは支部長室を退出した後、任務の話をしていた。どうやら彼女を隣町のホテルまで護衛する、という任務のようだ。思つたよりたいした任務じゃないないな。でも、それなら特務指定にされるわけがないし……まあ、いいか。悩むとか面倒だしな。俺は神崎さんを待合室に待たせて、受付に向かった。

「花音ちゃん。ちょっとといいかな？」

「はい～？あ、慎也さんじゃないですか。どうかしたんですか？」

「この子は達富花音ちゃん。フーンリルで受付嬢をやつてる元気な女の子だ。髪は明るい橙色。受付嬢というよりは、外で元気で遊んでいた方が似合っている女の子だ。基本的に任務の発注などをやつてている。

「あの二人組の馬鹿がどこにいるか知つてる？ちょっとと任務に連れて行きたいんだけど」

「ああ、それでしたら先ほどお見えになるって

「誰が二人組の馬鹿だつて？」

声のした方向を振り向くと、そこには男女一人が立つていた。俺が探していたやつらだ。

「お前らのことだ。つていうか、お前ら遅刻だぞ。もうすぐ昼時だぞ。また仲睦まじくやつてて遅くれたのか？」

「ちげえよ。今任務が終わつて帰つてきたところなんだよ。それで？俺らに何か用なのか？」

「そりだと言つてゐるだろ？月花、なんかやけに眠そうだな。またなんかしてたのか？」

「違うわよ！ ただ恥ずかしいから顔を伏せてただけ…ビリしてリーダーはいつも私たちをそういう目で見るわけ！？」

「そういう風に見えるからに決まってるだろ？ ところでお前ら、任務だぞ。昼食を奢つてやるから手伝え」

「マジで！？ 行く行く！ いやあ、腹減つてたんだよな。皿い店を頼むぜ？」

「食い意地張り過ぎよ、卓也。まあ、おなか減つてたのは本当だけどね」

「この一人は俺が組んでるチームの一人、六道卓也と黒市月花だ。一応A Aランカーだ。」

ランカーの位は、Fを順当にE・D・C・B・BB・BBBと順番に増えていく。もちろんCからはプラスとマイナス判定も付く。まあ、Fから始まる輩で続くやつは少ない。

Fの地位はいわゆるなんでも屋みたいな雑事ばかり任せられる。そこで俺たちが守るべき市民の事を知るという意味も含まれているからだ。俺はそのFランクから始まつた数少ない逸材なんだけど、ね。

「それじゃあ、護衛の相手を連れてくるから。車をとつてくる間守つてくれよ？」

「え？ 任務つて護衛なの？」

「ああ、それじゃあ迎えに行つてくるわ」

俺が待合室にいくと神崎さんは何かの本を読んでいた。あれはイギリス英語で書いてあるから、イギリスの本かな？ さすがに内容とかはわからんけどさ。

「神崎さん、人の用意はできたんですが動けますか？」

「あ、乾さん。はい、大丈夫ですよ。それでその人は？」

「移動ついでに自「」紹介させますので、付いてきてもうつていいですか？」

「そうですね。お願ひします」

俺と神崎さんは、ホールに出て入口の所で待っていた二人のところまでいった。案の定二人はきつちりとした感じになつていた。いつもはふざけているが、仕事はまじめに取り組む奴らだからね。

「それじゃ、俺は自分の車をとつてくるんでここで待つてもうえますか？護衛はこの二人に任せるので」

「それは構いませんが。大丈夫なんでしょうか？」

「？……ああ、車の事ですか？それなら大丈夫ですよ。一応狙われても大丈夫なようにコーティングはしてありますから」

「わかりました。それではここで待つていてとします。それでは護衛、お願ひしますね」

「はい。ちゃんと守り抜いて見せますよ。だからできるだけ早く戻ってきて」

「はいはい。まったく、台無しだな」

俺は車を取りに駐車場の方に向かつて歩き始めた。

護衛の始まり（後書き）

いきなりお気に入りにしていただいた方もいるようで驚きです。その期待に頑張つてこたえようと思います。それでは、また明日。

そ

力の片鱗

俺が駐車場に到着すると、そこには一般人の格好をしているがその実力は少なくとも、Bランク以上の実力はあるだろうという気配を漂わす奴らが十人以上いた。その中の最も強い気配を放っていた男がこちらに向けて歩いてきた。

「先に訊いておきたいことがある。お前はあの女とどういう関係なんだ？」

「どういう関係ってなんだよ。俺と彼女はただの護衛と護衛対象ってだけだ。それより、あんたらも同業者だろ？ 何故彼女を狙う？ いくら認可されているとはいえ、一応罪にはなるんだぞ？」

「こちらも依頼なのでな。仕方がないのだよ」

「そうかい。こんな大量の人員を雇えるってことは相当の金持ちだな」

俺達の会話をしり目に、ほとんどの奴らは俺を囲んでいた。そしてナイフや銃をこちらに向けて構えている。俺がそれを分かつてるだろうに動かないでなおも喋っているのがじれったくなつたのか、一人の男が俺に向かってきた。それに釣られて十人近くの人間が動き出した。

「やめろ！ 勝手に動くんじゃない！」

リーダー格の男はがそつ叫ぶと、全員の動きがぴたりと止まつた。いい統率力だ。だけど、それはやつちやいけない選択だつたよ。俺は片足を思いつきり上げ、思いつきり地面に叩きつけた。

叩きつけた足で地面を揺らしそこにいた奴らを行動不能にした。そしてその足で動いた十人を包み込む程の魔法陣を展開し、その陣

に魔力をつぎ込んだ。揺れが問題ないほどになる頃には、もう術は完成した。

「
グラビティセカンド　フォーチュン
重力術一式・輪環
」

その陣から発生した普段人間が浴びている重力の約二十倍もの重力をたたきつけた。もちろんそんな物を浴びた連中は十秒と持たず肉塊、いや肉片も残らず消えた。まだ生き残っているのはリーダー格の男と、四人だけだった。

「……さすがは護衛を任せただけの事はあるな」

「お褒めに預かりどうも。でももつたいないことをしたね。俺に挑むなんて愚を犯さなきや、まだ生き残つていられただろうに」

「そのようだな。さすがにこれは引かざるを得ないようだな。最後に教えてくれ。君は一体何なんだ？」

「へえ、さすがだね。あれが見えたんだ。いいよ。教えてあげよう。あれはな

」

神喰狼フエンリルだよ

俺がそう告げると、男たちは顔色を変えた。俺はそれを無視して、自分の車のところに行きエンジンを動かした。そして俺が男の隣を通り過ぎようとしたりして、男はぼそりと呟いた。

「その力は、いつか君すらも喰らうことになるだろつ」

「それぐらいこの力を受け継いだ時から覚悟しているわ」

俺はそのまま車を動かし、駐車場から出て行つた。

力の片鱗（後書き）

第四話です。昨日は更新できず、すいません。それでは、またいざ
れ。

車の中で

「ほい、到着つと

「リーダー、車取りに行くだけでこれは時間かかり過ぎですよ」

俺が入口の所に車を置くと、早速文句を言われた。時計を見ると
うわ、十五分も経つてんじやん。確かにこりゃ時間かか
り過ぎだ。

「まあいいじやん。どうせ襲われてたんだろう?なんか地面の揺れを
感じたし、震脚でも使ったんじやねえの?」

「まあね。大した実力はなかつたけどね。どこかのチームを雇つた
だけで、実力は測つてなかつたんだろうけど。弱かつたよ。術でほ
とんどが一撃死。拍子抜けだつた」

説明していなかつたが、フーンリルというのはギルドみたいなも
ので雇われればなんでもするなんでも屋だ。雑務から探検、暗殺な
どなんでもござれ。だけど、護衛なんて物を任せられるのは大体特務
だけなんだけど。普通護衛なんて物を頼む奴には専用のＳＰがいる
からね。

「いや、すいません。待たせちゃいましたね。どうぞお乗りください

俺が助手席の扉を開いて神崎さんに手をのばすと、神崎さんはカ
バンの中をあさっていた。

「何を探してるんだろ?少しを待つていると、出した物はハンカ
チだつた。ハンカチ?何故に?そつ思つていると、神崎さんはその
ハンカチを俺の頬にあてた。

「あの？何かありました？」

「リーダー、血が付いてたんだよ。それで怪我したんじゃないかと思つてるんじゃない？」

「え？違うんですか？」

「違いますよ。この血は返り血です。俺に怪我を負わせることなんて、そういうできませんから」

「うわ、傲慢。でもそんなところが薄れる！」

「はつはつは。褒めるな。まあ、どうでもいいんだけど。まあ、その、ありがとうございます」

「いえ、これ位どうとこうとはありませんから」

「リーダー、そろそろ行こうぜ。俺腹減っちゃってさ」

「お前、いろんな意味で台無しにしてくれるよな。構わないけどさ。それじゃあ、乗って下さい」

俺は運転席、神崎さんは助手席。それに残り一人は後部座席に座つた。俺の車はワゴン車だ。説明し忘れたから言つておく。そして車は動き始めた。

「そういえば、この車対策とか大丈夫なんですか？」

「何ですか？……ああ、狙われないかつてことですか？それなら大丈夫です。この車は幻影色ですから。それに対魔法・魔術の素材でもできますし」

「幻影色……ですか？」

「あれ、知りません？そんな有名じゃないのかな？」

双眼鏡とかそういう媒体を使って見ても、こちらの事はわからないようにする物です。大体の人間は常識を持っていますから、人が多くいるような場所で撃つてきたりはしません。

まあ、撃つてきても俺の重力操作で捻じ曲げますがね

「リーダーって、ホントに容赦ないからね。どうせ駐車場で戦つた

相手だつて重力で押し潰したんでしょう?」

「だつていちいち相手にするの面倒だし。大体知つてるだろ?俺は光と闇の術式以外が苦手だつて」

「知つてるけどさ。なんか無残じやない?」

「そんなもん知るか。挑んでくるんだから相対するしかないだろ?全く話は変わりますが神崎さん」

「はい?何でしうか?」

「後ろの一人が腹が減つたとうるさいので、目的地に行く前に俺の行きつけの店で昼食をとつてもいいですか?」

「はい、それぐらいなら構いません。私もお腹は空いていますし、ね」

返答を訊いた俺は、俺の行きつけの店『カナリヤの涙』に向かつた。

車の中で（後書き）

第五話です。主人公ちょっと傲慢ですけど、飽きっぽいです。どうでもいい情報ですが。それではまた今度会いましょう。バイチャ！
（ゝー＜－）

カナリヤの涙

俺たちは『カナリヤの涙』に到着した。『カナリヤの涙』は隣町との境にある、小さい店だ。俺は駐車場に向かつて、車を止めて助手席を開けようとした時にそれは飛んできた。光の槍が。とっさに闇の術を手に展開し受け止めた。その方向をみると、先程のリーダー格の男が立っていた。同時に後部座席の二人も降りて、助手席を開けた。いくら対魔術に優れているといつても限度がある。避難させた方がいいと判断したんだろう。だけど、神崎さんは動こうとなかった。まるでこれから始まる戦いを片時も見逃さないようにしているかのように。構わないんだけどさ、無鉄砲な人だ。

「面倒だな。なあ、まだ追いかけてきたのか？もう無駄だと悟っているだろ？」

「無理だと理解はできても、諦める訳にはいかないんだよ。しつかし、それだけの光を片手で止めるのか……。やっぱり化け物だな」「当り前……と言いたいところだが、これは神喰狼の力は関係ない。単純に闇の術式で光槍の表面を削つてるだけだ」

「そんなことをさも当然にやってのけるところが、すでにあり得ないって……」

「俺の前に出てきた、つて事は死ぬ覚悟はできているな？お前には特別に見せてやろう。主神を喰らつた神狼の力をな」

俺は腕を交差させながら呴き始めた。神狼は今ここに顕現される。俺の右手に刻まれた十字架の刻印が輝き始めた。白銀の色に。

「フェンリル、久しぶりにお前も戦えそうだぞ？暇つぶしぐらいになるんじゃないか？」

『それは楽しそうだ。ここ最近の敵は暇つぶしにもなりはしなかつ

たからな。せいぜい期待を裏切るなよ？人間』

交差の手をほどくと、白銀の光は頂点に達し光が消えると宝石の結晶が俺を包み、次の瞬間には俺の体を白銀の鎧が包み込んだ。そう気高き孤高の狼の毛皮を纏つたかのよう。

「それがフェンリルか。予想外だよ。結構普通なんだな」

「ははは。まあ、見た目はな。だけど、伊達に神狼と呼ばれてるわけじゃないんだぜ？」

俺は一気に動き始めた。俺の右手の刻印の正体はグレイプニール。北欧神話において、フェンリルを縛っていた魔法の紐だ。ある意味で、こいつは対神用の生物だ。その身体能力は尋常じやない。少なくとも眼で追うなんて不可能なほどに。ま、フルパワーには程遠いんだけど。

「ウウッ！！！」

俺の拳は顔面を狙つていた。それにぎりぎりで気がついたのか、横に避けるとものすごい音が鳴り響いた。空気を殴つたことで、拳の威力は衝撃波になつて周りに散らばつた。

「外したか。やっぱ四分の一の出力じゃ避けられちまうか。ほんどの奴はこれで十分なんだけどな」

「怖ええよ。なんだその威力。回避した拳の攻撃が衝撃波に変わるとかどんなんだよ！」

「神狼だぞ？ それぐらい当然だろ。今度こそ当てるから、まあ味わつてみろつて」

「ううーー！ 店先で何やつてんのーー！」は戦う場所じやなくて、ご飯を食べる場所でしょうが！」

もう一度拳を構えて動き出そうとした俺たちに怒声が響き渡った。

「この声は……オーナーか？」

その方向を見てみると、エプロンを構えた女性が腰に腕を添えて立っていた。おお、結構さまになつてる。

「慎也！今すぐ戦うのやめないと、昼飯抜きにするよ。」

「うわっ！それは勘弁して下さいよ！」

俺は勢いもなくなつたし、しぶしぶ鎧を解いた。相手も拍子抜けしたのか戦う態勢をやめていた。ここに充満していた戦いの雰囲気がなくなつた。

「それじゃあ、こりっしゃいませ！『カナリヤの涙』へようこそ！」

そんな俺たちを迎えたのは満面の笑みを浮かべたオーナーの姿だった。

カナリヤの涙（後書き）

そんな訳で第六話です。お気に入り登録も増え、感謝です。これからもよろしくお願いします。それでは、ばいばい。（^_-^）／

説教と談笑（一）

「それで？なんでも店先で暴れてたわけ？」

「いや、俺は率先して暴れたわけじゃねえよ。ただ襲われたから自衛権を行使しただけ。これ以上文句を言つ氣なら、法律の方に言ってください」

俺は正座の姿勢で詰問されていた。うつ。俺は何もしていないのに。ところどころ俺のせこじやないのに。

「お黙りなさい。あんた神喰狼フヘンコレの力を開放してたでしょうが。知ってる？そういうのを過剰防衛っていうのよ。それとあんた」「ああ。なんだ？罰ならいくらでも受けれるだ。甘んじてな。俺が悪いのだから」

「あら、結構潔いのね。」これは忠告よ。あんた見たといひ、A A ランカーでしょ？その程度の実力でこいつに挑もうなんて愚の骨頂よ。金輪際こいついう事が無いようにしなさい」

「え？何その扱いの違い。俺ひょっとして嫌われてんじゃねえの？」
「あら、そんなことはないわよ？ただあんたと一緒にいると、あんたの事いじめたくなつてくるのよね。偶ハラハラに」

「うわ、ドジだ。ここにドジがあるわ」

「失礼ね。ま、いいわ。それで昼は食べて行くんでしょ？さつれと注文してよね。それともいつものでいいの？」

「うん。いつものでいいから、立つてもいいか？そろそろ足がつていうか、なんだよこの石は…どんな拷問の風景だよ…」

ちなみに神崎さんと卓也と月花はこいつを苦笑しながら見ていた。

俺と男の膝には十五枚ほどの板状の石があつた。重てええええ…!!

「ああ、もういいわよ。お疲れ様」

オーナー」と、花道楓さんは、俺たちに乗っている石の天辺に触つた。すると全ての石が砕けちつた。あー、足が痛い。

「それじゃ、料理を用意しとくからおとなしくしどきなさい。暴れたら、シバキ倒すからね」

「そんなことしないよ。疲れたから、早めにお願い」「はいはい」

俺が席に戻ると、早速卓也が話しかけてきた。こいつのテンションに付き合ひの、偶にだけ面倒なんだよな。

「リーダー、あの人とどういう関係なんですか?ずいぶん親しげでしたけど!」

「昔から世話になってる人だよ。それ以上もそれ以下もない」

「なんだ。面白くないな」

「お前を喜ばせなきやならん道理はない。それで神崎さん、こいつの処遇はどうします?」

さつきから黙つて座つている男

確かに、白鷹だつたかな?

フルネームを公表する気はないみたいだけど。全員の視線が自然とその男に集まつた。もつと肩身狭くなつたみたいだけど。神崎さんは淡く微笑みながら、白鷹に話しかけた。

「白鷹さん?あなたはこれ以上私たちを襲う意思はありますか?」「ない。神喰狼の力は把握した。これ以上挑んだつて僕の命を捨てるだけだからな」

「それなら構いません。無用の命を捨てる必要はありませんから」「そうですか。いつもなら甘いと切り捨ててしまうところですが、

依頼主がそういうならいいでしょう。俺は何もしません

「リーダー、この人の仲間に何の術を使つたんですか？」

「輪環だな。全体攻撃用の魔法。重力系統のな

「重力一式ですか？そりやあ、『愁傷様ですね』

「上下左右から通常の二十倍ほどの重力を叩きつけ、体を微塵も残さずに潰すつつ技だからな。そりやあ、痛みも半端じやなかつただろうな」

魔法や神話系統の物が全世界に明らかになつて早二十年。2038年現在でも、魔法などの技術で新たな素材ができている。

魔法は四系統・炎・水・土・風に加えて、二系統・光と闇つまり六系統で構成されている。俺が得意な術は闇と光の攻撃系の魔法。回復は全くと言つていいくほどできない。

フーンリルがきて、俺たちのような力を継いだ者は光を見ることができるようになつた。俺達は言つてみれば、異能者つまり異常の塊みたいなもんだ。力事態は太古から存在した。だが、たいていの奴は迫害される。当たり前だ。こんな気味の悪い力を持つ奴と一緒にいたいと思う奴がいる訳がない。

「お一人もやつぱり神話武器を持つてるんですか？」

「俺たちは持つません。俺たちの得意武器は、刀と槍なんですけど。職人のオーダーメイド品なんです。材料はわざわざリーダーが取つてきてくれたんですよ？」

「すごいですね。ちなみにその素材つて？」

「刀の方は、アジ・ダハーの牙。槍の方は神話世界にのみ存在する鉱石です」

「…………え？」

さてはていつたいどんな反応をしてくれるのやら、楽しみだな。

説教と談笑（1）（後書き）

そんなこんなで第七話。今回と次回は、一応説明不足の部分を説明する回にしたいと思います。それでは！

説教と談話（2）

「ええええええ―――――つ！ アジ・ダハーカつてあれでしよう？ 大洋の底の方に封印されていて、世界の終末に人類の約三分の一を殺す、っていう伝承持ちの竜でしょう？」

おおう。やっぱり凄いリアクションだな。俺は微笑を浮かべながら、ダージリンティーを飲んだ。ここのお茶って美味しいんだよな。そんでサンドイッチを食いながら説明を続けた。

「ええ、そうですよ。あとちょっと訂正で。確かに伝承では海の底
が高い山に縛られている、となっています。でも、実際は異世界を
泳いでるだけですから」

「でもリーダー。三分の一の人を殺す、なんて伝承を持つてゐる竜と交渉してくるのは世界広しといえども、リーダーと魂持ちの人たちだけだと思うよ」

名前の通り、各神話の英雄や神様の魂をその身に宿す人たちの事だ。その人々は、魂を宿することでその者が使っていた武器

か色々あるけど、ほとんどの奴らは因子持ちだ。

その武器をふるうのに必要な因子を持つていれば、誰でもふるう事が出来る。でも、神や英雄の武器だ。^{ミステックウエポン} そう簡単に振るえる訳がない。そこで開発されたのが伝説武器。

「それで、どうやってアジ・ダハーの牙をもらつたんですか？」
「簡単ですよ。俺が生きている間に世界の終末が起こつた時、俺は
アジ・ダハーに手を出さない。その代わりに、牙を一本もらつ。

そういう契約です」

フエンリル

「アジ・ダハーカも神喰狼は障害にしかならないだろうしね。ひとつとしたら一人の人間も殺さずにリーダーと出くわして、よくて重傷、悪くて死亡するかもしないからね」

「それは…… そうかもしれないが。 でしたら乾さんは遭遇しても、知らんぷりする、という事なんですね?」

「そうですが。 何か問題でもありますか?」

「問題つて……」

あれ? ちょっとあっけからんとしそぎたかな? するとじれつきから黙りこくっていた白鷹がしゃべり始めた。 おお、やつとか。

「それで、神話世界の鉱物とは何なんだ? 神話世界に入ることができるのは、相当地位が高い者だけだと聞いていたんだが……」

「俺は創始者の知り合いだからな。 そのツテもあるけど俺は一応、フエンリル神喰狼だからな。 あそここの辻は『すべて自分で対処せよ』だからな」

「そうなのか。 というかこの硬度、なんか覚えが…… ひょっとしてこれ、オリハルコンか? 神話世界でもめったに見つからないっていう、あの?」

「ははは、正解。 オリハルコン事態は別に珍しくない。 でも、発見されるのはもう焼け野原になつた場所がほとんどだ。 そういう場所にはいるんだよな。 魔獣の類が」

「なるほど。 力を制御されている者は違い、己の力を理解しているから、か。 ちょうど銃だけを持つた人が虎に挑む感じか?」

「そうぞ。 それで俺がとある場所で見つけた、つてわけ。 それを知りあいの鍛冶屋に持つて行つて槍にしてもらつたつてわけ。 わかつたか?」

「私たちがA Aランカーになつたお祝いつて事でくれたんだよ。あの時は驚いたね。 一級武器も有象無象の類に見えるほどの武器が、目の前にあつたんだから」

「リーダーって周りには優しいよな。こんな上等な物まで用意してもらっちゃってさ」
「俺はそんなのなかつたからな。せめて周りの奴には、と思つていただけさ」

事実、俺がUランカーになろうと褒めてくれる奴なんかいなかつた。こいつらを除いたら。話が一区切りついたところで周りを見つみると、全員が食い終わっていた。

「それじゃあ、そろそろ行きましょうか」

「はい、そうですね。それでは、お金は

「俺が払つときますよ。このぐらいの出費全然痛くありませんから」

「でも、やはり依頼主としてここは私が払つた方がいいでしょう」

「大丈夫ですよ。リーダーの貯金見たら、たいていの物取りは盗みをやめるレベルだから」

「そうだな。なんせ貯金が億いつてるからな。UJの値段はお手頃だし全然痛くないだろ」

「そういうこと。それじゃ、神崎さんを車まで運んどいて。それで白鷹、お前どうするんだ?」

白鷹はとつと扉を開いて出て行こうとしていた。はつきりとした性格だな。俺が呼びかけると足を止め俺の方に寄ってきた。俺は精算を済ませて歩きながら話をした。

「何がだ? いつもの通りの生活を送るだけだが」

「お前を雇つたのは大金持ちか、相当の家柄の人間なんだろ? 普通に考えて、何かしらの圧力が掛かつてるとみて間違いない」

「それでも仕方ないだろ。本来、任務に失敗するという事は同時に死を意味しているのだから」

「お前、俺らのチームに入れ。俺に挑んでくるその根性、気に入つ

た。俺らのチームに入れば、それなりの報酬は保証するぜ？なんなら、お前のチームごとはいってもいい

「……二、三日時間をくれ。こんな話、俺一人で決めるわけにはいかない。生き残ったメンバーと話し合って決める

白鷹はそう言って自分のバイクに乗って、どこかへ走り去って行つた。これで良し。俺は自分の仕事に戻るでしょうがな。そう思いつつ、俺は三人の所に駆け足で急いだ。

説教と談話（2）（後書き）

自分が思つてゐるより読んで頂いていた方がいたことにびっくりです。ありがとうございます。感謝感激雨あられ状態です。これからもがんばっていきますのでよろしくお願ひします！（^ー^）／

護衛の終わり

道中は特に問題なく、（太陽が暖かくて眠りかけたのは秘密だ）車に一時間ほど揺られて隣町に到着した。むしろ何の障害もなくて拍子抜けしたぐらいだ。

ホテルの前に到着すると、数名のホテルマンの人人が立っていた。まあ、予約ぐらいはしてるよな。俺はその前で車を停めて、助手席の扉を開けた。

「それじゃあ、これで任務は完了って事でいいですか？」
「ええ。いじままでありがとうございました。怪我などはありませんか？」

「あるわけありませんよ。それでは、田舎はわかりませんがいじでの滞在をお楽しみください」

「……よくわかりましたね。私が日本に住んでるわけじゃないって事」

「うーん、なんていうんでしよう? こいつ、全体の雰囲気のような物がこの国とは違うっていうのか。まあ、そんな感じです」
「わうなんですか。それじゃあ、はい」

神崎さんは俺に向かつて右手を差し出していた。？これはどういった事？ 外国風に口付けでもしる、ってことか？いや、違うな。これはひょっとして……。

「いへ、ですか？」
「はい」

やつぱり握手か。そう安心して、握手をしたとたん俺（多分神崎さんも）の頭に何かがほとばしった。そして、一瞬だけ神崎さん

から黄金の剣のようなものが見えた。俺たちは同時に手を離し、口の手を見つめていた。あの姿は一体……？

「お嬢様、もうよろしくでしょつか？さすがに九条様もくたびれていらっしゃるでしょうし……」

「…………そうですね。それでは爺、彼らに部屋を用意して差し上げて」「そこまでする必要はありません。言つほど働いてはいませんしね。俺たちはこれで失礼します」

俺がそう言つて車の方に戻ろうとするとき、あの一人がいらん事を言い始めた。

「ええ、泊まつていきましょひよ。せつかく神崎さんも『厚意なんですし』

「そうですよ。こんな時以外、この町に来たりしませんよ～思い出作りに、ね？」

「ね？じゅねえよ。」いつも時は遠慮しどくのが筋つてもんだろ」「いえ、せっかくですしお願いします。お嬢様の顔を立てると思つて」

「……それなら一般客用で三人部屋を一つか、二人部屋を一つお願ひします」

「かしこまりました。君達、お嬢様をお部屋にお連れしておいでくれ」

「「「かしこまりました」」」

そういうと、そこには俺たちを除くと誰もいなくなつた。俺的にはどつとと帰りたかつたんだが。

「やういえばリーダー、」の後暇だつたら俺の修練の相手して下さによ

「え、するい！それなら私も、私もしてよワーダー！」

ひとまず、修練ついでにこの調子に乗った二人もシバクとしようかな。

護衛の終わり（後書き）

はい、よくわからないかもしけませんが護衛もなんだかんだで終了。これからだんだんと面白くしていくと思つていますので、乞うご期待。

そしてホテルの一室に着いた俺たちは、荷物を置くとすぐにフロントで修練用の場所がないかどうか聞きに行つた。

「それでしたら、裏庭は素振りぐらいのスペースはありますよ。それでもよろしいでしょう?」

「それでかまいません。ありがとうございました」

俺たちはすぐに、裏庭に歩いて行つた。そこには模擬戦闘にもつてこいの広さがあった。確かに素振りだけのスペースと言えるだろう。

「それじゃあ、模擬戦を始めるから準備をしどけ。といつても柔軟運動程度だがな。俺は結界を張つておく。周囲に影響を及ぼさないようにな」「はーい」

一人が柔軟運動をしている間に、俺は結界を張るためにぎりぎりの所に四枚の札を張りに動いた。四端にある木に張つた。そして札に魔力を流し込み、結界を完成させた。よし、これで終わり。

「これで良し。それじゃあ、そろそろ始めるぞ」

「それで武器はどうするんです?まさか素手でする訳じゃないですね?」

「当たり前だ、武器はこれ。世界樹の枝から作られた剣と槍。これら存分に振り回せるだろ」

「了解。ところでこれ、どんな結界なんだ?影響を及ぼれないって言ったつてどうやって?」

「『』の部分だけを異界につないだ。つまりいくら振り回しても『』を傷つけても、現実世界に影響は出ない、というわけだ」

一人に剣と槍を渡して、俺は一本の木刀を構えた。素手による近接戦闘は俺の得意分野だから、ひょっとしたら間違えて二人の武器を破壊してしまうかもしれない。それじゃあ、修練にならない。だから俺は、一番目に得意な双剣を選んだ。

そこから俺たちは修練を始めた。初めは軽めに、だけどだんだんと激しく動き始めた。周囲には俺たちの掛け声と、ぶつかり合う音が鳴り響いた。

「どうした！？動きが鈍ってきてるぞ！もう疲れたとか言ってくれるなよ？」

「当り前だろ。天心流剣術

崩天黒刃！」

卓也は一本の剣で同時に三連撃を叩きこんできた。その剣撃を俺は全ていなし、容赦なく手首に一撃を叩きこんだ。

「隙が多すぎるぞ！次、来い月花！」

「分かってるよ！北竜葬送流槍術

葬竜演武！」

槍頭と石突きの両方で俺にぶつけようとしたが、双剣を石突きの時にぶつけて体勢を崩した後、卓也と同じく手首に容赦なく叩きこみ武器を落とさせた。

「ほい、これで終わり。あのな、お前らそんな隙が多い技を使わなくてもいいんだよ。これが模擬戦だったからいいけど、もし実戦だったらお前らが攻撃を当てられてたのは手首じゃなくて頭か、体だ。いつでも隙は少ない方が良い。まあ、わざと隙を見せて挑発するつて手段もあるけどお前らにはまだ早い」

「「はーい、わかりましたよ」

「そうふでくされるな。前にやつた時よりは技の速度も実力もはるかに上がってる。そう悲嘆に暮れることはない。ま、今のまんまじや俺から一本取るのには相当時間がかかるがな」

そんな事を話していると、突然俺が敷いた結界が壊れた。何事かと思つてそちらの方を向いてみると、そこには神崎さんが立つていた。

修練（後書き）

続けて書いてみました。いや、面白くなつたと毎回つけて楽しんでください。
では、また。（^_^）／

乾さんたちと別れた後、私こと神崎真由美は最上階のVIP専用ルームでくつろいでいた。今回私が日本に来た理由は、婚約者である九条泰斗さんと会うためだ。だけど、九条さんはある事情でいま仕事に出てるのでここに到着するのは一、二日後になるらしい。

「それにしてもあの時は一体……？」

乾さんと握手した時、乾さんに一瞬、それもぼんやりとだけ白銀の色の狼が見えた。おそらくあれが神喰狼なんだろう。でも私は反応したって事は彼は

「お嬢様、よろしいですかな？」

「ええ、構わないわよ。それでどうかしたの？ギルフォード」「

「彼らの動向を確認してきました。彼らは今、ホテルの裏庭のスペースで模擬戦をしているようです。詳細はわかりませんが」「

「ありがとうございます。それにしても分からないうてどういつ事？」

「結界を張ったようにして、その向こうが見えないのです。しかも、その結界も相当な強度を持つておりまして。気づかれずに突破するのは不可能と思い、戻ってきた次第です」「

「どれだけの魔力を保持しているのでしょうか？」

ギルフォードの力を持つてしても、気づかれずに突破するのは無理と思わせるなんて

「それはわかりかねますが。それよりもお嬢様

「ん？何か言いたいこともあるの？」

「はい。お嬢様は何故、彼にそこまで興味を示されるのですか？確かにあの若さでランカーといつのは珍しいですが、全くいなわけではありません」

それはお嬢様でもわかつていらっしゃるでしょうか。それなのに、なぜ
?」

それは当たり前の疑問でしょう。おそらく彼は私と同じ純血種。そ
うであるが故に、あのような光景を見せたのだらう。

「ギルフォード、私は神話や伝説の武器へとの姿を変える事がで
きるサルジストの純血種。

そしてここからは私の想像になりますけど、彼は、乾さんはおそらくサルジストの力をふるう事が出来るクラストの純血種です。その証拠に、彼は私の持つ力に反応した」

「なんと。まだ生き残っていたのですか?

それでは彼は、最後のクラストの純血種ということになりますが…

…

そう。私のようにサルジストはまだ少ないけれど現存している。
けれどクラストはサルジストなどと交りあうことで、その血の純血
がいなくなつた。純血種がこの三十年以上発見されなかつたことで、
クラストの純血種は絶えたのだと思つていた。でも、そうではなか
つた。

「それで彼らは、ホテルの裏庭にいるのね?」

「はい、そうですが……まさか彼らの所に行く氣ですか?」

「そうよ。どうせこのまま待つっていても暇だしね。どうせ二、三日
は来られないのだし」

「わかりました、が。行く前にその格好と髪をじうじかして下さい。
乱れ過ぎです」

私はギルフォードの言つとおり髪を梳いて、服のしわを元に戻し
て裏庭に行くと、そこにはギルフォードが言つていた通り巨大な結

界が張つてあつた。

その結界に指が触れると、途端に結界は壊れて驚いた表情で立つて
いる三人がいた。あれ？

EX・神崎視点（後書き）

ギルフォードといつのは、あの執事の事です。ついに1000PV
突破！

やつたぜ、＼！それじゃあ、また今度ーバイバイ！（ゝーゝ）／

喫茶店にて

ホテルにある喫茶店で俺たちは談笑していた。

結界を破壊された時は驚いたが、それは彼女の手に聖属性が混じつていたせいだった。俺がこの周辺に張った結界は闇属性。異なる属性の力に反発し、耐えきれなくなり壊れてしまつたんだろう。

それでも、長時間触れていて砕けたならまだしも、彼女の顔を見るにあればただ触れてしまつただけで壊れたという感じだ。どれだけ内包量と密度が高いんだよ。

もしかしたら、さつき来てた執事さんが何かしたのかもしないけど……。

「それで、神崎さん。どうしてあんな所に？」

「え！？えーと、相手が来てなくて散歩をしてたんですけど……」

「要するに、暇だったんでしょ？」

「……はい。その通りです」

着いたはいいけど、相手が来ていなくて散歩してたら偶然ここに着いた、か。いや、違うな。彼女は俺の事を探つている感じがする。暇はその通りなんだろうけど、こちらの事も探ろうつて感じか？まどろつこしいのも嫌だし、ここはもうソソ单刀直入に言つとくか。

「それで？神崎さん、俺に何か用があるんじやないんですか？わざわざ執事さんを俺にかけしかけるぐらいなんですか？」

「……気づいてらっしゃつたんですか？あれでもギルバートは元S+ランカーの実力者なんですよ？」

「それが何ですか？そんなことはどうでもいいんです」

大事なことは、貴方が俺にどんな用があるのか、という事なんです

から

「……では率直にお伺いします。あなたはクラスト最後の純血種なんですか？」

……やっぱりその話か。結構うんざりするな。爺たちがこの情報は隠蔽してるけど、やっぱり純血種にはわかるのかな？

「その答えはイエスとノーの両方。確かに男でクラストの純血を継いでいるのは俺一人だ。

だが、人間の純血種が俺一人か、と訊くとそれは違う。俺には一応だが、姉と妹がいるからな」

「一応? どうして一応なんですか?」

「……姉貴はどこ行つてのかもわからない。その上生存不明だし。妹に至つては、もう俺と同じ乾姓を名乗つていない。千葉家の養子ということになつてるからな」

「数字持ち（ナンバーズ）。それも番外エクストラですか」

「そうだよ。俺が爺たちと相談してそうしてもらつたんだ。俺はまだしも、あいつはまだ未熟。

俺の傍にいて狙われるよりは被保護者としては格式も高い数字持ち（ナンバーズ）、それも番外エクストラの方が良い」

数字持ち（ナンバーズ）とは、名字の方に一から十の数字を持つ者たちの事だ。一桁の者はファースト、二桁の者はセカンド、三桁の者はサードそしてそれ以上が番外、つまりエクストラとつけられる。噂だけのレベルだが、番外の番外つまりオリジナルエクストラである零の位を持っている者がいるそうだという物もある。面倒すぎるぞ、この制度。誰が考えたんだよ。

「それは総局長の娘であるあなたが気にする」とじゃないでしょう?」

「どうしてそんな事をあなたが知っているのです？」

「否定になつていませんよ。それは俺があなたの父である、神崎宏隆総局長と知り合いだから。何回かあなたのお話は聞いていますよ」

「……お父様はなんと仰つておられたんですか？」

「誰にでも気がきいて、そして優しい自分にはもつたいない娘だと。でもただ一言、構えないので残念だと。自分は仕事にこまけてあなたに構つてあげられなかつたのが、残念だと言つていましたよ」

「そうですか。お父様はそんな風に……」

神崎さんは静かに声も出さずに涙を流していた。俺たちはそれを静かに眺めていた。

喫茶店にて（後書き）

はい、今日は土曜なので毎から投稿してみました。ここ最近は説明ばかりですが、そのうち派手なバトルも入れていこうと思いますのでよろしくお願ひします。

それではまた後で。あるいはまた今度。さいなら～。￥（^__^）

/

「それでどうしてこんな流れになるんですか?」

あの後、ひとしきり泣いた神崎さんは唐突に、稽古をつけてくれませんか?と言つてきた。そしていきなりさつきの裏庭まで引っ張り込まれた。卓也と月花もちゃつかりついてきていた。

「私、強くなりたいんです。今回みたいに誰かに頼るだけではなく、自分の身ぐらいいは自分で守れるように」

「別にそんな事をする必要はないと思いますけど。人には向き不向きという物がありますし」

「それでも、力は持つていた方が良いでしょう? ござとこう時のため」

「否定はしませんけどね。」
「ともありますし」

俺が足を地面に叩きつけるのと同時に、ナイフが飛んできた。だがそれは、俺の足元の影から出てきた者によつて阻まれ、俺は手に籠手を纏わせて飛んできた方向の木を殴つた。それによつて生じた衝撃波で何本か先の枝に足をつけっていた男は落ちてきた。

「ばれたからつてナイフ投げなくたつていいじゃないですか。えーっと確かに、ギルフォードさんでしたつけ?」

「……分かつておられたのですか? 私がいたことを」

「もちろん、貴方の気配を立つ能力は素晴らしいの一言に尽きます。ですが、視線が強すぎます。

あれでは方向はわからないでしょうが、監視されているのがばれてしまいます。

それと魔力の動向ぐらい気をつけましょう。俺が即時結界で大体半

径五百メートル程度の探査術式を使ったのにも気づかれていないようでしたし」

「半径五百メートル！？」

あれ？そんな驚かれるような事だつて……あ、そうだった。普通の術者でも即時結界の探査術つて半径一、三十メートル位だつていやあ、完全に忘れてた。

「直径一キロの即時結界なんて一花様だけの技だと思つてたのに、他の人にも出来たんだ」

「あんな超人と一緒にしないでください。あの人は訓練もせずに大規模攻撃魔術の展開までできたんですよ？しかも六歳で。いくらオーディンの魂を宿してるからってチートすぎますよ」

「チート云々はリーダーにだけは言われたくないけどね」

ええい、やかましいわ。一花とは一桁数字のトップだ。ファースチバンバ

オーディンの魂を宿している魔術界の女帝。そして世界でも有数の実力者。SSSランカーだからな。ちなみにSSSランカーは世界でも三人しかいない。

『一花』・『二木』・『三橋』この三人だけだ。もうやばい。こ

の三人が先頭に出るところだけで、もう絶望しか残らないらしい。いわば、最終兵器つてところかな。

「とにかく。いくら元とはいえ、こんな失態を犯してはいけないと
いう事を言いたいんですよ。俺は」

「そうですね、わかりました。あなたもうランカーとは思えません
が」

「それはもういいです。それじゃあ、始めよつか神崎さん」

「はい、お願ひします。私の事は真由美って呼んでくれませんか？」

「それじゃあ、真由美さんで。参ります」

俺は一本の木刀を構え、真由美さんはレイピアのような形をした木刀を構えた。そして同時に飛び出した。

模擬戦の前に（後書き）

はい、同日連続投稿です。できればこのまま一、二話書かたいと思
います。もう大奮発だー。といつわけで楽しんでいって下さい。

模擬試合

同時に動いた俺たちだが、先に機先を制したのは真由美さんだった。もう何がすごいって、その突撃力と剣捌きだね。一瞬で俺の懷に入つて、俺の鳩尾の部分を本氣で突こうとしてきたし。殺す気かつての。ま、全部弾いたんだけど。

「護衛されてる時から感じてましたけど、さすがに強すぎじゃありません！？開幕の連撃を全部弾くなんて！」

「そりやこいつちのセリフ。なんでこんだけの実力があるのに護衛なんかいるんだよ？」

「それは……私が魔術を使えないからで……」

「…………」

なんじゃそりや。サルジストの純血種なのに魔術が使えないってどうよ？もしかして聖属性も自発的に使ってるわけじゃなくて、垂れ流し状態なのか？どんだけ内包量がとんでもないんだ？

魔術などの知識が世界的に知られることとなつた現代において、魔術を使えない人というのは絶滅危惧種並みに稀少だ。火をつける魔法とかで使用されることもある。まあ、そのせいで犯罪も増えるんだけど。

「初歩の初歩、火の術は使えますよね？」

「それが全然ダメ……なんでききないのか分からなって先生に呆れられたぐらい」

「まあ、いいか。今は関係ないし。それで剣をより磨くと。それなら、もっとアクセルを上げた方が良いですかね？」

「そうですね。お願ひします。手加減は抜きで」

「言いましたね？後悔しないでくださいよ？用並みなセリフではあ

りますが

俺は体の中心に小さな炎をイメージした。これが普段の俺だ。そしてその炎の火力を段々と上げていく。そんな俺の気配をあやしく思つたのか、真由美さんはレイピアを構え猛攻を仕掛けってきた。

両腕、両足、右肩、脇腹、肋骨の部分。とてつもない嵐のような猛攻、だが一発一発の威力は小さく大したダメージにはならないが量が量だ。じりじりと溜まつていく。

そんな猛攻に耐えながら、炎をイメージし続けた。そしてそれが頂点に達した時、一気に爆発させた。それは俺の体の隅々まで肉体強化の術を掛ける物だ。これによつて俺の身体能力は格段に上がる。普段の五倍ほどに。

いきなり俺の姿が消えたことに驚いたのだろう。真由美さんは周りを見回していた。さつき身体能力が上がると言つたが、俺が上げたのは脚力と感覚神経。それによつて俺は今 空中にいた。

いやあ、我ながら飛びすぎた。久しぶりすぎて加減が難しいな。神崎さんの五メートルほど後ろに着地すると、神崎は驚きながら振り返つた。

「いつたい何をしてたんですか？」

「ちょっとした術を体にかけてた。時間かかるからね、あれ。それじゃあ改めて、始めよう」

俺は強化された脚力で真由美さんに双剣で居合抜きをした。それを真由美さんはすんでのところで回避した。鋭いな。攻守は完全に逆転した。俺の文字通り嵐のような猛攻に、真由美さんは回避することで事なきを得ていた。俺の剣は真由美さんと違つて重い。そんな物を連発されていたら相手としては、やつていられないだろう。それでも何とかこちらの動きをつかみ、鳩尾を中心とし星の形で突きの五連発を浴びせてきた。そして鳩尾に掌底を食らわしてきた。

それは魔物用の魔術だった。星の加護を使い聖属性の掌底で相手の急所を突く。とんでもない技だ。

その技を放つことで固まつた真由美さんを魔力で吹き飛ばし、一本の剣を両手持ちにして大上段で斬りつけた。すると真由美さんの持っていた木刀が半ばで粉々に砕け散った。

「そこまで一勝負あり！」

月花の声が響きわたり、俺たちの模擬試合は終わった。ああ、体中が痛えなあ。

模擬試合（後書き）

はい連続投稿第三段！できたぜ！読んでくれる方も増えてうれしいです！

バンザーアー！というわけで次話でまたお会いしましょう！では！

模擬戦の後

模擬戦も終わり、俺たちはなぜか最上階の真由美さんの部屋に招かれていた。……何故？

「申し訳ない。お嬢様も手加減無しで挑みにかかりましたからな。これだけの傷を負う者も珍しいだろ」と言えるぐらいの傷を負つてますよ」

「なんかいろんな所が痛いですから。肋骨が一本ぐらい折れてるか、ひびが入つてますね、これ？」

「うつ！……すいません。ちょっと暑くなりすぎてしまつて……」

「それはもういいですよ。あなたの強さもよくわかりましたし。あなたの剣筋は我流にしては洗練されているが、流派にしては粗すぎる。あなたの剣はあなた自身が作り上げた物なんでしょう？」

「はい。向こうでは趣味としてレイピアを習つていたんですが、学んでいく内に自分で技を作り上げてみたい、と思うようになつたんです。それのほぼ全てをあなたにぶつけてみました。どうでしたか？」

「確かに強い。ですがやはり魔術が使えないというのはまずすぎます。おそらくあなたが魔術を使えないのは、無意識の内に魔力を聖属性に変換して垂れ流しているからです。だから必要な魔力が足りないんです」

「へ？ 私の魔力って垂れ流しの状態なんですか？」

「ええ。無意識下で行われてるせいで気づかないんでしょうね。そうですね……水門をイメージして下さい。魔力の運用というのは全てイメージで賄われていますから。次に垂れ流しの状態になつて、それを閉めて水を止めるイメージをして下さい。……はい、オッケーです。垂れ流しは止まつてます」

「これで魔力が溜まつていくんですか？」

「そうですね。でも、そつそつ全快になることはあり得ない。回復が早い人でもそうですね、大体三日程度かかります。あ、これはフレンリル所属の魔術師の基準ですから。

まあ全体量がわからないと、どうしようもないんですけどね？真由美さんは魔力の内包量とその回復速度は一線を介していると思いますけどね」

彼女は魔力をぼぼ垂れ流し状態で過ごしているのにも拘らず、普通に生活している。魔力が枯渇すると、吐き気や嘔吐感に襲われる物だから彼女の魔力総量は計り知れない。

やっぱり純血種としての力が作用しているのかな？俺もフレンリル所属の魔術師の大体二十倍ぐらいあるって言われたし。

「それじゃあ、俺たちはこの辺で戻させてもらいますね。卓也、月花行くぞ」

「ういーす。了解」

「え！？まだ傷は治りきつていませんよ！？」

「大丈夫ですよ。俺の力は少々特殊ですから。それでは失礼します」

俺達は真由美さんの部屋を出た後、卓也と月花は夕食を食べに行くと言つていたが、俺は辞退しては部屋に戻りベッドにぶつ倒れた。

今回の特務は色々あつたな。まさかサルジストの純血種と会つことになるとは。ま、なんにせよめちゃくちゃ眠い。さっさと……寝ると……しょひ……。そして俺は眠りについた。

模擬戦の後（後書き）

連続投稿第四段！残念ながらもう日は超えてしまったが大丈夫！まだぎりぎりセーフだ！それじゃ、また今度！（^_-^_-^_）

去り際の一言

「やういえばリーダー。昨日リーダーの影から出てきたあの黒いのは何だつたんです?」

「ん?」

翌日、俺と卓也と円花は朝食をとつていた。ああ、美味しいな。この料理。いやあ役得、役得。朝からこんな美味しい飯が食えるんだから捨てたもんじやないな。

「ああ、あいつの事か。ちょっと待つて。もうすぐ説明してやるから」

「いや、それなら今すぐ説明してくれても……」

「何の話をしてるんですか?」

「おはよウジヤエコモス。真由美さん、ギルフォードさん」

「おはよウジヤエコモス」

一人はちよづど降りてきたようだ。ちなみに卓也飯を食つのに集中してるから、全然話に参加してこない。すると丁度よく注文していたステーキが運ばれてきた。するとそこにはいた皆が怪訝そうな顔をしていた。

「朝からステーキですか?……胃にもたれそうですね」

「これを食うのは俺じゃないからいいんですよ。」

「ほら、飯が来たぞ。そろそろ機嫌直せつて。飯を一食抜いたぐらこじや死にやあしねえよ」

俺が地面、といつより自分の影を足でノックするよつて蹴ないと、そこから黒い狼の形をした獸が出てきた。

出てきた時は不機嫌そうだったのに、できたてのステーキを見る
と食べてもいいかと思念で訊いてきた。まったく現金な奴だ。俺が
どうぞ、ジエスチャーをとるとむしゃぶりついていた。そんな腹
減つてたのかよ。

「あの、リーダー？ この黒い狼みたいなのは一体……？」

「俺の眷属。フェンリルってのは破壊と狼の象徴だ。

お前の槍の素材であるオリハルコンを取りに行く最中にあつたんだ
よ。

それでこいつらの一族と契約し、俺の影に住んでるんだ。俺の命令
は忠実に訊くし、いい奴だぜ？」

「それは別にいいんですけど、大丈夫なんですか？ 魔獣を勝手に眷
獸にするのは認められていないのでは？」

「あんな、お前らの武器を作つてから一年もたつてんだぞ？ ちゃん
と登録してあるさ。

それに好き好んで狼を眷属にする奴はない。たいてい器としての
力が足りず、殺されるからな」

「召喚術者（ティマ）は？ あいつらなりできるんじゃないの？」

召喚術、それも魔術と同時に普及してきた物だ。今じゃあ、ペッ
トとしての契約を交わす者もいるそうだ。まあ、そりや確かに生存
競争が難しい自然よりは安定しているだらうけど……。

「召喚術者（ティマ）が好き好んで狼と契約するわけないだろ。

あいつらは基本的に孤高の生物。

誰かに媚びる事自体が珍しい。お前、狼に真正面から睨まれて平然
としてられるか？」

「無理です。だから狼を眷属にする人つて全然いないんだ」

「そういう事。食べ終わつたな。それじゃあ戻つて寝てる。また仕
事になつたら呼ぶから」

黒狼はこくんと首を動かすと出てきた時と同じように、俺の影に戻つていった。そのころには俺たちも朝飯を食い終わっていた。俺たちは席を立つた。

「それじゃあ真由美さん。ギルフォードさん。任務も完了しましたし、俺達は帰らせていただきます。花を踊らす風が、貴方にもとどかん事を」

「ええ。ささやかな陽光があなたたちを包みますよ！」お元氣で

俺は一礼をした後卓也と月花と一緒に部屋に戻り、荷物をまとめてチェックアウトして車に乗り込んだ。車を動かしてちょうど街と街の境目であるトンネルに入ったところで、月花が喋りかけてきた。

「さつきの花を～のあれにはどんな意味があったの？」

「前にも説明した気がするが、まあいいだろ。要するに健康でありますようにって意味の別れの言葉。

真由美さんが言つたのは、ささやかな陽光のような幸せが包み守つてくれますよ！」って意味だ

「そつなんだ。……そういえばリーダー、めったなことじや名前を呼ばないのに珍しいですね。何かあつた訳じゃないのに」

「……まあいいだろ。少なくとも彼女と俺がまた会うなんて確率としてはそう高くないだろうし」

俺のこの甘い考えが覆されるのは、そう遠い未来ではなかつた。

去つ際の一言（後書き）

昨日は結構な数の読者に来ていただいたのです。嬉しいです。
これからも頑張つていいくのによろしくお願いします！

あの護衛任務から数日が過ぎ、俺はちょいど任務を終えて報告をしている時だつた。花音ちゃんが端末に打ち込んでいた俺に話しかけてきた。電話を持つて。何で電話なんか持つてんだ？

「あの、慎也さん。支部長からお電話ですが」「ん~? はい、もしもし。ラーメン屋・楽軒ですがご注文は何でしょうか?」

「ラーメンと餃子一人前で。できるだけ早く頼むぞ」「はい、かしこまりました じゃねえよ! 何ボケに乗つてきてんだよ、シッコミいれるかしないならスルーしろよ! つい乗つちまつたろうが!」

「お前さん結構無茶なことこいつどるぞ?」「いいんだよ、俺だから。それで? 今度は何の用なんだ?」「ここから支部長室に来い。お客さんもお待ちかねのようじやしないお客さん? また特務なのか?」「まあ、その一環じやな。早くここんと給料減らすぞ」「ちょっとそれ職権乱よ 切りやがった。しゃあない。行くとするが」

俺は花音ちゃんに電話を返すと、端末の電源を落として支部長室に向かつた。まさかこんな短期間で支部長室に一回も入ることになるとは。

支部長室の前にたどりつき、俺は一回ノックをして声をかけた。これはここの間と同じ。でもここからが違つた。

「乾です。入室してもよろしいですか?」「どうぞ。入つてきてください」

中から聞こえた声は真由美さんだった。あれ？また護衛の仕事？そんなわけないよな。あれ？何だろ？そんな風に疑問で頭をいっぱいにしながら、俺は支部長室に入室した。

「お久しぶりですね。お元気でしたか？」

「数日ではそう変わりはしませんよ。真由美さん」今回はびっくり御用で？」

「少しお話がありまして。びっくり席にお掛け下せこ」

「あ、これはどうも。……それでお話とは？」

「えーと、その……」

真由美さんが喋りこくしゃみしているな。いつたいどんな話なんだ？しばらく待っていると、真由美さんは意を決したかのような表情になつて驚愕なセリフを放り出した。

「乾さん。私と婚約してくれませんか？」

ナニライツテイルンダロウコノヒトハ？

驚嘆な一言（後書き）

昨日は諸事情により更新できませんでした。すみません！その代り
今日また更新するつもりです。よろしく！

事前交渉

「ええええー—————？」

俺はすうとんきょううな声を上げていた。だ、だつてしょりがないだろう！

こきなり『婚約してくれませんか』だぜ？ しょうがないだろー！ ？

「おー、爺ー」これは一体どういった事なんだよー？

取り敢えずクソ爺 もとい。支部長に助けを求めた。ところが支部長も顔が歪んでいた。

え？ もしかしてあんたも、真由美さんがこんなことを言つとは思わなかつた派なの？

「ああー。真由美くん？ 少し詳細を話してもらつてもいいのかの？」
「はい。乾さんはクラストの純血種だと訊きました。私もサルジストの純血種です。

なので、婚約して下せませんか？ と申したんです

「うん。見事に話がわからない。つていつか全然話がかみ合つてない。意味わかんねえ……。

「いやいや、待て待て。キミの婚約者は九条君じゅうじゅう他の男と婚約などできる訳ないじゃろ」

「婚約は解消していただきました。とある条件付きで

「条件って何なんですか？」

「九条さんが今度行われるトーナメントで優勝したら、もう一度婚約関係に戻る、という条件です」

「どうよりもなんで俺と婚約なんてするんです？」

九条といつたら一桁ファーストナンバー数字でしう？」

家柄もバツチリ、実力もあって言う事無しじゃないですか。なんでその婚約を断つて俺なんかと婚約するんです？」

「あなたはクラストの純血種というのが、どういう意味か分かつてない。その血がどれだけ稀少か」

ガンッ！！

俺は目の前にあつた机を叩いて立ちあがつた。ひょっとしてふざけてるのか？この人は？

「俺はこの血を保つための入れ物じゃない！俺は俺だ！この血が滅びた処で、あなたにとつてはどうでもいい事でしょう？最初から無かつた事になるだけだから」

「……すいません。失言でした。話はもう少しで終わりますから、もう少し辛抱していただけませんか？」

「それで、貴女は俺にどうしてほしいんです？俺にそのトーナメントに出るとでも？あれは世界中の人々が予選に勝ち残つて出来る物でしょう？今からでは遅すぎるでしょう」

「そこで支部長にお願いがあります。確か東京支部は前回の大会でベスト4に入つていましたよね？」

「ああ、そういう事か。ベスト4に入った支部は次の大会で一人だけ特別選手を選ぶ事が出来る権限を得る。それを使ってこやつを出せ、と？」

「はい。それにこの大会で優勝すれば、一桁ファーストナンバー数字の人に挑戦する権利を得ることができます。いかがでしょうか？出でいただけますか？」

「……やつましょつ。優勝すれば俺は一花と戦える権利を得られるんでしょつ？」

それなら、俺は一向にかまいません」

「それでは交渉成立、という事で。ちなみに優勝したら婚約してもらいますから」

それは結構嫌なんだけど。まあ仕方ない。一花と戦う権利を得られならば、と俺はうなずいていた。結構嫌そうな顔をしながら。

事前交渉（後書き）

短いかもしませんが一話目の連続投稿です。
ここからは～世界代表トーナメント編～の開始です。どうぞお楽し
みください。

帰宅（一）

「それでどうして」「うなつたんだ？」

話し合いも終わり、俺は久しぶりに家に戻ってきた。俺は基本的に家にいない。俺が受ける任務は、大体泊まりがけな物が多い。そこまでは別にいい。いつもの事だからな。

「なんであなたが俺の家にいるんですか！？真由美さん！」

「え？ 何かおかしいですか？」

「いやおかしそぎでしょ！ 俺とあなたは少なくともまだ、婚約者でも何でもないんですから！」

「じゃあ泊めて下さい。宿泊とかお世話になるつもつだつたので」「俺の家は宿泊施設じゃないんですよー？」

何考えてるんだこの人は？ あり得ないけど、もし間違いとかが起つたらどうするんだ？

それとも前の婚約者さんが相当な紳士だったのか？ しかしギルフオードさんも止めるとかしようよ。なんで普通にOK出しちゃつてんの！？

そんな事を考えていると、玄関が開く音がした。このタイミングでドアが開くといつは事はまさかー！？

「ただいま、兄さん。あれ？ お客様？ 邪魔だつたら部屋にひっこんどくけど？」

「頼むから残つてくれ。明美。^{あけみ}後この人をお客さんとは俺認めてないから」

「ふーん。まあどうでもいいけどね。はじめまして、千葉明美^{あけみ}と申します。といつても旧姓は乾ですけどね」

「あ、これはどうも」「寧に。はじめまして、神崎真由美と申します」

す

「もう聞いたやいないな。神崎さん、客間でいいですか？基本的に用事があったら、明美に言つてください。俺は基本的に地下にこもつてるので」

「地下？」この家、地下もあるんですか？」

「正確に言つと地下じゃないというか……。それは置いといて、客間はこちらです。明美、お前自分の部屋片付けとけよ。お前この家に自分の荷物を送つてくるな。面倒だからな」

「でもあの家には置いとけないし。それにいいじゃん。もうすぐ私もこの家に戻つてくるんだし」

そういう問題じゃないんだけどな。俺の家は二階でもあります
な一階建ての家だ。

コニットバスに洗面所と客間。それに俺と明美と姉貴の部屋。もう使われてないけど、両親の部屋。あと台所と居間。他はほとんど物置状態だ。

そんな事を考へていると、客間に到着した。俺が客間のふすまを開けると、そこは和室になっていた。両親がこの家を建てる時に客間は和室にする、と言つていくなつたらしい。

「はい、到着。まあ、基本的に好きにしてもうつても結構です。なんせ全然使いませんからね。俺はお密さんとか基本的に呼ばないし、明美は千葉家に行つてますからね」

「あ、その事を聞こえうと思つてたんですよ。どうして千葉家に行つてる妹さんが、この家に戻つてきてるんです？」

「この時期だからですよ。大事な行事があると、千葉家は忙しくなりますから。それで帰郷つてかんじで戻つてくるんですよ。それにもうすぐ期限ですね」

「期限？何か約束でもしてるんですか？」

「明美が千葉家に行つたのは小学四年の時でその当時、俺は高校生でした。

俺の力と財力で一人分の学費を捻りだすのは不可能に近かつた。
そこで俺が大学を卒業し、社会人となつて養えるようになつたら、
明美を乾家に戻すつていう約束をしたんですよ」

「なるほど。あれ？でも確かお姉さんがいらっしゃったのでは……？」

言えないよな。もうその当時から行方不明だつたとは。正直な話、
行方不明なのはいつもの事だつたから捜索願とか出してないしな。
たまにふらつと絵手紙をよこすけど、それどこのだよみみたいな絵手
紙だからな。ぶつちやけ全然場所がわからん。

そんな事を考えていると、ちょうどチャイムの戸が鳴り響いた。
宅配便がなんかか？

「兄ちゃん。お客さんだよ。それも超大物」

は？超大物のお客さん？しかも俺に？いつたい誰だらつと思いつ
つ、俺は玄関に向かつた。

帰宅（1）（後書き）

全く関係ない話が後もう少し続きますがご容赦ください。もう数話で戦闘シーンも入れていきたいと思います。それでは後程、また会いましょう。では！

帰宅（2）

「なるほどな。確かに前の言つ通り、超大物だつたな」「でしょ？いや、ドアを開いたときは驚いたわよ。え！？なんでここに！？ってかんじでさ」

「それでどうしてあなたたちがここにいるんです！？」一花さん、二木さん、三橋さん！

「え？一度君の家について見ようかなと思つたから」

「まずい物でも置いてあるのならまだしも、別に構わないだろ？？」

「それに連絡なんか入れたら、断られるのは目に見えているしサプライズ的な？」

なんだその理由は……。この三人は一桁数字のトップ。55555
ンカーだ。

前に説明した一花花連さん。二木御剣さん。三橋白枝さん。この三人だ。

基本的にこの三人が戦闘に出てくる事はない。ほとんど行事ごとにしか出てこれない。いや、出れないと言つた方が正しいか。力が強大すぎて同じ前線に建てる人がいないからだ。

三人は神の魂をその身に宿す者だ。

一花さんは北欧の主神、オーディンの魂を。

一木さんはギリシャ神話のオリュンポス十二神のトップ・ゼウスを。
三橋さんは日本神話のトップ・天照大神を。

それぞれの魂を宿している。そして前に単語だけ出てきた神話兵器も持つている。

一花さんはグングニルと二ベルングの指輪を。

一木さんは雷霆ケラウノスと金剛の鎌を。

三橋さんは天叢雲剣を。それぞれ持つている。

「それで部屋はどうするつもりなんですか?」この家に三人も泊める部

屋はありませんよ。客間は真由美さんがいるし上

「小説の批評」由坂山舞櫻著　一九四〇年

—それなら花連と白枝を神崎嬢と一緒に客室にして

で廻る。これでどうだ？

廣雅

「どうだ？ じやないでしょ……。客間はあいにく一人までです。そ

ノルマニ

「おまで応へない」

「それなら妹君か姉君の部屋に分けるといふのは……」

「用意の如きは行方不明成ツ一々、市販の如きは主に

明美的部屋は荷物満載だし、姉貴の部屋はそもそも俺じや開けら

「はー。なんか形式がちがうみたい。」

れなし
なんか術式かにてるか云た
そへでなくでせんのいふに思

わんが

卷之六

「それではどうすればいいのだ？」

出で行こでやふかのれんですか…… しょ二かなし あ

の部屋を開けるとするか

卷之三

「あの部屋とほどの部屋の事だ？」

「今は亡き……両親の部屋ですよ。掃除以外では開けたことないん
ですけどね」

俺は一花さんと三橋さんを両親の部屋まで案内した。両親の部屋のドアに手を掛けると

ドクンッ！－！－！－！

きたよ。この肺を絞められる感じ。両親を失われた時から出でる俺の発作だ。その息苦しさを意志の力でねじ伏せ、ドアを開いた。そこには少し埃っぽいが、それでも昔と同じ状態であつた。俺は少し安堵しながら、三人を招き入れて即座に部屋を出た。同時に発作も止まつた。

「どうかしたんですか？」

「ちょっとした発作でね。息できなかつたんですよ。ひょっと待つて下さい」

「うん。それでこいつ使ってもいいの?」

「……構いません。使われた方が両親は喜ぶと思いますから」「できるだけ、そのままにしておくね。こいつは時間維持の魔術がかかつてるから無駄みたいだけど」

分かつてたのか。さすがだなと思いつつ、なぜか俺は気を失つた。

帰宅（2）（後書き）

一番田の投稿です。面白いところのですが。それではもう一、二話
おじょうともこまか。では。

眼を覚ますとそこは、居間のソファの上だった。意識を失う寸前の事を思い出し、ため息をついた。体を起こすと、明美が立っていた。

「起きた？ 兄さん」

「なんとかな。俺どんぐらい寝てた？」

「一時間ぐらいだよ。もうすぐ」飯もできるから早く動いてよ」

「「」飯？ 誰が作ってるんだ？ お前……なわけないか。それじゃあ二木さんか？ あの人料理めちゃくちゃ美味しいからな」

「本人を目の前でそこまで言わなくともいいじやん。作ってるのは三橋さんだよ。試食させてもらつたけど、なかなか美味しかったよ

あの人料理できたんだ……。俺はなぜかそんな微妙な所にショックを受けていた。そして食卓の方を見ると、確かに食欲をそそる匂いがした。これは期待できるかもしれないな。

そんな事を考えていた数時間後、俺はコーヒーを淹れていた。めちゃくちゃ美味かった。二木さんとの遜色が無いぐらい美味かった。俺は淹れたコーヒーを持つて階段の最初の段の所で止まり、地面を叩いた。魔力を纏わせてな。すると地面から不思議な扉が出てきた。そこをぐぐると、俺の研究施設がある。

あの扉は、この地下の空間のゲートの役割を担っている。このゲートを出現させるには、ある一定量の魔力を纏わせて地面を蹴る必要がある。多すぎても少なすぎてもだめ。通った後には、あのゲートは消える。

俺はコーヒーをすすりながら研究所の扉を開けて椅子に座った。目の前に置いてある資料を眺め始めた。ついこの間、支部長にもらった資料だ。タイトルは『新魔法の開発の危険性について』。

「ここは別に俺が作った訳じゃない。ここを作ったのは俺の両親、乾莞爾いぬいかんじと乾瑛美いぬいえいみ。両親はとある魔術の研究の為に、この研究所を作った。

俺がちょうどコーヒーを飲み終えたころにゲートが開き、明美が入ってきた。何の用だ？

「兄さん、ちょっとといいかな？」

「ん~？ 何か用か？ 明美。つていうか皆には伝えてあるのか？」
にいるつて

「もちろんしてきたわよ。それでさ、ちょっと相手してくれない？
どれだけ兄さんに近づけたか、知りたいし」

「構わんぞ。武器は持ってきてんのか？」

「模擬戦みたいなものなんだから、木刀でいいでしょ？」

「真剣で来られても困るがな。多分折っちゃうから」

俺は拳から音を鳴らしながら、修練場に向かった。明美は木刀を下げながらついてきた。

地下施設（後書き）

はいこままで行きました。次の話では妹・明美との試合です。最も試合では終わりませんが。（にやり）というわけでお楽しみに！

妹との対戦

「それじゃあ準備はいいか?」

「いつでもOKだよ。兄さんこそ籠手と木刀だけでいいの?」

「まずは様子見。前は開放させるまではいたなかつただろう? お前がどれだけ成長したかも知りたいしな」

「その考えをすぐ否定させてあげるよ」

俺は木刀を一本と籠手を顕現させ、明美も木刀を一本構えていたが、こちらは背中にさらに一本引っさげていた。どれだけ使う気だよ。

俺たちは同時に構えてそれから一分近く、固まつたままだつた。動き出したのも同時だつた。

俺は単純に振り下ろし、明美は突いてきた。力のかかるところを突かれた所為で、俺の態勢が崩された。

こんな隙だらけな状態を攻撃しないわけがない。予想通り明美は突っ込んできた。俺はバックステップの要領で蹴りを顎に叩きこもうとした。

もちろん千葉家でてほどきを受けているんだりつ。地面を蹴つて後ろに下がつてかわした。面倒くさいな。

「さすがは『天皇剣』^{てんおうけん}と恐れられる千葉家だな。戦闘をよく理解してる。あそこに住んでいるのは伊達じやない、つてことか。成長してるよ。確かにな」

「いや、普通に攻撃してる人に言われても説得力無いし。それに顔が余裕で満ち溢れてるよ」

「この程度で一撃もらひのような、甘い鍛えかたはしてないからな。それにしても楽しいな。まさかここまでしてやられるとは」

俺はもう一度動き始めた。さっきは直線だったが今度はジグザグに。あいつにはもう、俺が地面を蹴っている所しか見えていないだろ。今回は身体強化の術をかけているからだ。

俺は強烈な突きをものすごい速度で放った。ぎりぎりの所で気づいたんだろう。木刀で受け流しつつ、もう一本の剣で撃ちこんだ�다。

確かに技術としては凄い。だが、そんな物を俺が許すわけがない。膂力だけで吹き飛ばした。その勢いに乗り、一気に後ろに後退した。

「兄さんいきなり本気出し過ぎだよ。左手痺れちゃったよ。これは私も本気を出さないわけにはいかないね」

「ほう、俺に手加減できるぐらい余裕だったと。それならもっとギアを上げた方が良いかな?」

「そういう問題じゃないんだけど、ね」

何をするかと思えば、背中にかけていた一本の木刀と片手に持っていたものと吹き飛ばされたもう一本が震えだし、明美の両手に集まりだした。ちょうど獣の爪のようだ。

おそらく魔力で運動させてるんだろう。そしておそらくその剣の軌道は自由自在。どうやっても読めないだろう。なるほど確かに剣士にこれは致命的だな。突き、払い、薙ぎ、捌く。これがより難しくなるのだから。

「だけど甘い。その程度分からぬ筈が無いだろ。天衣無縫と謳われていた母さんに剣を教わっていた俺が」

「そうだね。私も兄さんも母さんと同じ千葉家の血が流れてる。そして母さんはその純血で歴代最強の剣士だった。その母さんに直接教わっていた兄さんにはぬるいだろ? それでも!」

明美は剣を連続で撃ちこんできた。俺は全てを弾き続けた。

そして千日手のように果てしない打ち合いが続いた。だけど、体力ではなく振るつていた剣の方に限界が来た。

そりやあ、本来の剣の一倍だからダメージ量が蓄積されてしまう。俺の力を受け止めてるってのもあるしな。俺の木刀の両方ともがほぼ同時に砕け散った。

好機と見たか、俺に同時に打ち込んできた。俺は鎧を顕現させて同時の攻撃を全て捌いた。まさか全て捌かれるとは思っていなかつたのか、隙だらけになつた。

俺は拳の力で空間をふるわせることで、明美を氣絶させた。ふう、まさかこんな力を使うはめになるとは。俺は氣絶しているが、楽しそうな顔をしている明美の頬をなでた。

妹との対戦（後書き）

はい、兄ＶＳ妹の構図でやつてみました。最後が簡単すぎるだろ
か文句はあるでしょうが、楽しければそれでよし！なので面白けれ
ばOKです。できればもう一話できればいいなと思います。では！

「あれ? ここは?」

俺は研究室のソファで寝かせて、俺は資料を読んでいたんだがどうやら起きたようだ。

「起きたか。具合はどうだ?」

「あ、兄さん。ちょっと気分が悪い以外は何もないよ」

「それならよかつた。ほい、ちょっと冷めちまつてが紅茶だ」

「あ、ありがと。……ところで兄さん。最後に使ったあの技は何?」

「ああ、あれが。あれは震脚の要領で作った技なんだがな。そうだな『空震』ってところかな?」

「鎧通しじゃないから何かと思ったら、新技? 全くあきれちゃうわね」

声は軽いけどな。こうして明美と試合をするのは、正月以来だ。丁度今は五月。大体四カ月ぶりってところか。……あんまり時間経つてないな。

しかし千葉家に預けたのは間違いじゃなかつたか。ここまで育つとはな。あそこは政治にあまり興味が無い。^{エクストラ}番外と呼んでいるのもう外部だけで、あそここの本来の呼び名は『天皇剣』だしな。

「お前こそなんだ? あの技は。柄尻と魔力によつて連結されるところはわかつたんだが……」

「大体それで正解だよ。あとは私の技量の問題になる、って言われたしね。まあ、兄さんの鎧姿も見れたし、これはこれで満足だけどね」

「やつがい。お前に鎧姿を見られる日が来るとはな。」れも時の流れってものなのか」

「兄さん、ちよつと爺ぐわこよ。そんな」と言つてると禿げるよへ。
「禿げねえよ！全く失礼な奴だな。それでもお前は強くなつたよ。
母さんだつて誇らしく思つてゐた」

「……ほんとにやつ思ひへ？」

「思ひよ。俺が母さんや父さんとの事で、嘘なんかつく訳無いだろ。
お前は誇つていこんだよ」

「……うん」

やつことと、明美は静かに泣き始めた。俺は隣に座つて静かに頭をなでた。すると顔を上げて泣き始めた。それでも俺は静かに撫で続けた。

「ありがとう、兄さん。いま思い出したけど、私今度のトーナメントに出るんだ。よかつたら見に来てね」

「それ、俺も出る事になつた。とある依頼でな」

「それじゃあ、もしかしたら予選で当たるかもしれないね」

「いや、それはない。支部長推薦で予選突破のシード状態から始まるらしー」

「ええー。なんかざるーい。それ誰からの依頼なの？」

「さすがにそれは言えないな。まあ、お前の試合は応援してやるから。頑張つて本戦まで残れよ」

「ふつー。分かつてるよ。兄さんも本戦で負けないよつこねー！」

「俺が負ける訳無いだろ。優勝者にはHキシビシヨンマッチの権利が得られるらしいからな」

「Hキシビシヨンマッチつて……やつぱり一桁数字の？」

「やつやそうだ。俺がそれ以外で燃える訳無いだろ？」

「ああ、やつやそうだね。やつぱり本命は一花さん狙い？」

「の人ほど強いのはそつとくこないしな。当面やつぱり一花さん

かな

「ふーん。まあ頑張つて。それじゃあお先に。おやすみ」

「ああ、おやすみ。お前明日学校だっけ。それじゃあ朝食用意して
いてやるよ」

わーい、とか喜びながらゲートを開いて帰つていた。俺はこの後、
日付が変わるまで研究室にこもつて魔術の研究をした後、自分の部
屋に戻つて寝た。ちよつと一木さんを蹴つてしまつた事は秘密だ。

家族の談話（後書き）

今日はこれで終わりですが面白かつたらいいな、と思います。それではまた明日も頑張っていきましょう。僕も頑張らつと思いませんので。では！（^――^）／

あれから数日が経ち、この日を迎えた。つい。トーナメント当日を。とはいっても今日は予選だけなんだけど。

「皆さん、お待たせいたしました。ここに世界代表トーナメントの開会を、宣言致します！」

「ウオオオオオオオオ……ツ……」

「この行事」との為だけに作られた国立の特別ドームに、もう隅から隅まで人、人の山だ。ちなみにこのドームは最高十万人近くの人を収容できるらしい。

そんな事を言っている俺は現在、特別選手用の席に着いていた。今日一日、ここから見ているとの御達しだ。面倒だな。

「面倒くさそうな顔してるね。そんなにここに居るのが嫌なのかい？」

「確かに面倒だけど、別に嫌つて訳じゃないよ。そういうお前は平気なのかい？レジル」

「そりやあ僕だって暇だけど、まあ役得つて事でいいんじやない？こちらの手の内を明かさずに、相手の実力がわかるんだから」

「何か黒いぞ。大体ここに選ばれる人間は、そもそも能力も実力もばれてるだろ？」

なあ、そうじやないかい？『四元素』殿？^{フォースエレメンツ}

「その呼び名は嫌いだよ。そんなこと言つてるなら僕もこう呼んじやうよ？『白銀の神狼』君つてさ」

「ああ、それは御免だな。ところでどうしてここに俺ら三人しかいないと思う？っていうか黙つてないでお前も喋れよ。ジエルザ」

「別にいいでしょ？静かにしてたつて。っていうかレジルはまだし

も、なんで慎也もいるわけ？」

「……ちょっと事情があつてな。そこはあまり突っ込まないでくれ
「そつ。それなら構わないわ。もう始まるわよ。ちやんと見てなさい」

「へイへイ、わかりましたよ、つと」

この二人は前回大会で四位と三位になつたレジル・ハルベスと、
ジェルザ・ヘレウス。とある任務で一緒になつて、そこで話して意
気投合した。今やすつかり友達だよ。

レジルの二つ名は今説明した通り『四元素』^{フォースエレメント}。四元素、つまり炎、
水、風、土の属性を自由に操り、混合させたりして使う所からその
二つ名がついた。

ジェルザは『黒銀鉄鎧』^{フュルミカネルナ}。文字通り黒銀色の鎧をもう自由自在に
操る技術を有している。

俺はもうまんま過ぎだろといつ『白銀の神狼』だ。俺が鎧を纏つ
て走る姿から、神喰狼が連想で来たから付いた、そうだ。そりや神^フ
喰狼身に宿しますから……。

予選はバトルロワイアルによる数減らしと一対一の試合形式のこ
の二つを行うらしい。この予選参加者、千人ほどいるらしいからな。
縛りが特に無い所らしいが。

「お、彼女とか強そうだね。あそこで双剣使つてる彼女」

「ん?……ああ、ありや俺の妹だ。おい見ろよ、あの盾持ち。ひよ
つとして『無敵防御』^{ガードナ}じゃないか?」

「え?あ、ほんとだ。彼の防御破るのつて難しいんだよね。ああ、
可哀そうに。向かつっていた人達皆、吹き飛ばされてるよ。あれ攻撃
全部跳ね返すからなあ」

「ある意味チートだよな。まあ跳ね返せるのが物理攻撃だけなのが
唯一の救いだが……」

「そうだねえ。ねえジェルザ、あれ誰かわかる?あの黒い剣振るつ

てるの」

「あれは『黒帝剣』でしょ？さすがは世界代表トーナメント。今年は一段とレベルが高いわね」

「ああ。ざっと見ただけでも、有名な奴らが大量にいるし。これ何人になるまでやるんだっけ？」

「確か僕たちシード組合させて三十六名だから……三十二人だね」

「この分なら早く終わりそうだな。本戦の方が時間がかかりそうだし。予選三日、本戦を一週間ぐらいかけてやるんだっけ？」

「そうね。そうそう簡単に負けないでよ？あんたらと戦える機会なんてそうそう無いんだから」

「「もちろん。あたりまえだろ（でしょ）？」

俺たちは予選の観戦を尻田にこんな約束をしていた。結局この日は最後まで、最後の残る一人は来なかつた。いつたい何があつたんだろ？

予選初日（後書き）

できるだけ毎日一本のペースで書いていこうと思いますので、よろしくお願いします。昨日のユニーク数が百人を突破して気分がハイになってるあかつきいろです。

そんなわけで始まりましたよ、世界代表トーナメント。主人公や仲間たちの活躍を描いていこうと思いますので、どうぞお楽しみください。それでは、アディオス！

本戦第一回戦（1）

あれから二日後、つまり本戦の日を迎えた。俺たち三人は一緒に会場に入った。

予選でも思つたけど、盛り上がり過ぎじゃね?」ぐら二年に一回しか無いとはいえ。初め訊いた時はオリンピックのパクリか!と思つたが。

俺たち三人と観戦会に来なかつたシード組最後の一人、なんでもその人が九条たいと前は確か泰斗たいとだつたかな？四人が指定の位置に立つた。つまり、真由美さんの元婚約者らしい。名

すると戻が光り始めたりまでの文字が「ンタム」は表示され始めた。なんだこれ？

一分後には文字の動きが終わり、俺の足元にはCの文字が表示された。レジルはD。ジェルザはA。九条さんはB。

「各ブロックのシードが決まりました！」

Aブロックのシードはジヨルサ・ヘレウス！Bブロックのシードは九条泰斗！

ベス！」

一つを読むごとに歓声が上がった！ そんなに声を上げられるほど有名か？ そして残り三十二名のブロックの抽選が始まった。今日はAブロックの一回戦をやるらしい。

とするや。そんな事を考えていた俺の目の前の人人が立っていた。

「何か俺に御用ですか？九条泰斗殿？」

「その話し方は瘤に障るな。止めてくれるかな？」

「それは構いませんが。それでどんな御用なんでしょうか？」

「いえ、ただ私と争う事になるライバル殿の顔を拝んでおこうと思いまして」

「そうですか。それでは失礼します」

「ええ。……貴方にだけは決して負けません」

好きにしてくれよ。俺にとつてはそんなことはどうでもいいんだから。ただ俺の目指す物は優勝して一花さんと戦う。ただ、それだけなんだから。

「始まつたか？」回戦

「もうすぐだよ。それにしてもいつたい何したのさ。あの……九条君だっけ？ライバル指定されるなんてさ」

「ちょっととした私用だよ。それで一回戦の相手は？」

「千葉家と八市家の次期党首同士の対戦だよ。剣の一族と風の一族同士の対決だ。初つ端から面白くなりそうだね」

「番外と一桁同士の対決か。そりや面白そうだな」

八市家が風の一族と呼ばれているのは風を読むのが上手く、弓矢の技術が半端じゃ無かつたからだ。だがバトルフィールドには風がない。そう思ついたら……

「え？ 戰闘つて異界でやるのか？」

「そりやそうだよ。この大会はあくまで実践としての技術を図るのが目的なんだから。それにこのまんまじや千葉家が有利すぎでしょ」

「そりやそりや……なんだかな？」

「ほらもう始まるよ。これを見ない手はないでしょ」

えーっと、フィールドは草原？これはハ市家の方が有利過ぎじゃないかと思つたら、千葉家の次期党首……確か竜次だつたか。開幕当初に草を全部切り払いやがつた。つぐづく思つてたがバケモンだな。

ハ市家の方は女性で佳奈実つて名前だつた。佳奈美さんは懐から一本の弓を取りだし、それを展開し始めた。そんな隙だらけの状態を放つておく訳が無い。竜次君は走り出した。

すると地面に魔法陣が展開され、そこからまるで台風のような烈風が吹き乱れた。当然、竜次君は後ろに下がつたが瞬時に考えを変え、烈風に向かっていき風の魔法をぶつた斬つた。

「うわあ。あんなのあり？」

「刀剣を持たせれば千葉家の人は間は全員化け物だからな。あれぐらいの芸当、訳ないさ」

「それにしたつて魔術を斬るなんて、僕にも出来ないよ？」

「お前何さまだよ……。あそこの人間を同格で見ない方が良い。あそここの鍛錬はアホみたいに刀剣にどっぷり浸からせるからな。あそこの党首にはいまだに勝てない」

「ところでハ市家の人が出した弓つて神弓かな？」

「間違いないだろ。韓国と朝鮮の伝承を持つ弓。これは予想以上に面白くなりそうだ。」

あの刀はおそらく称々切丸だ

「勝手に出て行つて妖怪を斬り殺すことで有名な？」

「そつ。でも、あの刀は退魔の力が強い。魔力で作られてる魔術は、相性が悪い」

はさて、この戦いの行く先はどうなるかな？

本戦第一回戦（一）（後書き）

「そりいえば慎也」

「なんだ？」

「ジョルザはどうにいるの？全然姿が見えないんだけど」

「……お前、それジョルザに会つても言つなよ？」

「なんで？……あ」

「思い出したか？あいつなら多分、トイレスでうずくまつてゐるのを」

「そりいえばジョルザってめちゃくちゃフレッシャーに弱かつたよ

ね」

「……」

本当に大丈夫かな？あいつ。

本戦第一試合（2）

剣と弓の激突は続く。神弓^{シンクン}と称々切丸。どちらもそれなりに有名な武器なだけにスペックはほぼ互角。後は持ち主の力量の勝負。

「魔力を乗せて撃つてるね。普通ああいう類のは加速されてるから、弾ける訳無いんだけどな。見事に弾いてるよね、彼」「だから同格視するな、って言つてるだろ？彼の持ち前の動体視力だろう。あそこは感覚に頼る人が多いからな。そこを潰されたら終わりだ。それでもどうにかしちまうこともあるんだよな」「まあ近づいてもかわされてるしね。そろそろ終わりも見えてきたかな？」

「さあな。ただ言えるのは……」

「言えるのは？」

「そんな簡単に終わるほど、千葉家の剣士は甘くないってことだ」

事実、矢の感覚も掴んできているんだろう。捌く技術が上がつてる。突然竜次君が加速した。捌くのを止めて攻勢に転じるようだ。

もちろんそれを黙つて見過ぎ^{すば}すほど、佳奈美さんも甘くない。三本を同時に引き絞り、放つた。もちろん魔術を掛けて。

竜次君がそれを切り払おうとするが、矢が勝手に動き剣撃をかわした。無理矢理体勢を変えて、矢をかわしたのはいいが、その矢が追ってきた。

「まさかあれは、追尾術式？そんな馬鹿な！？」

「現代の魔術の技術で不可能とされた追尾術式……。それを開発してたつていつのか？そんな事が出来るほど八市家の技術水準は高いのか？」

「それでもだよ！いくら技術水準が高かるうと、魔力の持続性の問題で術式は完成してないんだよ！？それなのに、どうやって解を見いだしたって言うんだよ！？」

「とりあえず落ち着け。何かヒントがあるはずだ。何か……」

竜次君が肩口に目を向け、何かに気づいたような顔をした後矢に当たる寸前で刀を振った。そしてそれをかわすと、矢は竜次君の後を追つてこなかつた。

「まさか……」

「何かわかったの？」

「あれは追尾術式じゃなくて、ワイヤーか何かひっかける物で追いかけてただけなのかもしれない。

追尾術式は無くとも、その速度を維持し続ける事だけならできる。そうだな？」

「ああ、うん。でも盲点だったね。まさかワイヤーの類を使うなんて……」

「確かに戦術を試すにはいい技だな。たいていの奴はお前みたいに動搖して、その間にやられちまうからな。ある意味で千葉家が刀剣一択だつたのが良かつたな。魔術を下手に齧つてたらやられてたぞ」「うん。一人ともすごいよ。そんな案を実行するハ市家の人も、それを見破った千葉家の人も」

「今回は確かにレベルが高い。こんなのが一回戦から当たるんだからな」

竜次君が足に力を込めていた。何かと思ったら肉体活性の術式を使いだした。つて、はあ！？

「なんで魔術使つてんだよ！？」

「確かに。一回戦から驚きの連発だよ。一人ともすげえぞ！」

一気に距離を詰め、竜次君は一応刀の刃は刃抜きしているとはい
え、あれだけ強烈に叩きこめば肋骨の一本は少なくとも折れている
だろう。

これで一回戦か。これは今回の大会、参加できてよかつたかもし
れないな。

本戦第一試合（2）（後書き）

もう今日中にもう数話になりますので、よろしくお願ひします。トーナメント編、本格的に始動し始めました。面白こと思つてくれるといいな、と思います。では。

▲プロシク終了

本戦の最終試合は明美とナルジア・ベクセン君だった。

「妹君だつたつけ？あの子」

「ああ。まあ、相手の力量を見る限り大丈夫だろ」

「あれ？結構余裕だね。つていうか相手の子の試合、見てたの？」

「うんにゃ、見てねえよ。でもわかるよ。ちゃんと見てれば、な」「なるほど。彼の霸気を見ていた、と」

まあ、そうでなくとも実力が伴っていないのはわかる。いや、ここに残るぐらいいだから強いんだろうけど、明美と同等とはいえない。明美は試合開始と同時に攻め立てた。ナルジア君は槍使いらしく明美の剣戟の全てを辛くも凌いでいる、という状態だった。ありやあ、長くは持たないな。

「あ、吹き飛ばされた。残念だつたね。昨日の疲労が取れてないのかな？」

「そうだとしても負けてちゃ話にならねえだろ。つていうかほんとにあいつ戻つてくるのか？」

今日あいつの出番が無いのひょっとして忘れてんじやねえの？」

「ありえるありえる。でも、別に問題無いんじゃない？残らなきやいけない、なんて取り決めは無いんだから」

「それを考えると、俺らはよほどの暇人だよな。ずっとこんなところに残つてるんだからさ」

「別にいいんじゃない？そのぶん面白い試合も見れたしヨロツヒコトで」

「ん？試合終了の笛がならないぞ。何やつてるんだ……つて、え？」

なんと試合はまだ続いていた。ダガーを一本持つて明美と打ち合っていた。その剣捌きは素晴らしい美しい、の一言に及きた。でも……。

「ただ綺麗なだけだ。実力は変わらないな」

「うん。それよりは彼女の剣舞のほうが綺麗だし。全体的に負けてるよね」

「ああ。最後にあいつの剣舞を見たのは一年も前だけ……やつぱり綺麗になってる。あんだけ綺麗だとはな」

「妹さんが成長した姿はどう?」

「あいつは俺や母さん達の誇りだ。よかつたな、と思つた。あの時あいつを千葉家に預けたのは間違いじゃなかつたんだ、と思つよ」

最後は側頭部に蹴りが入つて相手が氣絶して試合終了。あいつが笑顔で手を振つている姿を見ながら、これまでの色々な事を振り返つていた。

あれから五年、いろんな事があつたけどここまで来た。それは無駄じゃなかつたんだと思う。俺はもっとと強くなる。俺の身の周りの人ぐらいは、守れるようになるために。

そう決意を改めながら、俺は自慢してくる明美を連れて家に帰つた。

▲プロlogue（後書き）

はい本日二番目のことでした。楽しんでもらえてますか？それでは次の話を書こうと思います。では。
あ、祢々切丸はジャ○プの某作品の影響で出したわけではありません。あしからず。

その日の夜

「ねえねえ兄さん。私の活躍はちゃんと見ててくれた?」

「見てたって。でもなあ、いかんせん相手と実力差があり過ぎだな」「あ、やっぱり?なんか弱いなあって思ったのよね。失礼だからその場では何も言わなかつたけど」

「控え室に着いたらほそつと咳いたんだろう?」

「イグザクトウリイ!分かつてるじやない、兄さん」

「まあな。家族なんだからそれぐらいわかつてるつて」

その日の夜、俺は明美と居間で喋っていた。俺の家の風呂は異界に繋いでいるから結構広い。

二木さんは武器 金剛の鎌の手入れをしている。残りの三人 真由美さんと一花さんと三橋さんは今風呂(つていうかもう温泉)に入っている。明美も入っていたんだが、先に上がつたらしい。

俺はというと、紅茶を飲みながら菓子を摘まみつつ小説を読んでいた。もちろん俺だつて読書の一つや二つはする。とはいっても基本的に薦められた物だけなんだが。

そしてちょっとと読んでいると、明美に紅茶を淹れてくれとねだられたので、淹れてやつた後今の状態に至る。

「――上がりました――」

「やあ、湯加減はどうでした?」

「気持ちよかつたですよ。でも、いつも入つてるわけじゃないんですね?異界だから電気代とかからないし」

「ええ、まあ。俺はいつもこの家に帰ってきてる訳じゃありませんから。気にいつてもらえたのなら何より、ですけど」

「いいなあ、あそこ。なんというか肩こりみたいな物が無くなつて

いくし。何より、気持ちいんですねえ

「そりそり。あれで全然使ってないだなんて勿体なさ過ぎですよね

！」

「確かに。まあ、この家に戻つたら存分に使わせてもいいつよ。今から楽しみになつてきたなあ」

「明美ちゃん、ずるーい！私ももつと入りたーい！」

なんじやこには……。面倒だな、と思いつつも何も言わずに黙つて俺は紅茶を飲んでいた。空になつたんで俺がティーカップを片付けようとすると、真由美さんが話しかけてきた。

「あの、その紅茶私ももらつていいいですか？」

「え？ 別に構いませんが、ちょっと待つてもらつてもいいですか？」

「構いませんけど……何かあるんですか？」

「いや、単純に淹れる時間が欲しいというだけなんですが……」

「なにそれ！私も欲しい！」

「頼みますから落ち着いて下さい。一花さん、完全にキャラ崩壊を起こしますよ」

「別にいいじゃん。だからほら、早くー」

「はいはい。三橋さんもります？」

「うん。それじゃあお願ひしようかな」

この後紅茶を淹れて俺は一木さんと一緒に風呂に入つた。上がつて五人と合流すると、置いといた酒を開けたらしく、完全にできあがつていた。この四人に絡まれつつ、俺と一木さんは騒がしい夜を過ごした。

その日の夜（後書き）

おやじく本日最後のコマです。明日から「田中なべ」を書いてこまが
す。それではできればまたお会いしましょう。では（^-^）

本戦 | 日田 (一)

翌日、Bブロックの第一回戦。これまた見逃せない対戦だつた。ひょっとして最初に釘付けになるような組み合わせになつてんじゃね？

「『白皇帝剣』対『黒帝剣』か……。さすがにこれを見ない手はないでしょ。そりの合わない事で有名な二人の戦いに決着がつくかもしないし、や」

「両方とも三十戦十四勝十四敗一引き分け……だつたかしら？ よくやるわよねえ」

「同じ流派だつていつのもあるんだらうけど、やつぱり方向性の違いが大きいんだろう」

「皇帝の白と黒、か。師匠さんも大変だね」

「あそここの師匠も千葉家だぞ？ 正確に言つと、千葉家で免許皆伝を受けた人だ」

「昨日も思つたけど、千葉家の人はいい加減にした方が良いんじやない？」

「そんな事を俺に言われてもな……。あの一人は名前は有名だけど、ランクは俺と同じうだからな。
まあせいぜい楽しませてもらひます」

とは言つたものの、やはりビートなく心配だ。なんせあの二人の戦いは白熱すればするほど苛烈になつていいくというか、防御をもつ完全に無視するといつか。要するに血みどりになる。

あんたらは戦国時代の武士か、と言わんばかりにぶつかりあつ。いざとなつたら止めるために乱入するのを覚悟しなきゃいけないかも。

そんなんはさらした心理状態で、俺は画面を見ていた。今のところ

る、一人ともそんな状態ではない。まあ最初は小手調べが基本だしな。鍔迫り合いながら動きまくっていた。

ぶつちやけもう一般人の眼には、ぶつかった瞬間に人影と火花ぐらいしか見えていないだろう。「愁傷様。

知っているかもしぬないが、本来そんなに鍔迫り合う事はない。使用者よりも刀や剣の方が持たないからだ。だが、実力が拮抗しうきるところという事が稀にある。それでも稀な事だが。

『やはりこうでなくては面白くないな！さあ、ここからギアを上げていって、果たして貴様についてこれるかな？』

『はっ！馬鹿げた事をぬかすな！ついてくるどこのか追い越してやるわ！』

ああ、熱が入っちゃった。こりや止めるのも苦労するぞ。

それぞれが築いた技術をさらに練り上げた技同士が花を咲かせる。白皇は己のスピードを。黒帝はその連撃を突き破る一撃を。それが連発されてる。あそこの異界のフィールドがとてもない速度で破壊されてる。

このまま放つておいたら、一人共異界の狭間に落ちておじやんだな。さて委員会はどういう判断を下すのかな？そう思つてみると、滅多なことでは開かない後ろの扉が開いた。

「何か用か？クソ爺」

「あつた途端その言ござまは無いじゃろ。クソガキはいつまで経つてもクソガキじゃな」

「あんたにだけは言われたくないがな。……それで？本気で何の用だ」

「わかつとるんじゃろ？……あの一人を止めて連れ戻せ。あのよくな才能ある若者を失うのは惜しい」

「とつとやう言えばいいのに。それじゃあ、十分ぐらいかな？あそ

「の空間を維持しててくれよ

「それぐらいならなんとかなるじゃね。一花君と交渉する」という

なるじやうが……」

「宿代だ、と言えば何とかしてくれるだろ。それじゃ行ってくれるわ

」「いってらしゃーーー」「

そうつて言いやがった。俺は専用の魔法陣に向かって歩いて行つた。そしたら爺に怒鳴られた。クソ、ゆっくり行つたつていいじゃないか。そう思いながら俺は走り出した。

本戦 | 口田（一）（後書き）

はい、本日最初のコロでした。基本的に一回戦は一本立てとなります。その分楽しんで頂ければこれ、幸いと 思います。

本戦 | 四四(2)

魔法陣の場所にまでたどり着き、試合が終わるまで動かないようにしている封印を壊した。もしかしたらアーヴームとかの類がなつてゐるかもしれないが、気にはしない。

魔法陣を稼働させ、俺は一人のいる場所まで転送された。

「やっぱり思つてた通りだ。千葉の家は問題児が多すぎるんだよ。

ホント迷惑なことだらけだ」

「誰だ!?」

「俺だ。お前ら試合は終了だ。これ以上やるって言つんなら、俺が元の空間で相手をしてやる。この空間はもう限界が近いからな」「この勝負の決着をつけずに戻れるかー剣士同士の決闘を貴様の都合で邪魔するというのか!？」

「まあ、ぶっちゃけそうだ。いい加減にしてもらわないとこっちも困るんだよ」

「フン！ 知つた事ではない。さあ、我らは続けようではないか！この戦いをな！」

「だから止めると言つとるだろ!?……。もつとい。お前らがそういう選択をするなら、俺がお前らを潰してやるよ」

俺は右手の封印を一段階まで解き、鎧を纏つてまだ剣を打ち合っている馬鹿二人に向かつて突つ込んでいた。もちろん俺の事をわかつてゐるんだが。

同時に刀を俺に向かつてふるつてきた。それの全てをかいぐぐり、まずは白皇に向けて鳩尾に向けてブローを叩きこもうとした。だが、体を反り返つてかわしやがつた。イナバ〇アーか！？

しようがないから黒帝の側頭部に向かつて蹴りをぶちこもうとする、あいつかわして俺に掌底を当てようとしてきやがつた。なま

じ実力があるといひいう事があるから困るんだよな。

「しゃあない。もうひと段階、ギアを上げるとするか。ついてこいよ？」

「当り前だろ？ む前とは一戦してみたいと思つていたのだ。こいつと一緒にというのが癪に障るがな！」

「それなら貴様がどけ！ こいつは私が倒す！」

なんか仲間割れの様相を呈してきたけど、まあいいか。俺は三回目の封印を解いた。さっきまで余裕で俺の速度についてきた二人は、俺がとてつもなく速度を上昇させたのを見て構えた。

それでも俺の速度は、さっきの約1・5倍だ。いきなりの急加速についてこられる訳が無い。ここで決めさせてもらつ！

俺はすぐさま白皇の腹にロー・キックをぶちこんだ。のけぞった白皇を何発も殴つてやつた。十発殴つた頃にはもう氣絶していた。

俺はそれを確認すると、すぐさま黒帝に向かつて走り出した。そして飛び蹴りを黒帝の右肩に当てるやつた。なんか嫌な音がなつた。多分右肩の骨が折れたんだろう。

黒帝が顔をしかめて後ろに下がる 前に近づき、ブローをあいつの鳩尾に叩きこんだ。あまりの威力に数メートル後ろに下がつた後、地面に倒れこんだ。

うわ、白目になつてゐよ。今更ながらやりすぎたな。ま、いいか。俺の忠告を訊かなかつたこいつらが悪いんだし。そう思いながら俺はこの一人を魔法陣の位置まで運び、転送した。

空間が軋む音がしたから、俺もあわてて魔法陣に乗つて競技場まで転送した。そして戻ってきた俺を迎えたのは、すさまじい量の歓声だった。

「すさまじい技量を持つた一人を抑え込み、そして軽い表情で帰還したのはCブロックのシードであり、『白銀の神狼』の異名を持つ

乾慎也選手です！」

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオ—！—！—！」

試しに手を振つてみると、さらに歓声は上がつた。俺は鎧を解除し、入つてきたゲートから元の部屋に歩いて戻つた。その道中に興奮を抑えるのに結構苦労した。

本戦 | 日田 (2) (後書き)

久しぶりの主人公活躍(?)の話です。まだまだ物語は続きますので、どうかお楽しみください。

本戦一回目（3）

「おかえりー。中々格好良かつたよ。あの一人をああもあつさりとやつつけちゃうとはね」

「こいつも強くなつてるつてことでしょ。まあ、あの程度の敵にやらせてもらつては困るけどね」

「全く軽く言つてくれるな。そりやあの程度の敵にやられるほど弱かねえけどな？」

「というか今回あの一人は不戦敗かな？一人ともやられちゃつたし」

「まあ、そうだろ。……お、今度はちゃんと楽しめそうだな」

「天剣持ち？それつて結構やばいんじやない？」

「でも相手は格闘家の達人、李家人間なんでしょ？だつたら大丈夫じやない？」

「お前は天剣持ちの実力を知らないからそんな事を言えるんだ。あの人外の度合いは、千葉家の比じやないぞ。ランクは何位だ？」

「確か十位ぐらいだつたんじやないかな？」

喋つていると、試合が始まつた。最初は李家の圧倒的な勢いだったが、相手が剣を抜いた途端にその勢いは終わつた。

なんせ一撃一撃が空間を切り裂いてるぐらいだからな。しかもめちゃくちゃ速い。これじゃあ、刃引きのルールとかもう完全に無視だな。

まだ猛攻は続く。それこそ気の遠くなるような数の打ち込みが連発されているんだから。俺でもあれだけの剣戟に対応するのは大変だぞ。そう考えると、李家の代表は強いな。

剣を唐突に放り投げ、油断した所に手刀、足刀、なんでもありの打ち込みを連発してぶち当てていた。あれはすごいな。多分鎧通しつまり遠当での要領で内臓に向かつて当てるぞ。

「勝負、付いたね。あれじゃもつ立てないよ」

「確かに。それにそうでなくともやりたいとは思えないな。あれ

だけ打ち込めば、もう相手の気力も体力も十分に削いでるしな」

「あれが天剣持ちなの? とてもじやないけど、勝てる気しないわね

……

「お前は何訊いてたんだ? あいつはまだ十位。一位はあんなもんじやねえぞ。あれこそ現世の神、いやさ魔王と呼んでも差し支えのない存在だろ?」

「異名も『剣の魔王』だしね。本物の悪魔も尻尾まで逃げるレベルだよ」

「あんたたちにそこまで言わせる存在ってどんな実力持つてんのよ。私はやりたくないわね」

「俺らだつてやりたくなねえよ。六位と戦つて死ぬかと思つたからな。何とか倒しはしたが」

「もう地形が完全に変わつてたよね。山をいとも簡単に平原にして見せたし。よく勝てたね、つて思ったからね」

そんな事を話し合つていると、試合終了のホイッスルが鳴り響いた。

後で訊いた事だが、この戦いで負けた李家の代表はこの戦いでの治療が終わるのに一年近くかかったそうだ。もちろん大きな被害を受けたのは心の部分だったらしいが。

本戦 | 口田 (ω) (後書き)

本日最後のコトとなりました。これを某アニメ番組のキャラクター風に表すとすると「残念、無念～」という感じですかね。では、またいすれ。

本戦二四目(4)

シード持ちにはとある特権がある。それは本戦で素晴らしい戦いをした選手と話し合つ権利だ。相手はもちろん天剣持ち。不承不承死ながらも了承してくれて、今ここにいる。

「まあ、とりあえずは座つてくれ。立つたままじゃ話もちゃんとできなーいしな」

「……それで俺にどんな御用なんですか?」

「そう急かすな。事を急いては仕損じる。まあゆっくらじよつや。それとも何か急ぐ理由もあるのか?」

「分かりました。それでここに呼んだって事は、何か訊きたい事があるんじゃないですか?」

「取り敢えず君の名前を伺つてもいいかな?」

「シェルグ・アステルです。天剣持ちの第十位。」

持つてる天剣の名前は『破邪の双星』フレンデスベルクです。他に訊きたいことは?」

「……訊いておいて何なんだけど、そういうの簡単に喋っちゃつていいの?」

昔戦つた天剣の第六位は、問答無用とばかりに襲つてきたけどな。アステル君は用意した紅茶を飲みつつ、俺の質問に答えた。

「喋る事自体に制約はありません。その能力をさらす事が問題なんです。ちなみに乾さん、天剣持ちの候補が何名いるかご存知ですか?」

「いや、知らないけど。うーん、三百人ぐらい?」

「残念。三百五十人です。まあどいつもこいつも化物みたいなものですが、一般人から見ればですが」

「第六位は普通にさらしてたけどな」

「六位……ああ、クライズさんですか。あの人はそういうの一切無視する人ですし、何より戦闘に快楽を求める人ですから」

「なるほど。やたら好戦的だった訳だ。それでも第一位はあまり動こうとしないよね。なんで?」

「トップはもう戦いに執着なんかしません。なんか一番上に辿り着いてしまうと達観してしまう物なんだよ、って言つてましたから」

「まあ、あんだけ強かつたらそうそう上はいないだろうな。倒してみたい目標の一つではあるが」

「トップの実力を知つてそんな事を言えるんだったら、凄すぎますね。一度手合わせを願いたいものです」

俺たちの田に殺氣と言つか、薄暗い獣のよつな物が宿つた。多分、そのまま状態で一分も過ぎたらアステル君も俺も、闘つていただろう。

でも、とうとう我慢しきれなくなつたのか、レジルが話しかけてきた。そこで俺たちの眼に宿っていた物がきれいにさっぱり無くなつた。

「ねえねえアステル君。ちょっと剣に触らせてもらつてもいいかな?」

「？」

「本当はダメなんですが……まあいいです。はい、どうぞ」

「ありがとうーーうわあ、ここまで綺麗だとは。やっぱり近く見てみると違うね!」

「これ、鋼でできる訳じゃないわよね?」

「ええ、何ができるかはわかりませんが少なくとも、この世界と神界では無い事は確かだそうです」

「何ができるか気になるわね。この硬度を私の鉄鎖でも再現出来れば……」

「いらっしゃんでもそりゃ無茶だろう。大体お前の鎖がこれ以上固く

なつたらやつてられないぞ」

「いやはや、これはやつぱり魔力増幅器にもなつてるみたいだね。
構造がすごい似てる。これを作った人はまさしく天才だね」

こんな会話を四人で繰り広げていた。思っていた以上にアステル
君と話がかみ合つた事に驚いた。

まあ、当たり前というか観戦をそっちのけで話し合つていたせいで、後で爺に怒られた。まあ、いいか。明日に備えるとしよう。

本戦 | 口田 (4) (後書き)

それでは今日はこれまで、できればまた明日とこまちよう。では
またいすれ。

本戦三回戦（一）

「ねえねえ兄さん。私も兄さんがいる観覧席に行つてもいい？」「どうした？唐突に」

今日は土曜日で明美が通つてゐる学校は休み。それで久しぶりにゆつたり起きて朝飯を食べていた。他に泊まつてゐる皆も叩き起こして、だが。洗い物は一気にやつた方が楽だからな。

歓談しながら、「コーヒーを飲んでいると明美が唐突にこんな頼み「」をしてきた。いつたいどういう心境の変化だ？

「席取るの忘れて、見るのがテレビしかないのよ。でもこりこりのつて直に見た方が勉強になるんぢゃないかと思つて。ね！？いいでしょ？」

「迫つてくるな。鬱陶しいから。……そりや直に見た方が鍛錬になるだろ？けどさ。でも、今日も九条さんが来ないとは限らないしな」「泰斗さんならきっと来ませんよ。あの人はこうこう事に興味の無い人でしたから」

真由美さんがいきなり会話に参加していた。いきなりどうしたんだろ？なんか微妙に表情も硬くなつてるし……。

「それ、本当なんですか？真由美さん」

「そうよ、明美ちゃん。だから気にせずについていけばいいわ」

「いやいや、勝手に決めないでくださいよ。入れる事が出来るかどうかも分からないのに」

「それなら私も行きましょうか？総局長の娘が来たとなれば入れてくれるでしょ？」

こんな会話を経た末、俺たちは今シード組の部屋に来ていた。なんでこんなことになつたのかを説明した後のジェルザの一言はこれだつた。

「あんた、馬鹿じゃないの？」

「ひでえ、この女結構真顔で言いやがつた」

「そうだよ。ジェルザ、馬鹿はいくらなんでもひどいよ。慎也は抜けてるだけだよ」

「うん、お前も黙つてろ。俺にどうじろつて言つんだよ。表の警備員は普通にスルーしてきた所為で、俺は文句の一言も言えなかつたんだぞ？」

「ほんな事態にしたあんたが悪いんでしょ。知つた事じゃないわ。

……それで明美ちゃんだったかしらり？」

「はい。千葉明美、旧姓乾明美です。はじめまして！」

「はじめまして。黒銀鉄鎖さまの名前は訊き及んでいます。お目にかかるれて光榮です！」

「ありがと。まつたくほんの礼儀正しい娘の兄がほんのつて世の中つて間違つてるわよねえ」

「失礼なのはお前だ。……それで、お前が本当にここに来たかった理由つてなんだ？」

「……ばれてた？」

「当たり前だ。選手には選手用の席がある。わざわざここに来る必要はない」

「ちょっとといいかな？」

問い合わせようとした矢先に、レジルが出鼻をくじいてくれた。こいつ、本当はただのＫＹなんぢゃないのか？

「千葉家の人なんだよね？千葉家の人ってどんな修業をしているの？」
「えつと、本当は話しちゃいけないんですけど……。話してもいいと

思つ？兄さん」

「俺が知るか。俺はあそここの家で修業を積んだ訳じゃないんだからな」

「そりだよねー。まあ、この話を黙ってくれるなら話してもいいですぐ……」

「喋る訳無いじゃん。ジョルザも約束できるよね？」

「なんで私に話を振るのよ……。興味無いから話す気も起きないわよ」

「それじゃあいいですよ。まずは……」

なんか話を露骨に逸らされた気もするが、まあいか。俺は試合の映像を尻目に、明美の話を聞き始めた。

本戦二回戦（一）（後書き）

今週もしかしたら金曜日迄でできるかもしねませんが、できなければ来週の土曜日まで休載させていただきます。ご了承ください。では。

本戦二回戦（2）

「そういえばや。」この試合って実況とか付いてないのか？」

「ついてるよ？でも、試合に集中するためにわざと切つてあるんだよ。どうする？訊きたい？」

「訊く。なんだか次の試合は面白くなりそうだし」

「次の試合？ノーネームの少年と『百獣』アリサの対決でしょ？すぐ終わりそうな気がするけど」

「なんかあの少年からは『力』を感じるんだよ」

あれから一時間後、俺たちはもう黙つて試合観戦をしていた。たまに意見の出しあいぐらいはしていたが。

第四試合がこれから始まるとしていた。この試合は世界代表トーナメント、と言うだけあってどんな奴でも二つ名を持っている。その中で一つ名持ちで無い者、つまりノーネームの者が出てくるところはそれだけです」とい事なんだ。でもまあ、たまに運だけでくぐり抜けてくる奴もいるんだけどね。

「それでは第四試合、『名無し』城宮貴也選手対『百獣』アリサ・フォールテン選手の試合を始めようと思います。

それでは両選手、台の上にある魔法陣にお乗りください」

一人が同時に魔法陣に乗り、転送された場所は市街地だった。もちろん無人地帯だ。あの空間自体に元に戻る魔法が掛かっているため、破壊されても数時間後には元に戻る。

いろんなバトルフィールドが用意されてはいる。草原、市街地、砂漠その他諸々etc。その中からバトルフィールドはランダムに選ばれる。

「慎也。彼、魔術師マグスみたいだね。札持つてるし」

「それだけで判断するな。ただ式神を使うだけかもしないだろ?」

「そりゃ そうだけど。それでも珍しくない? いまどき符を使って戦う人なんかそういうないよ?」

レジルの言う通り、今日において魔術は脳に刻むことが可能となつたせいで、符を使つたりして魔術行使する者はいなくなつた。この技術はコネクトシステムと呼ばれる。

使うのは何か脳に欠陥を抱えている者か、あるいは脳に刻み込むのを嫌がっている古い者達だけだ。もちろん脳に危険はない。それでも怖がるんだよ。なんでだろ?

「始まるな。どんな戦いを見せてくれるのかな? セイゼイ俺を楽しませてくれよ? 『名無し』君?」

「兄さん、なんかどこかの悪者みたいだよ?」

「気にはすんな。……つていうか攻撃が速いな。コネクトシステムと同レベルじゃないか? あれでコネクトシステムを持ってたらもつとすごい実力者になれるのにな」

「そうだよね。でも、確かに式符とかつて保持者によって形態が決まつてるんだよね?」

「ああ、そうなつてるな。でもあれ鷹つてどんなんだよ? 僕でもやうやくお目にかかった事無いぞ?」

式符を使う術者は今言った通り、実力によつてその式神の形態が決まる。たいていの式神は狐とか鳥だな。偵察用に用いられる。攻撃用の式神なんて、滅多にお目にかかれないと貴重なんだからな。

「今度は西洋術式? もうなんでもありだね。つていつかあれ『白銀モンドダスト』じゃない?」

「微妙に違うな。しかしアリサは本当にすごいな。あれ鳳凰じゃな

いのか？」

「伝説の生物を使役する……やっぱり『百獣』の如は伊達じやないね」

城宮君だったか。彼も相当地つくなつてきてるな。肩で息してるみたいだし。

一応説明しておぐが、魔力は無尽蔵では無い。体力と同じように使つていけば無くなつていく。一般的な修行方法と言へば、滝壺修行とか座禅とかが有名かな。

まあ要するに、精神力を高められればおのずと魔力の総量も伸びてゆく。もちろん伸びていくのにも限度と言つ物があるが。

「ねえ慎也。あれはどう事だろ?」

「うん?……携帯?こんな戦場で携帯なんか出したヒツカルなんだ?」

城宮君は携帯を懐から取り出し、何か文言を唱えていた。さすがに声が小さすぎて聞こえなかつたが。いつたい何をするのかと思つたら、携帯を振りその振つた空間から魔法陣が出てきた。

『LJの場に生ける者を吹き飛ばせ!「流星雨」』
〔スターダスト・レイン〕

そして天から流星のような物がアリサと鳳凰に向かつて降り注いだ。つていうか携帯からだと!?

「慎也あれつて!?」

「あれはまさか、まだ実行不可能と言われてる『現代魔術』なのか!?」

本戦二回戦（2）（後書き）

昨日は書けませんでしたので今日こりゃしました。今度にこりゃあるのは来週の土曜日です。来週は四話ぐらい一気にこりゃしようと思いますのでお楽しみに！

それではまた来週お会いしましょー！

本戦二日目（۳）

アリストル・マグナ
『現代魔術』

それは魔術が普及した今でも、完成不可能と言われている魔術の事だ。単純にそれを作る技術が無いからだ。そもそも、この技術に名前がついたのは三年前とある男がこの技術を作ったからだ。当時はとんでもないニュースになつたさ。

だがその男の死後、その携帯だつたんだがその内部を調べようとしたがプロテクトではじかれて調べる事が出来なかつた。そして無理やりこじ開けたら案の定データが全部壊れた。

そして今俺たちの目の前で二人目の現代魔術師が現れた。彼は一

体、何者なんだ！？

「慎也。これつて結構まずい事態だよね？」

「仕方ない。ここはあの爺に頼るしかないな」

俺は懐から携帯を取り出し、とある番号に電話をかけた。

「はい、もしも

」「

「おい爺！今試合をしてる子の身柄を試合終了直後に何とか守れ！」「なんじゃ藪から棒に。そんな事をする必要がどこに

「ふざけんな！あれは現代魔術だぞ？必要大有りだろうが…このまま放つておいたら、アメリカやイギリスのお偉方がその身柄を、保護の名目で奪い取ろうとするぞ！」

「……やはりか。仕方ないのう。何とかしてみよう。その代わり、身柄はおぬしが預かれよ？神喰狼^{フエンリル}がその身を保護しているとなれば、迂闊に手は出さんじやろ

「分かつた！それでかまわないからなんとか頼んだぞ」

試合はもう城宮君の優勢で進んでいた。そりやあ、あんだけ術式

を連発されればな。

『氷結の世界よ。今その力を現界させ、この世界を飲みこめ。』
『ブルヘイム！』

「二ブルヘイムだつて！？そんな上級魔法も記録されているのか！？」

「北欧神話に登場する世界、二ブルヘイム。その魔法化。現代でも
ようやく数少ない人間が行使できるようになつてレベルだぞ？それ
をああも簡単に使うとは」

「まるで未来から来た人みたいよねえ。さすがに『百獣』アリサも
これは耐えきれないわね」

そこで試合は終了。そして同時に黒服の人たちが会場内に入つて
城富君を連れていった。

そして二十分後、彼はこの部屋に来ていた。なんかがちがちに緊
張してるみたいだけど……。まあ、別にいいか。

「あの、すいません俺何かしましたか？」

「まあ取り敢えず座つて。訊きたい事は色々とあるからね

青くなつてた顔がもつと青くなつっていた。さてさてどう訊こうか
な？

本戦二回目（۲）（後書き）

暇なのでこましました。とはいえるが、親がないからです。それで
今まで、また土曜日こむらいしまじょう。では。

本戦二回目（4）

「とりあえず落ちつけ。そんなひどい事はしねえし、ただ話をするだけだ」

「あ。それで俺に訊きたい事って何ですか？」

「ぶっちゃけ、俺が訊きたいのはそつ多くない。そうだな……まあはこれかな？」

君はこの世界の人間じゃないな？」

「これはただの確認だ。重要な質問はまだ別にあるんですけど……。ま、一応しておかないとまずいしな。

「……そうです。つていうか俺は俺がなんでこの世界に居るのが、自分でもわからないんです」

「ふうん？ それはまた珍しい現象だね。まさか自分が選ばれた勇者とかそんなこと考えてないよね？」

「考える訳無いでしょ……。そんな余裕ありませんよ。この大会で本戦に入れれば、賞金がもらえるつていうか参加しただけです」

「へえ。そんなこと誰から訊いたんだ？」

「今お世話になつてる人です。俺がこの世界に来た時近くにいた人で。達富さんて人で……」

「え？ 花音ちゃん？……世界は案外狭いもんだなあ。まさか知り合いとはな。あの子なら納得だけど」

「え？ 知り合いなんですか？」

「まあね。それで君が使つたのつて『現代魔術』だよね？」

「ええ、一応そうですが……。さつきの質問あれで終わりですか？」

「さうだよ？ 何か問題でも？」

俺にとつてあの質問はどうでもいいしな。魔術師としてはこちらの方がよっぽど重要な質問だ。それにこちらの世界には、空間操作の術の一環として次元移動の術がある。

その術の制限時間は約三十秒。その間であれば誰でも例外なく、次元を渡る事が出来る。その制限時間内に通つた所為で、こちらの世界に来てしまつたんだろう。

「帰る方法なら大丈夫だよ。俺にも出来るけど、一応その方面にも長けてる人に頼んでみるから。それでさ、どういう仕組みになつてるんだ？ その携帯」

「これですか？ これは那人特有の機動鍵語を唱える事で、記されている術を引き出す事が出来るんです」

「マジで？ 超便利じやん。それってさ、やつぱり一般に出回つてたりするの？」

「いえ、そもそも魔術 자체がそんな広まつてません。だからここの世界には驚きましたよ。」の携帯は一般に売つてるの？ 一工夫してるのはだけです

「へえ、やつぱり他の世界と話すのは面白い。それじゃあ……」

「」の後試合観戦をすっぽかして話してたら、皆に睨まれました。いやあ、熱が入り過ぎたとちょっと後悔しながら、その日は少年を連れて家に帰つた。後で花音ちゃんに連絡だけ入れといたけど。

本戦二回戦（4）（後書き）

それではまた明日。明日は連続投稿したいと思こますのでよろしく
お願いします。

家で修練！（1）

俺が家でまつたりと朝食を食べていると、もう学校に行くんだろう。明美が制服に着替えて降りてきた。まつたりしている俺を見て驚いた顔をしながら話しかけてきた。ちなみに周りには真由美さんと城宮君がいた。一花さん以下三人組はもう会場に向かった。

「あれ、兄さん。今日は行かないの？」

「ああ。今日は一日修練してるさ。そろそろ試合もあるしな」

「よくやるよね。いつも帰ってきてから一、二時間はやつてるので程度じや駄目だよ。そういう訳なんですけど、真由美さんはどうします？観戦しに行きます？」

「いえ、私も見せていただいてもいいですか？」

「俺の修練を？別に構いませんけど……なにも面白くありませんよ？」

「構いません。私よりも城宮君はどうするんですか？」

「うーん、俺的には家で観戦してくれるとありがたいんですけど……。どうする？」

「俺も家でかまいませんよ。あんまり興味ありませんし」

「そうかい？それじゃ、お詫びに書庫に魔術書があるからそれを読んでもらえるかな？」

「え、いいんですか？俺の世界じゃ魔術はその流派特有の物なんですからけど」

「ははは。本当はいけないんだけど、別に構いやしないよ。うむ、乾家はそこそこ有名な魔術の家系だから。ほとんどの人が知ってるし」

「はあ、それなら見せてただきますけど……。いつたこにそんな場所が？」

俺はそこでは何も言わず、食べ終わった二人の食器を回収して皿を洗つた。そのあとにお茶を用意した後、俺は階段の所まで歩いていきそこで地下に続く扉を開いた。

一人を通した後で俺も扉をくぐり抜けた。一人はちょっと行ったところで周りを見渡していた。そりや地下にこんな空間があれば驚くよな。

俺は一人を書庫まで案内した。そこで城宮君が歓声を上げた。

「うおおおっ。なんて本の量だ。天井までびっしりなうえに、果てが見えないなんて……」

「ほんと乾家が集めた本だよ。父さんが三百冊ぐらいで、俺は五十冊ぐらいかな。たまにダブってたりするけど」

「そりや、こんだけ本が集まつてればそうなりますよ……。本当に読んでもいいんですか？」

「どうぞ。それじゃあ、俺はこっちの部屋に居るから」

俺は書庫につながつている廊下から、別の部屋に入った。そこはさつきも言ったとおり、修練室。数多くの刀がある。有名な物もあれば無名な物もある。だけど、全部業物だ。

え？ そんなに大量にあるんじや、手入れが大変なんじやないか？ それは大丈夫。この部屋には時間維持の魔術が掛かつてゐるから。無機物に限り、入れた時と同じ状態になる魔術だ。

そこも通り過ぎて、俺はただ広いだけの部屋に入った。そして天井から声が響いてきた。真由美さんは観戦用の部屋に入つてもらつた。

「トレーニングプログラムになさいますか？」

「いや、まずはウォーミングアップだ。前回のレベルはいくらだった？」

「レベル83です。今回も同じでよろしいですか？」

「？」

「いや今回はレベルは84だ」
「了解しました。トレーニングプログラムレベル84、開始」

家で修練！（1）（後書き）

連続投稿第1段！試験も終了したところなので自分もひょっとトンショングが上がります！それでは次を書いていこうと思います。では！

家で修練！（2）

田の前に数々の鎧を纏つた騎士が表れた。その色は黒。数は……ざつと29つてところかな。この黒の騎士団は九条の特徴だ。九条の家はこの術で上にのし上がった。

「泰斗さん……九条の不死の騎士団。それがどうして此処に？」
「目標はこれの全滅。途中でやめる事もできます。それではどうぞ」「へいへい。しかし『不死』ね。そんなけつたいたいな称号をつけられる程の物か？これ」

「斬つても殴つても吹き飛ばしても、どんな事をしてもまた復活してくれる。それがこの騎士団の特徴なんです」

どんな事をしても復活する騎士団、ねえ？それじゃあ、試してみようじゃないか。試しに一番先頭に居る一体を殴つた。大きくひしやげたがすぐに起き上がった。

「なるほどねえ。確かにこんな奴らが何十体も向かつてきたら、そりゃあ不気味でしょうね。でも！」

この重力に耐えきれるかな？

グラビティ・ファースト・セルジエル
重力術一式・天峯

「

上から通常受けている重力の約十三倍の重力を叩きつけた。メキメキという音を立てながら、騎士団が潰れしていく。それでも何とか立とうとするが、持たずに壊れていく。

十五秒もたつと、目の前には欠片しか残っていなかつた。その欠片も空中に粒子となつて消えた。説明し忘れていたので言っておくが、これは仮想現実いわゆるバーチャルリアリティという奴だ。

「ウォーミングアッププログラム・レベル84終了を確認。トレーニングプログラムに移りますか？」

「トレーニングプログラムのレベルは？」

「現在レベル67です」

「次のレベルの相手は？確かに前回は炎属性の鷲が五体ぐらいだったと思うんだが？」

「YES。次の相手は、龍種です」

「龍種？何か、ワイバーンとかその類か？」

「YES。それではトレーニングプログラムに移行しますか？」

このプログラムは、ヒントしかくれない。答えは戦つてみればわかる。だからな……父さんも厄介なシステムにしてくれたもんだ。

「OKだ。アウトクティムトレーニングプログラムに移行」

「了解。トレーニングプログラム・レベル67開始」

皿の前に出てきたのはワイバーンなどでは無く……。

「これマジモンの竜じゃん。何が龍種だよ。間違つてねえけど。種類は……ノーマルか」

ノーマルっていうのは、いわゆる炎を吐きだす龍種の事だ。物語で有名なタイプ。色は紅。翼も生えている西洋タイプ。これは……どうしようかな？

家で修練！（3）

「はあ、トレーニングで抜く気はなかつたんだけどな……。ま、龍なら仕方ないよな。うん仕方ない」

そんな風に勝手に納得したところで、俺は腰につるしてあつた一本の刀を抜いた。俺専用にオーダーメイドされている刀だ。俺は母さんから千葉家の技を教わっている。でも、千葉家の技は本来全て一刀流の技なんだ。それを母さんは自己流に変えた。ある意味において、千葉流は生まれ変わったと言つてもいいだろ。

「天皇・無花果、地王・桔梗、抜刀！」

花の名を持つ刀。天皇・無花果。地王・桔梗。最後にもらつた刀。そしてよみやく振るう事ができる新しい千葉流剣術。

亡くなる前に書物を受け取つた時、俺は母さんにこう言われた。

「まあ、この本に書いてある技をあんたが使えるようになるまで、大体五年はかかるだろ。けどね。まあ気長にやんなさい」

あれから一日も修練を怠らずにここまで来た。そしてあの爺に千葉家当主に思い知らせてやる。あんたの娘はここまですい剣術を生み出したのだ、と。

「さあ、お前」ときがこの俺についてこれるかな？今の俺はどんな奴にも負ける気がしない

「グオオオオオオオオオオオオオオオオツー！！！」

怒ったのかな？だけど、俺に勝つなんて不可能だぜ？今の俺には

両親がついてる。この刀は母さんが作り上げ、父さんの魔術によって加工してある。両親の合作。それを持つてる俺がお前なんぞに負けるわけがない。

俺は鎧を纏い、一本の刀を構え走り出した。龍が炎を吐きだしてきた。いくら仮想とは言え、相手の攻撃は魔術に寄つて発動しているから当たればダメージが来るのだ。

その攻撃をかわし、俺はまずは翼に取りついた。いちいち飛ばれたら面倒だから。俺が刀に魔力を流し、翼に少し当てただけで翼は熱したバターのように切り裂かれた。

「凄い切れ味。龍の翼を一太刀で切り裂くなんて、普通の刀なら逆に折れてしまうぐらいなのに」

「さあ、これで終わらせてもらひつよ。 奥義、花鳥風月・返り咲き」

基本的に俺が母さんから習った技は、千葉家の技と同じだ。だけど、本来の千葉流の剣は技を繋げる事が出来ない。だからこそその一刀流なんだ。

でも母さんはその不可能をいとも簡単に突破してしまった。数多く存在する技をあつさりとマスターした上に、こんな事をなすんだから母さんは本当に『千葉の才女』の名にふさわしいよ。

「グオオオオオオオオオオ！」

龍は悲鳴を上げながら倒れ、そして粒子となつて消えていった。

「あの、大丈夫ですか？」

「大丈夫。真由美さんこそ暇だったんじゃないですか？」

「いえ、見てるだけで面白かったですし。でもあの剣戟は綺麗でした」

「ありがとうございます。それじゃあ、城宮君もつれて昼飯といこうか」

「そうですね。でも気づいていないと思いますけど」

まあ、書庫を見た時のあの雰囲気ならあり得ない事じゃないね。でもまあ、それでも無理やり連れて行くだけだけどな。

俺たちが書庫に着くと、十六冊ぐらいのしかもぶつとい本が大量の本が並んでいた。朝の時間をたっぷりかけたんだろうけど、よくもまあこんだけ読めたもんだな。感心するわ。

「城宮君？ 大丈夫かい？」

「え？ ああ、乾さん。それに神崎さん。大丈夫ですよ。それで修練は終わったんですか？」

「午前の分はね。それで昼飯にするから上がってきなよ、って言いに来ただけ」

「ああ、はい。この本は置いといても大丈夫ですか？」

「大丈夫だよ。どうせ取つてきたはいいけど読み切つて無いとか、そんなんなんだろ？」

「いえ、とりあえずある分は全部読みましたよ。それで、あの、お願いがあるんですけど……」

俺たちは書庫を出て、居間に戻った。そして昼食のサンドイッチと紅茶を飲みつつ、話の続きを始めた。

「それでお願いって？」

「えっと、魔術に関して色々試したいのがあって……。その相手とか、その術の欠点とか教えてくれないかな？」と

「え？ その程度の事？ 僕にわかる範囲なら別に構わないよ」

「ほんとですか！？」

「うん。ちょうどいいから真由美さんも、前回の魔術の復習をしましょうか」

「分かりました。でも、私みたいな素人は後ろから眺めていた方が良いんじゃないんですか？」

「大丈夫ですよ。俺から見れば城宮君はある程度名前が知れてる人にちょっと毛が生えた程度。

真由美さんは完全な素人つてかんじですから。何とかなるでしょ。

城宮君も真由美さんの術がおかしいと思つたら相手してあげてね

「あ、はい。このご飯を食べ終わつて少し休憩したら、俺と相手してくれませんか？」

「構わないよ。俺ももうちょっと君の実力を知りたかったところだし

「それじゃあ、お願ひします」

さて、思いがけず模擬戦をやることになっちゃつたな。失礼が無いように本気でやるとじよう。

休憩（後書き）

本日の連続投稿はこれで最後！それではみなさん、よい夢を。さよ
うなさい。

「それじゃあ始めようと思つけど、まず最初に城宮君。君、ひょつとして肉体強化の術が使えないんじゃない？」

「……よくわかりましたね。ばれてるとは思ひませんでした」

「そりゃ君の身体能力なら、他の人に術を使ってると思わせる事もできるだろ。でも、俺や一花さんとかの眼をこまかす事は出来ないよ」

「え？ あれで素の戦闘力なんですか！？」

今言つたとおり、素人目から見ても彼の身体能力はすごかつた。俺は零距離での近接戦闘が主だからやれといわれりやできるけど、それでもここまで行くのに時間がかかった。

明美とおんなじぐらいの年齢の彼がここまで来るのに、一体どれだけの修練を積んだのだろう？と思つてしまつぐらいに。

彼の魔力の流れを見れば、おのずとわかる。なんせ彼の発せられる魔力が体外にしか出ておらず、内には全然流れていなかつたんだから。

「もしかして肉体強化の仕方がわからないのか？」

「術もそのやり方もわかるんですけど……。なんて言つんでしょう。理屈はわかるけど、納得いかないみたいな？ そんな感じでして……」

「イメージしてみなよ。術を使った己の姿を」

「え？」

「少なくともこの世界ではイメージが大事なんだ。世界に影響を及ぼすイメージ。

今回ので言えば、魔力が己の体を循環するイメージだ」

俺の体の血脉とは違う物が次第に白く光り始めた。腕の先から始

まり、体の隅々まで行き渡らせる。そして俺が田を開くと、鎧を纏つていた。あれ？俺こんなこと考えてないぞ？

『久しぶりに心地よい魔力だったからな。サービスという奴だ』

そりやどうも。一人の方を見ると、驚いた様な顔をしていた。まあそりや田の前でいきなり鎧なんか纏つてたら驚くよな。サービスはありがたいんだが、鎧を解いてくれ。フェンリル神喰狼。

『むハ、仕方ないな』

悪いな。鎧を解いてもらい、一人の方に意識を向けた。

「まあ、むハトヒトナな感じ。ちょっとはイメージしやすくなつたかな？」

「あ、はい。ムハ……でいいですか？」

「へえ、すまーいな」

城宮君はもう俺がやつたことを理解して実践して見せた。少なくとも一時間はかかると思ったんだけどな……。なんかちょっとシヨックだ。

「ちょっと動いてみな」

「はい。つて、おわあー！」

あらりん。唐突に動いたせいでもちやくちや進んでる。といつかこのまま進んだら、壁に激突するんじや……。

ガソッ！

「あ痛つ！？」

「おーい、大丈夫かい？ダメじゃん。いきなり動いたりしちゃ。最初は歩く位のスピードにしないと」

「は、はい。すいません。いや、元の世界じゃ出来なかつたからはしゃいじやつて……。ははは、さてもう一回やるつと」

「ちよつと待つた。少し休憩して。思いつきり当たつたから、三半規管が治るまで待て」

「いえ、でも……」

「問答無用。そこで寝てる。俺たちちよつと向こうでやらなきやならん事があるから。行きましょう、真由美さん」

「え、ええ。それじゃあ、ゆづくらしてね？」

俺たちは城宮君から離れて、少し行つたところで止まつた。フイールドを設定して、彼の周辺一帯を森林地帯にした。

「どうしたんです？いきなり」

「ねえ、真由美さん。あなたは泣かない事が強さだと思いますか？」

「普通そつなんぢやないですか？」

「俺はね、泣く事もまた強さだと思つんです。泣ける時に泣ける強さも、人には必要なんだから」

そして遠くから城宮君のすすり泣く声が聞こえてきた。そう、皆の事思つて泣ける、そんな強さも必要なんだ。それがわかつたのか、真由美さんは静かに一言つぶやいた。

「やつですね」

魔術の修練（後書き）

本日の投稿第一弾です。今日中におまつり話が来たというでは。

「もう大丈夫かい？始めようと思つたが」

「はい、大丈夫です。それでどんなふうに魔術を教えてくれるんですか？」

「俺の修練の方法は、基本的に実戦形式だ。という訳で、ついてきててくれるかな？」

「それは構いませんが、いつたいどこまで？」

「せいぜい感謝でもしてくれ。こんな事が無きやいけないぜ？」

神界になんてな」

そんな会話を経て。今現在、俺たちは神界のとある場所にいた。基本的に神界という所には人がいない。なんせ自分達でもわからぬ魔獸が大量にいるからだ。分からぬといつよりは、把握しきれていないんだ。

まあ、黒帝と白皇の師匠はここからちょっと離れた場所に住んでるんだけどな。

「あの、乾さん。ちょっとといいでですか？」

「うん？何だい？」

「なんで俺たちはここに大量の狼に囲まれてるんですか！？」

そう。俺たちはついた途端に狼に囲まれていた。俺にとっちゃどうつてことは無いんだけど、城宮君と真由美さんには刺激が強すぎたらしい。一人ともちょっと膝が笑ってるし。

「お前ら、どけ。そもそも叩き潰すぞ？っていうか俺との契約を忘れたのか？」

「そん訳が無いだろう。ただ貴様を迎えてに来ただけだ。他に人間が

いるとは思わなかつたが

「おい、長老。迎えなんかいらぬよ。頼むからこの変な状況の方を何とかしてくれ。取り敢えず若い奴らを下がらせろ。土産はちゃんと持ってきてるからがっつくな」

「ほう？ それは朗報じゃな。

お前達、早く村に戻つて伝え

ろ。今日は祭りじゃとな

「そこまで大層な物はないがな。まあ、とりあえずこれで我慢してろ！」

俺は持つてきていた好い加減に焼いたソーセージをばらまいた。どいつもこいつもジャンプして全部咥えて走つて行つた。

一人の方を振り返ると、驚いたような顔をしながらこっちに近づいてきた。ちなみに影の中に入つていた狼 ジズレイルって いうんだが、そいつも走つて行つた。久しぶりに仲間に会えて嬉しそうだつたな。

「あの、慎也さん。あの狼たちが前に言つてた？」

「そつ。俺と契約した狼たちさ。そんで、ここに残つてるのがその長老。ほら、長老。取り敢えず謝つとけよ」

「なんでそんな事をせねばならん。元はと言えば何も言わずにきた貴様が悪いのだろう。

それに入間風情に謝るなど御免こつむるな

「頭が固いな。それぐらいどうつてことないだろ？」

「狼はもともと孤高な生き物だぞ？ そんな我らがどうして人間風情などに頭を下げねばならんのだ！？」

「だーかーらー

「あの慎也さん。もういいですよ？ そこまで私たち怒つてませんし。ねえ？」

「ええ。それよりも早く修練始めましょ

「分かつた。それじゃあ長老。俺たちは夜までに帰るから、この袋

を持つていけ」

「ふむ、わかつた。それではな。あまりこの辺を荒らすなよ」

そうこうと長老は袋を引きずつて帰つて行つた。さて俺らも移動するにしようかな。その時は手始めに肉体強化の練習をした。

走る事になつたので、真由美さんをお姫様だっこにして運んだ。そして目的の場所に着いた時、真由美さんはバツと俺から離れた。

顔がちょっと紅かった気がする。

術の訓練

「さて、まずはどんな術を習いたい?」

「この前使った二ブルヘイムとかですかね。自分の世界で使った時より威力が低かつたんですね」

「あれで低いのかい? ちょっとのずれに気がつくとはさすがだね。この世界の改変にはイメージが大事って言つたけど、あれはその根本に魔力があるからだ。

その魔力を支えているのが大樹ユグドラシル。北欧神話で有名なあの木の事さ。もちろんのことだが、一気に改変できる事象にも限界はある。

そこで頼りになるのが術者が持つてゐる魔力だ。足りない魔力を術者が持つてゐる魔力で補う。でも君は、その全てを自分の力でなそうとする。

だがこの世界で魔術を使えば、自然と魔力を空気中から取り込むことになる。その力を考慮しなかつたせいで、術に異常をきたして威力が落ちたんだろう

「そうなんですか……。世界からのバックアップ付きとか恵まれすぎじゃないですか?」

「そう怒るな。たいがいの魔術師は时限移動術で別の世界に移動して修行を積むんだ。この世界で術の修行する人は逆に珍しいんだから

「そうなんですか? それじゃあ神崎さんはどうなんですか?」「真由美さんは自衛のためだけだから。他に使つ氣なんてありませんよね?」

「ありませんよ？私は早々別の世界に行く事ができませんから。慎也さんが連れて行ってくれるなら、一向に構いませんけど」

そんな言葉はスルーだ、スルー。なんか恨みのこもった眼で睨まれている気がするが、知るか。俺たちが今いるのは、俺が専用で作った魔術の訓練場だ。神界だからこそできる芸当だ。

取り敢えず木を切り倒して、そこを机にして切り倒した幹を加工して椅子を三つ作つた。それでもまだ残つたが放置した。は？環境破壊だつて？ そんな物知るか。

俺たちはそれぞれ向かい合いながら話し始めた。こんぐらいの距離があれば大丈夫だろ。真由美さんは木の向こう側からこちらを眺めていた。

「それじゃあ、始めてみようか。君の思いのままにはなつてみて。俺がそれを相殺するから」

「わかりました。それじゃあお願いします。

氷結の世界よ。今その力を現界させ、この世界を飲みこめ『ニブルヘイム』…」

「汝は氷結と灼熱、両の力を担う者なり。今灼熱の力を持ちて我が敵を葬れ。
『インフェルノ氷炎地獄』！」

俺の放つた炎と、城宮君の放つた氷が激突した。両方の力がぶつかり合い、そこの大気がどんどん膨張していった。これはそろそろやばいかな。

俺はもう一つ用意しておいた重力系の術式をありつたけの魔力を

込めて叩きつけた。膨張していた空気が急激な圧力を掛けられてせいで爆発を起こした。

俺は何とか魔力を振り絞り三人分の結界を完成させた。ふう、さすがにヤバかつたな。城宮君の方を見ると完全に息が上がっていた。今回はこれで終わり、かな？

術の訓練（後書き）

本日はこれまで。それではまた、できればまた明日。

総局長との邂逅

「そういうばーじには人がめったに住んでないって言つてましたよね？」

「うん。言つたけど？なんか見た？」

「ええ、空を飛龍が飛んでたんですけど……。その上に人影らしきものが見えたんですよ」

「……見なかつた事にしろ。なんとなく想像はつくけど会いたくない」「どんな人なんですか……？」

「とてもなくウザい。その一言に死^シきるな。といつかどこに行つてるのかと思つたら神界かよ……」

両方とも魔力の使い過ぎでこれ以上の修練は不可能といつ事になつた。そんなわけで一人で真由美さんの魔術の修練に付き合つていた。

前にあつた時からバルブを閉めっぱなしにしていたおかげもあって、真由美さんの魔力は目測だが城宮君と同レベルぐらいはあつた。城宮君の魔力は俺の魔力を十万としたらそこにマイナス一万、つまりざつと九万ぐらいはある。それと同レベルというのは結構すごい。

「さて真由美さん。そろそろいいですか？」

「あ、はい。大丈夫れす……」

「ちょっと調子に乗つて言つすぎましたね。魔力の消費が半端じやないし」

「ぶつちやけ、魔力を込めすぎなんですよね。でもそういうと、今度は極端に少なくなるし……。

この状態だと、帰りも俺がお姫様だつこなりする事になるのかな？

あれ結構恥ずかしいんだけど。まあ仕方ないか

「…………」

そこで黙るのはやめてくれないだろ？俺も恥ずかしいんだから。そんな事を思つていると、向こうの方からなんとかひちに手を振つている奴がいる。

「あれは……まさか」

「おうおひ、久しぶりじゃな！何しどんじゃ？お前さんこんなところで」

「総局長……。あんたなんでこんなところに居るんだ？それよりも連絡しろよ。あんたがいない所為で滞つている仕事が大量にあるんだぞ？」

「そんなもんは知らん！がははは！」

「だから嫌なんだよこの爺。こいつの話なんか全然聞きやしねえ。おい、総局長。自分の娘の前でそれはないんじやないの？」

「…………ん？おお、真由美。大きくなつたな。会うのは一年ぶりぐらいか？」

「…………本当にお父様なのですか？」

「おひ。お前の父、神崎雅臣かんざきまさおみだ。今は近づかない方がいいがな。臭いから」

真由美さんはそんな言葉を無視して、総局長に抱きついた。そして人目も気にせず、泣き始めた。それだけ嬉しかったってことだろうな。俺と城宮君はその親子の姿を静かに眺めていた。

風呂場にて（1）

「それで爺。あんなところで一体何をしてたんだ？」

場所を変わつて風呂場。俺は湯船につかりながら質問していた。
なんでここに居るかと訊かれれば、答えは簡単だ。

真由美さんに「臭いので風呂に入つてください」と言われた
から。

ぶっちゃけ逆らう気もなかつたの一緒に入つてしまつていい。いや
やあ、極楽極楽。なんだか爺くさいがまあいいか。良い物は良い。
それが真理。

「うーん？ 神界に行つとつた理由か？ ミスリルの回収とかもあつた
んじやが、基本的には休暇じゃな」

「ああ、あんたがあの場についてくれてれば、もう少しあつとは状況が
変わつたかもしれないのに」

「婚約の件か？ まあどうあつても儂は変えよつとは思わんかつたら
うがな」

「あん？ 何でだよ。あんたは俺が何か分かつてゐるだろ？ 俺は神喰ら
う狼をこの身に宿す者だぞ？ どんな手違いが起つてるか分からぬ。
俺は世界に現存する中で唯一、神殺しの称号を持つ人間なんだから」

「……実を言へば、あの子は儂の子ではない。とある人に頼まれた
子供なんじや」

「わかつてゐよ。あの人はあんたとは波動が違うからな。通常親と
子供の波動は似るものだ。たまに例外はあるけど。それでもあんた
と真由美さんは極端に違つ。違い過ぎる」

「そんだけ分かつとるんじやろ？ それなら理解せい。」

あの子の将来はあの子自身が決めるべき。儂が口を出すべきではない

い

俺は少しため息をついた。この爺は一度決めたら梃子でも動かない。この人が一回決めた事をえたなんて話を俺は一回も訊いた事が無い。

「俺なんかに王の力を持てる訳がないだろ？王を選定する剣エクスカリバー。もう折れてしまつていると訊いていたんだが、あれはなんだ？完全な姿だつたぞ？」

「そうか。……儂があの子を見つけた時、あの子の本当の親は生氣オドを吸い取られたような姿じゃつた」

「剣が生氣を吸い取つて完全な姿になつたつていうのか！？それじゃあ呪いじゃないか！？」

剣とはその者が誰かを救うために振るわれるべき物。誰かの存在を喰らつてまで残す物ではない。そんな物は加護でも何でもなくただの呪いだ。聖剣などではなく魔剣だ。極めて悪質な。

「あの～。ちょっとといいでですか？」

「うん？なんだい？城富君」

「話は百八十度以上曲がりますけど、魔法と魔術の違いつて何なんですか？」

俺は城富君の質問に啞然とした顔をしていた。

風田場にて（2）

「魔術と魔法の違い？」

「ええ。昔からみんな魔術って呼ぶんですよ。でも俺の師匠ってズボラ症でして。教えてもらつてないんですよ」

「魔術とは人が世界に干渉する術の事じや。対し魔法といつのは基本的に人の力で起こす事は出来ないと言われておる」

「どうしてですか？」

「それは魔法と言われる物が、俺達風にいえば「奇跡」と呼ばれるものだから。人間に奇跡を起こす事が出来るか？答へは否だ。神の一部は条件を全てクリアしたら使えると言われちやいのけどな」

俺は昔に一度だけみた事がある。魔法を。その神秘さ、神々しさと言つたら半端じやなかつた。あの力をもつ一度、できれば死ぬまでにみたいと思つ。

「とはいえ、魔術も魔法も世界に干渉する力じや。そう乱発するでないぞ？」

「干渉した世界は少しづつだが、その世界の理を変えるからな。一気に改变するとそこに綻びが生まれる事があるからな。

まあ、この世界は昔から少しづつ使われていたからそつ簡単に綻びが生まれる事はないけど」

「そういえばお前さん完成したのか？あの魔術は」

「ああ。なんとかとりあえずの完成まで持つて行けたよ。

『虚無魔術』はな

「完成したのか。二人も喜んでくれとるじゃうつな」

「止めてくれ！父さんは少なくとも絶対に喜ばないーーの人たちを

両親を殺してしまつたのは俺なんだから」

まだあの時の事は鮮明に思い出す事が出来る。俺がまだ未熟でなければ！父さん達は死なかつた。この研究だつて父さん自身の手で完成されていたはずだ。俺よりもはるかに速いスピードで。

俺はいつの間にか唇を切つていたらしい。舌に血の味がする。親だけではなくたくさんの命を喰らつた血に塗れた者の血が。

「あまり責め続けるな……と言つても意味が無いんじゃろう。それでもお前さんの手によつて研究は完成された。これは快挙じやぞ？お前さんは自分を誇つてもいいんだ」

「…………悪い。気分がすぐれないから俺はもう出るわ。夕飯もいらな
いって言つといてくれ。それじゃあ

俺は一人に背を向けて脱衣場に向かつて体や髪を拭いて服を着た後、いつも寝ている地下に置いてあるベッドで寝た。ちなみに俺の部屋に置いてあるベッドは城宮君に使つて貰つてある。

風印場にて（2）（後書き）

今日はこれまで。次回からまたばじばじバトルを書いていきまやのでよろしく！

本戦五日目（一）

「それじゃあ、五日目か。そういうえばレジル。お前本戦つて八日間じゃねえか。なんだよ一週間位つて。ちょっと表現が適当過ぎだろ？」

「いいじゃん。ほとんど合ひてるんだから。それよりも大丈夫なの慎也？ 明田出番だけど」

「今までだつて何回か出てたる。大体俺のする事は変わらないって。是が非でも優勝して一花さんに挑む。ただそれだけなんだから」

「単純だよね。ところでジエルザと千葉家の次期党首。どっちが勝つと思ひ?」

「それどっちを言つても俺終わりだよな？」

「外れたら怒りでジエルザに殴られ、当たつたら恥ずかしくて照れ隠しに殴られるしね」

「昔にやつたらすごかつたよな。一人ともぼこぼこにされたし。だから俺はしない。大体言つ必要はないだろ。竜次君も確かに強いが、ジエルザには勝てないよ。あの鉄使いにはな」

「鉄使い？ それってどういう意味ですか？」

観戦席で俺達は始まるのを今か今かと待つていた。俺達はどうも早く来すぎてしまつたらしい。まあ身内……と言つていいか分からんが、とにかく知り合いで試合とあってテンションが高まつていたらしい。とにかく暇だ。

「あいつは元素操るんだ。鉄限定だけどな。だから普通の使い方じゃありえないような攻撃なんだよな。まず、槍みたいに飛んでくるだとか、鎧みたいに叩きつけてくるとか色々だ」

「元素操る者ですか。珍しいんじゃないですか？」

「珍しいよ？ あいつは地面にある砂鉄も操れるしな。あいつはまあ

秘蔵つ子つてやつだよ。それでもよく前線に来るんだけどな。『紅の剣』つてのもあるがあれは条件があるから使わないだろ」「あれはね~。見てるこっちが不安になる条件だからね。こちらとしては止めてほしいよね」

まあ、それも相手の戦闘方針次第なんだけど。威力で来るか、それとも速度で来るか。どちらかによつてあいつの方針も変わるだろうし。

そんな事を考えていると、両選手がゲートから出てきた。竜次君はなんと二刀流だった。これは驚きだ。ジェルザの方は腕に鎖をまとわりつかせていた。

二人は同時に魔法陣に乗り、転送された。そして到着した先は……市街地だった。市街地とはいっても、ほとんど風化しているような場所だ。

しかもこんな土地には砂鉄が大量に含まれている。これは竜次君が不利になつてきたな。

『それじゃあ、始めるとしましようか。言つておくけど女だからつて、手加減なんかしたら絞め殺すわよ』

『剣士としてそんな事はしない。こちらにも負けられない理由があるのだから』

『ふーん。それじゃあ戦いを始めるとしましようか…』

ジェルザはまず鎖を開放し、一本を槍状にして飛ばした。ちなみに解放した数は四。まだまだ腕には鎖が絡みついている。

分かつていいと思うが、ジェルザの鎖も鉄製だ。鉄はいろんな部分で利用されている大事な元素だ。だけど鉄にも弱点が存在する。例えば

『爆炎剣・剛!』

『なつ！炎の剣ですって！？まさかその刀は魔剣？』

『いかにも。数年前に父上から頂いた魔剣の一本である。そしてこ

ちらが氷結剣・牙！』

『一種類の魔剣の同時使用……。なかなか厄介ね。でもその程度で私はやられないわよ！』

鉄鎖が何かを描き始めた。それは巨大な空間魔術。そこに居るものとある制約を課す魔術。どんな物かはわからないが、とにかく危険を感じたんだろう。竜次君は近づこうとした。

だが、それを許すジエルザでは無い。鉄鎖で何とか防ぎ、地面にある砂鉄を操り攻撃し続ける。

『ここに居る者に魔術による干渉を奪え！「無^{シャドウ・ブリズン}術牢獄！」』

さて魔剣による力を奪われた。どうするのかな？

本戦五日目（2）

魔術により魔術の使用が禁じられた訳だが（魔術のくせに魔術を封じるとはこれ如何に？）竜次君の刀身からは力が消え、ただの日本刀と同じような形になつた。

まあ、ただでさえ剣技で化物である千葉家に魔劍なんか付いたらシャレにならんからな。ジエルザの考えはあつてる。だけど日本刀を持つた千葉家に勝てる奴はそうそういうない。

一体どうするんだ？ちなみにジエルザの鉄操る力は、魔力ではなくそれとは別の力で動いている。

『まさか魔力を封じてくるとは思いませんでしたよ。まあ、これで純粹な剣技であなたに挑めるというものだ！』

『それもそれで大変なんだけどね。炎を使われるよりましよ。さあ、続きを始めましょう！』

どうやら竜次君は速度を選んだらしい。認識が追い付かない速度で走れば、それは良い判断だ。だけど、相手はジエルザだ。あいつはぶつちやけ空気の流れを読んでるから、先読みが上手い。

鎖でどんどん追い詰めていく。だが、竜次君も負けていない。衝撃波だけでジエルザにダメージを与えていく。ジエルザも竜次君も両方ともダメージが大きい。

『さすがね。この空間で五分以上生き残るなんてね』

『もともと千葉の剣は魔力などを必要としない。だがそれでは進化は望めないと想い、私が取りこんだものだ。』

それでも、まだ慎也君にはかなわない。私は本家で鍛えた身なのに、彼にいまだ勝てていない。

それを先生の差だとは思わない。彼がより努力を重ねているという

事だ。彼と闘うために、否！それ以上の者達と闘うために、私は勝ちあがらねばならんのだ！』

目標としてくれてるのは結構だが、それだけではジエルザには勝てない。あいつはそこまで数が多い訳ではないが、俺にすら勝つた事がある人だから。

それにあいつの能力の頂点『紅の剣』の条件はそろった。あいつの本当の力をもう一度目の当たりにできる。

『……我が身を流れし血よ。汝はわが一部なり。いま我が手元に集まり、その力を顯現させよ！』

「始まるね。紅の剣の顯現が。あれを破壊できる剣はこの世界には存在しない」

「なんせ自分の血ができるからな。あれを破壊できるのは精々がレ・ヴァテインの炎ぐらいじゃないか？」

「なんでも斬れるしね。昔僕の本気をぶつけたら真っ一つに切られたよ」

ジエルザの猛攻は続く。紅の剣は所有者が傷だらけである事、そして大量の血それこそ大量出血寸前でもない限り顯現できない。

命の危機により顯現が可能な力であるこの剣は、世界最強と言われても納得してしまったような切れ味を持つていて、絶対に折れない。折ろうとしても血だからどんどん補強されてしまうんだ。

最後は剣で斬りつける　と見せかけて鎖を操つて鳩尾に命中させて氣絶させた。しかもジエルザも勝者宣告された直後に氣絶してしまった始末だ。

まあ、とにかく勝つたんだ。どんな状態であれ、良しとしよう。あいつは自分のできる限り戦つたんだから。

本戦五日目（۳）

最終試合、相手は九条ＶＳケルト神話の光の神『ルー』を宿すフレンヴィル・ライinz君だつた。ルーの武器はある有名なブリューNAクだ。

「どつちに軍配が上がるかな？」

「微妙なんだよな。ブリューNAクはどこまでも長い射程が売りだ。でも、それも多分役に立たないし。かといって九条の騎士団はどうか、と言わればこれもまた微妙だし。

はつきり言つてあの騎士団は、足を破壊すればどうという事はない。まあ腕で這つてこつちに来る辺りは不気味だけど、所詮その程度だ」

俺は重力でほとんど叩き潰したが、別にそんなことしなくとも対応策はいくらでもある。ジエルザなら砂鉄で足を縫い付けておくとかだ。

それでも無理やり動こうとするからな。あの騎士団の実力は術者の能力と同じかそれ以下だ。だから数を多く呼べば良いつてもんじやない。

そういう明確な弱点も存在する訳だけど、あの人はどう突破してくれるのかな？ついでのようで悪いのだが、明美は負けてしまつた。ぎりぎりで惜しかつたがな。

「あ、始まりますね。九条さんはわからないんですけど、ライinzさんは凄かつたですよ。空間魔術で一気に距離を離した後、ブリューNAクを連射ですからね」

「ブリューNAクは一応武器の一種なんだが。あれってそう大量に作れるのか？」

「あれは魔力で形成されてるからね。でも遠距離からの連射か……。

当たつたらどう対応するか考えておかないと

「その前に俺に勝つ事を考えておけよ。あの人前の前に俺と当たる事になるんだし」

「そりやあもちろん考えてるよ。それでも、だよ」

「考えるなら構わないが。……お、早速騎士団の登場か。数は……十五体ぐらいか？」

「そうだね。正確に言うなら十二体だけ。それにしても鎧の形がちょっと龍っぽくない？」

「そりやあ、あの家の紋章は龍だからな。確か黄龍だつたかな？」

「五行思想ですか？」

五行思想つてのは、自然哲学の思想の事だ。万物は木・火・土・金・水によつて構成されているという思想。それによつて相克だと相生だとが存在する訳だが。今説明する気ないし。

黄龍つてのは土に分類される。土が表すのは季節の変わり目の事だ。それにしても、九条はこの技一つで今の地位に駆け上つたらしい。そこまで強いとは思えないんだけど……。

ライinz君は空間魔術で五百メートルぐらいかな?まあそんぐらい後ろに下がつた後、ブリューナクで掃射し始めた。うわ、どんどん倒れていいくよ。

「これさ、ちょっと一方的じゃない?」

「大丈夫だよ、慎也。九条の実力はここからだから」

「ふうん……。つてあれ?なんか足が直ってきてないか?」

「そう。魔力を注ぎ込むことで体を直す事が出来る。しかも……」

ライinz君がもう一度ブリューナクで掃射しようとしたが、今度は完全に弾かれた。そうか学習機能か……。何度も立ち上がる騎士団に学習機能。なるほど。

分かつた気がする。何故九条が一桁数字ファースチットンバの地位に至れたのか。さ

? てもうと楽しめさせてくれよ。一体「わかれいどるなふ」なんのなんのかな

本戦五日目（4）

ライインズ君は魔術も混ぜ込みつつ、ブリューナクを絶えず連射し続けた。高威力の術を持っていないのか、当たつても騎士の連中の鎧に穴を開ける程度だった。

「これさ、ちょっと勝敗が見えてないか？」

「そりなんだよね。でも、なんかちょっと違うような気がするんだよね」

「違う？ 何が？」

「確かに、ライインズ君の売りは精密な遠距離射撃とブリューナクや魔術の連射だよ？」

でも、全体攻撃技を持つてないはずが無いんだけどな……」

「でも事実使つてないだろ？……はあん、成程ね。でも、その程度の田論見が見えてない筈が無いだろう」

「そりなんだよね。どうしてそんな見え見えな案を使ってるのか分からぬい」

大方小技で田ぐらまししつつ、大技で一気に行きをつけるつもりなんだろうけど……。

それでどうにかなるほど、九条の力は甘くないだろう。まあ、九条の力はほとんど騎士団に集約されているという話だけど。

『どうしたんだい？ そんな小技を連発しても、私の騎士たちは突破できないぞ！？』

『それぐらいはわかっています。だからこの時を待っていた。

汝は雷。汝の力を持つて眼前の敵を断罪せよ！ 「ライトニング・ジヤッジメント！」』

雷？何でまたその術を選択したんだ？ただ騎士団を消し飛ばすだけなら、炎とかの方が良いだろう。何を考えているんだ？

巨大な雷が騎士団に向かって降つてきた。騎士たちは一気に体が吹き飛んだ。電撃が流れている所為で、修復は難しそうだな。

そして九条さんの方を見ると、肩から血を流していた。そうかあの術ですらも曰くらましの一つか。小技を連発した後に大技を出す。だけどその大技すらもブラフ。

本当の目的は、『ライトニング・ジャッジメント』による田つぶしからのブリューナクを命中させる事だった。

確かに皆の視線はあの雷に向くだろう。その間に自分はブリューナクの遠距離攻撃……。考えたものだな。でも、これは一回につきりの技だ。もう効かない。

『これは一本取られましたね。仕方があります。お見せします。我が九条家の奥義を！』

そういうた直後、粉々に碎け散つていた欠片達が集まり巨大な竜の形になつた。龍と言つよりも竜。東洋系統の竜の形だった。

『これこそが我が九条の奥義！『黄竜』だ！』

あらわれた竜の咆哮によつて、ブリューナクの攻撃が消し飛んだ。なんて威力だよ。そして尾の一撃によつて吹き飛ばされていた。どうやらその一撃で氣絶したらしく、試合はそこで終了となつた。さて、明日に備えて修練してから寝るといよつかな。あの竜に対する対策も考えておかないと……。

本戦五日目（4）（後書き）

黄龍は誤字ではありません。やつこいつが誰ですの？」「承ります」。

本戦六日目（1）

俺は選手控え所に向かつていた。選手はそこを経由し入場しなければならないからだ。

モノクルを掛けてガントレットを装着して、俺は控え所に入った。そこにはもうすでに何名かの選手がいた。俺が気にせずに歩いていこうとしたら一人が声をかけてきた。

「師匠、頑張つて下さいね。私（影ながら）応援しますから」

「ん？久しぶりだな、彩夏。お前も大会に出てたのか？」

「はい、Dブロックで」

天城彩夏 僕の弟子のひとりで『最終元素』ラストエレメントの能力を持つている。

その効果は、相手の能力を一時的に使用不能にする。例えばジエルザの使う鉄操る力に対して使えば、その能力を封じる事が出来る。

「それじゃあ、俺は行くとするさ。相手はあるの『神威』だからな」「神の力を有する人間。神人種に勝てるんですか？」
「勝てるか、じゃない。ただ勝つ。それ以外にないだろう」「それもそうですね。それじゃ、いつてらっしゃーい」「はいよ。お前も頑張れよ」

俺が魔法陣の所までたどり着き、移動するともうそこには『神威』フェンデス・ベルクさんがいた。

『神威』をこの世で持つのはこの人ただ一人。神人の呼び名を持つこの人だけだ。

神人っていうのは神と同じ力を持つ人間の事だ。神を宿す人は神

種と呼ばれ、人間は人種。まあ、普通だろう。

神の力はフェンリル所属の魔術師三十人から五十人程度の魔力を持っている。俺も同じぐらいの魔力を保有している。まあもう人外レベルだからねえ。つてそんな事はどうでもいい。

俺達がいるフィールドは 湖畔だった。

「それにしてもこのフィールドは戦いにくい事で有名なんだよな」

なんせ地面が少ないからな。ほとんどの人は何とかやりくりしちゃいたけど。俺にとつてはめんどくさい。だから！

俺は湖の方にジャンプした。そして俺の脚が触れた場所から順に凍つていった。よし、これで足場作り終了。さて戦闘を始めるところ。

「いつもの事だけど、君の術には驚かされるよ。湖畔全域を凍らせるって……」

「まあまあ、別にいじやないですか。これで戦いややすくなるんですし」

「まあそりや そななんだけど。……もつ考えないでおこいつ」

ベルクさんは『神威』を放ってきた。称号と技名が一緒なんだよね。

俺はその攻撃をかわし走り始めた。俺が駆け抜けた所から氷がどんどん割れ始めた。これでは作った意味が無いから、という事で足に冷気を纏わせて氷を補強しつつ、ガントレットに電撃を纏わせた。

「汝は雷神の雷！我が敵を討つ雷の槍となれ！」トール・ブラスト

約五発分の槍状の雷がベルクさんに向かっていき、大爆発を起こ

！」

し
た。

本戦六日目（2）

端的に言つて俺の攻撃は防がれた。『神威』の力を前面に集約させて防ぎきつたらしい。

「ちつ！防ぎきつたか」

「当たり前だよ。この程度防ぎきれない訳が無いじゃない」

「そりやそうなんだろうけど。でもそんなにケロッとされると何か……ねえ？」

「ねえ？じゃないよ。それに、その力は雷神トールの物の筈。なんで君が持ってるの？」

「それは俺が雷神トールの魂を喰らつたから。あいつの魂保持者が暴走した時にね」

俺がつけているガントレットの名前は、あの有名な雷鎧ミコルールだ。魂の性質によつて神器という物は変わる。あ、神器つてのは神話とかに出でくる神の武器の事ね。一応言つとく。

「神の魂を喰らつた神狼、ね。これは厄介だね。しかも自分の力にしているし。

汝聖の力を司りし一角獣よ、今我が下に来たりて我が力となれ！一角獣！」

空間を突き破り出てきたのは、一本の角を備えた白馬だった。聖獸・一角獣。その角はあらゆる病氣に効くと言つが、清らかな乙女にしかその姿を見せないので有名な聖獸だ。

まさか契約しているとは思わなかつたが、別に構わない。向かってくるというなら叩き潰すだけだ。だけど結構厄介だな。ここはあいつを呼び出しどくか。

「汝一角獸と対をなす者なり。今我が袂に来たりて、その力を示せ！」

「双角獸！」

「双角獸ですつて！？意外だけど納得できない訳じゃないわ。

双角獸は魔獸。そして神喰狼は魔獸の頂点。龍皇すらもその力を恐れるという。魔獸としての眷属の繋がりといつ訳ね

「ま、そういう事だ。だからこちらも全力で行かせてもらう。いくるな？」

『私を見ぐびらないで頂きたい。相手が一角獸ともなれば尚更』

「いい度胸と覚悟だ！さあ始めよう！

我と汝交わりし時、此処に更なる力を目覚めさせよう！我が力となれ、双角獸！」

憑依装着

城宮視点

黒い光が辺りを照らし、その光が消え去った後そこに黒い鎧を纏つている人が立っていた。そして頭部には一本の角があつた。

「あの、あれってやつぱり乾さんなんですか？」

「他にどんな奴がいるのよ。しかし憑依装着ね……。できたんだ、あいつ」

「そうだよね。いつもフェンリルの力と魔術以外じゃ戦わないから、わからないよね。こんな隠し玉を用意してるなんて」

二人とも目を細めながらそう仰っていた。あ、憑依装着っていうのは契約してゐる魔獸や聖獸を体に纏つてその力を振るう事。あ、相手も憑依装着した。

「こちらは乾さんとは魔逆で一本の角に、真っ白な鎧だった。乾さんがいきなり不可視な何かを飛ばしていた。あれは……衝撃波、かな? ベルクさんは光を収束してそれに対抗していた。凄い爆風が辺りをまき散らしていた。

「あれって衝撃波だよね。一本の角で収束してるみたいだし。逆にベルクさんのあれは光、かな?」

「ユニコーンは純血の象徴でしそう? それならあれは光でしょ。慎也のあれは不可視の所を見ると衝撃波なんでしょうね。よくわからないけど」

乾さんが衝撃波を連射しつつ、すごいスピードで走つていった。ベルクさんは凌ぎるので精一杯らしく、攻勢に転じる事が出来なかつた。

そしてさつきの衝撃波を腕に纏わせながら、アッパーを放つて空中に吹き飛ばした。そして自身もジャンプで空中に飛び上がり、地面にたたきつけた。

選手の戦闘不能が確認されたのか、そこで試合は終了となつた。何をしたのかと訊いたら、最初のアッパーで脳震盪を起こさせて気絶させた後、観客に見せるために叩き落としたらしい。

といつても、衝撃波を先に地面に放つてから重力で体を浮かび上がらせたから、怪我はしない筈だと言つていた。その時、俺はこの人の事が心底恐ろしいと思つた。実力的に。

本戦六日目（۲）

「そんで最後はレジルの試合か。……心配か？」

「そ、そんな訳無いでしょ。あいつとは決勝で戦うって約束してるんだから」

「これはまた仲睦まじい事で。もう本格的に付き合っちゃえば？」

「そんな時期じゃないでしょ。それにそんなことしても意味ないわよ」

「意味があるかどうかなんて時間が教えてくれるし、自分が動かなきやいつまで経っても時期なんか来ないぜ？特にお前ら一人はな」

「この二人は俺以上に知名度が高い。まあ、俺は基本的にそこまで大々的に動こうとしないからなんだが。それでもその知名度を可能とするだけの力を持つている。

『フォースエレメント』に『黒銀鉄鎖』。この二人が恋仲である事を知っているのはそう多くない。

さすがに結婚の公表は自分達の知名度的に見て控えているらしい。もちろん知っている人間だけならばイチヤイチヤしているが。公私ぐらいいはわかってるってことだ。

「それでも、よ。少なくとも、今の段階でそんな事をする『気はない』

「ふうん？」こう言つてるんだけどどう思う？城富君

「俺に振らないでくださいよ！そんなの答えられる訳無いでしょ！」

「ま、そりや そななんどううけど。でも、君よく夜中に外に出て女の子っぽい名前呼いてんじやん。

あれか？恋人でも残してきた口か？」

「……違いますよ。俺の師匠にして幼馴染です。きっと心配しててるんだと思います。まあ、俺も負けちゃいましたけど」

そういうブロックの最終試合で城宮君も負けてしまった。後は準々決勝を経て準決勝、そして決勝戦。そして優勝した奴が一桁数字ファーストナンバーへの挑戦権を得る。

それでも、相手が悪かったと言つべきなのか城宮君は勝てなかつた。ま相手が『闇姫』ともなれば仕方ないことなんだけど。

「闇に対抗できるのは光のみ。炎や氷なんかじや効かないよ。まさかこんな初歩の技術を知らないとは思わなかつた」

「俺の世界には闇使いが稀なんですよ。だから教えなかつたんだと思ひます」

「それでも、だらう。まあ、君にとつては面白い物になるかもしけないな。この試合は」

あいつは四元素
つまり火、水、風、土を自由自在に操る力を持つてゐる。四種の精靈と契約してゐる唯一の存在だ。それ以外は多くて一種類、できないなんてのもざらだ。

ちなみに俺はできない。できなくても問題がある訳じやないけど、できた方がその種類の魔術の威力が上がる。だからできた方がいいつて類だ。

レジルの試合が始まつた。相手は彩夏だつた。ああ、可哀そうに。レジルは女性には手加減する奴だけど、それでも実力的にもまだ足りないな。

『それじゃあ、よろしくお願ひします。』

『いらっしゃ。その腕輪を外す時間ぐらいは待ちますけど?』

『あ、そうですか? ありがとうございます』

彩夏が腕輪を外すと、服の色が全体的白くなつた。他の色を知らない雪のように。

『さあ、始めましょ。『最終元素』…』

『「ラストエレメント」か……。それなら僕も全力を出すとしようかな。

来て、我が契約せし精霊達よ…』

すると、レジルの周りに四体の精霊が表れた。炎を纏う者、体が水でできている者、土でできている者、風を纏っている者。さて、これに一体どう対応するんだ?これは確かに今日を締めるのにいい試合だな。

本戦六日目（4）

『ジール、こいつ焼いちまつていいいのか？』

『できれば焼くのは勘弁してあげてよ、イフリート。それに多分そこまで力は使えないよ。最終元素ラストエレメントが相手じゃね』

『あ、ほんとだ。全てを『零』へと返すために作られた能力。それは私達と相性悪いしね』

『そうそう。それじゃあ、一気にフルパワーで行くよ。準備は良いかい』

『別にいつでもいいぞい』

『あたしも。楽しめればそれでいいし』

なんか楽しい精霊たちだな。そんな事を思つていると、精霊達を集めで魔法陣を作り出した。そして一気に魔力を込めて四種の力を込めたビームを放った。

対して彩夏が取つた行動と言えば、右手を向けて何かをつぶやいていた。だが、その言葉を訊いて会場に居た有数の実力者は揃つてこう思つた。

こいつはやばい、と。

『その力を零へ。終わりは始まり、始まりは終わり。さあ、始原の世界へ還れ。『最終元素ラストエレメント』』

手袋から白い波動が流れ始め、光に触れた途端に光が氣化した。おそらく、多分魔術としての効力を破壊されてマナに戻つたんだろう。

言つておぐが、もうすでに魔術となつた物をマナに戻すのはどう。

言つておぐが、もうすでに魔術となつた物をマナに戻すのはどう。職業に就いている奴ら以外不可能だ。その職業は破壊師（ブレイ

力) だ。

まんまだろ ! という声は無視する。その職業についての奴らがするには、基本的に呪いを受けた人の呪いを破壊する事だ。そういう意味では、解呪師と言つた方があつてるかもしれん。まあ、裏稼業もしてる連中だからそんな不名誉な名前で呼ばれるんだけど。それはどうでもよくて。

『これが最終元素の実力……なるほど、これが忌み嫌われている理由か。敵だつたら末恐ろしいけど、味方だつたらこれほどの能力はないでしょうに』

『あの……レジル様は私の事を嫌つたりしないんですか?』

『なんでさ? 嫌う理由も恐れる理由も僕にはないよ。それは慎也だつてそりゃうし』

『私の事を受け入れてくれたのは、両親と師匠と弟子の人たちだけだつた。勝てないまでも一矢報いてみます!』

『もう突破口は見えたけどね。イフリート! ノーム!』

レジルは地面の柱を立てて、そこに一気に火炎をぶつけて砂埃を起こした。そして名前を呼んでいなかつたが風の精靈でその砂埃を落ちないようにしていた。

そして一気に炎をぶつけて粉塵爆発を起こしていた。鉱山の事故とかで有名な現象だ。おそらく空間制御で鉱山と同じ状態にしてるんだと思う。

この事からもわかるように、ぶっかけ空間制御つてチートなんだよね。まあ、その技も最終元素によつては阻まれたんだけど。

掌に魔力を纏つて強烈な、それこそ空気に振動が広がるほどの威力で掌底を叩きこんだ。唾液を吐きだして彩夏は気絶したようだ。

まあ、粉塵爆発をくらつて重傷。なんて訊いたら俺は間違いなくレジルをぶん殴つてるけどな。まあ、これで今日の日程は終了だな。

本戦七回戦・試合開始前

「それで、午前中に準々決勝全部やつて午後に準決勝だっけ？」

「そうだよ。多分当たるんだからつけて、僕は負けないからね？」

「そりゃ結構なこつて。といひでジョルザ、そろそろ用意した方がいいんじやないか？」

「そうですよ！ いくらなんでも、もう時間がありませんよ？」

「わかつてゐわよ～。ああ、胃が痛い……」

まだ言つてゐよ、ここは。そんなこと言つても、もう後の祭りだろつて。

そう思つたら、レジルがジョルザを抱きしめて髪を撫で始めた。
熱いなあ、ほんとこのバカップルは公私混合も甚だしいな。
え？ 前と言つてゐ事が違つて？ この風景見たら誰でもそうなるつて。つうか、めんどくさい風景だな。城富君は顔が紅くなつてゐけど。結構初だな。

「そこのお一人さん？ 元気の注入は終わりましたかな？」

「な、なな、何言つてるのよ？」

「もうその光景を見るのがうざりだから早く行け、つて言つてんだ。熱すぎなんだよ、お前らは。精々思つ出して試合に集中できな
い、なんて事態にはならないでくれよ」

「当たり前じやないか。それに僕は何も問題じやないしね」「開き直つてゐ奴つて、なお嫌になるよな。もういいからつわと
行け。相手を困らせるな」

「分かつたわよ。それじゃあ、行つてくるからね」

「うん、いつてらつしゃい。頑張つて、とは言わないよ

「もちろん。勝つてくるから」

そうこうと上機嫌で部屋を出て行つた。しかし面倒だな。この二人付き合つてから三年ぐらい経つてゐるだけだ、これは結構やばいよな。

「お前らほんとに結婚表明した方がいいんじゃね？」

「ああ、昨日ジエルに言つたらしいね？」

「当たり前だ。特に今のはもうひどい。結婚した人でもあそこまでひどくはないぞ？」

「え？ ですか？ 僕の師匠の両親もあんな感じですけど……」

君は一体どんな環境で暮らしてきただ？ やすがにあれは一般的に見て異常だぞ？

そう思いはしたが、口にするのはばかれた。やすがに口にする勇気はなかつたし、レジルがこいつをものすくへ睨んでくるんだ。

「……なんだ？ 言いたい事があるなら、はつきり言え」

「いや？ 何か言いたそうだと思つたから、見てただけだよ？」

「そうかい。それじゃ、あいつも試合会場についたみたいだし、お前さんの恋人の力をもう一度はつきりさせもらうとしよう。一昨日のはひどかつた。

あんなの、あいつの半分程度の力しか發揮できてないじゃん」

「その前日にちよつとお酒を飲み過ぎてね。一日酔い未遂？ みたいな状態だつたんだ」

「もうそんな事は無い、と思いたいものだな」

そして試合を開始するホイッスルは鳴り響いた。今回「やはぢやん」とやつてくれよ？

本戦七回戦（一）

そんな面倒くさい事があつた訳だが、試合はまともにしていた。ちょっと危ない」というもあつたが、それ以外は何事もなく経過していき勝利した。

え？ なんで今までと違つて省略してるのかつて？ そりゃ とてつもない長さになるからさ。そんな訳で午前中の準々決勝の分は省略させていただく。

それじゃあ、ここからは午後。つまり準決勝の始まりだ。これの試合の進行次第で、当たる奴も変わる。俺とレジル、ビッちが勝つかなんてわからないんだが。

「それで？ ジェルザ、今回の勝算は？」

「うーん、なくもないんだけど……。あの『黄龍』が厄介なのよね。私の能力でも潰せる気しないし、それにあの騎士団をただ潰すだけでも効果ないしね」

「ちゃんと考えてるんだな。魔術で一気に潰すのが一番簡単なんだけど……。でもお前魔術使えないしなあ」

「そりなんだよね。腕力ばかり鍛えていたせいか、術の適性が全くないんだよね。術の練習してる時に涙目になつてたのは可愛かつたな」

「ちょ、ちょっとレジル！ 止めてよ、そんな事言つ的一！」

「あはは、『ごめん』ごめん。それじゃ、頑張ってきなよ。としか僕に言える事は無いね」

「それもそうなんだけどな。……別にいいか。なるようになるしかないしな」

俺達がそういうと、ジェルザはため息交じりに扉を出て行つた。

その後にレジルが後を追いかけていつたが。

「……あの二人って本当に仲がいいですよね」

「まあね。っていうか城宮君全然喋らないけど、何かあった？」

「何かあった、というよりは何もない事が問題なんですけど……」

「……早く自分の世界に帰りたいんだろ？」

「そうですよ。今、自分の感じてる感情を元の世界に居る皆も感じてるとしたら、俺は耐えきれない。早く戻つてみんなを安心させたいんです！」

「君の言いたい事はもつともだ。でも君は、自分の感情の為に他の人の道を阻むのか？」

「……悪い、今のはなしで。あと二日待て。そうすれば君は帰れる」「二日？試合は明日で終わりでしょう？」

「休憩する時間もくれないのか？いくら一花さんでも、俺と闘った後に君を元の世界に戻す魔力なんて残つてないだろう。だからもう二日待て」

「……分かりました。それでも、できるだけ早めにお願いしますよ」「オーライ、オーライ。今は他の人の戦闘技術を喰らいな。それは君の糧になるんだから」

レジルは戻つてきた直後に試合が始まった。ジェルザは鉄鎖でハンマー上にして叩きつけて潰していた。相手はもう動くのもままならないという状態だった。

さすがに、相手九条も初っ端から『黄龍』を使い始めた。ジェルザも『黄龍』の咆哮をかわして凌いでいた。

九条もじれつたくなつたのか、大ぶりな尾の攻撃を仕掛けてきた。それじゃあかわしてくれと頼んでいるようなものだろ？」。

だが、ジェルザはそれを受け流しつつ尻尾の部分を鎖で粉碎しあがつた。なるほど、あれはもう使い物にならないな。

欠片になつただけなのなら、まだどうにかしようがあつただろう。

でも潰されてしまつたりひとつも無い、か。考えたものだな。

「だけど、これは甘いな」

「え？ どうこう事だい？ 慎也」

「レジル、あれはお前の入れ知恵なんだろ？ けどな。九条の奥義があれ一種類なわけないだろ？」

「まさか！？」

俺の忠告、というよりレジルの予想は当たつた。ジェウザの周りの地面四方から一気に鎧が表れた。そして一気に縛りつけられた後、その後は一方的な攻撃の連打だった。

もう何十発打撃音が響いたかもわからない頃になつてようやく、試合終了のホイッスルが鳴り響いた。おそらく体は痣だらけだろ。レジルは俺の襟をつかんで俺の体を持ち上げて睨んできた。

「どうして…どうしてジョルザにあの事を教えてやらなかつたんだ！？」

「……教えるだと？ なんでお前。怒りで頭がどうにかなつちましたのか？」

「なんだと！？」

「あいつが負けたのは、相手の事をちゃんと調べていなかつたからだ。それを言うに事欠いてお前、教えなかつただと？ いい加減にしろ！ 俺はお前らの先生でもなければ、親でもねえんだよ！ それにお前らはアマチュアじゃねえ！ れつきとしたプロだろ？ が！ 無様な言い訳してんじゃねえよ！」

まだ俺に文句があるというなら、試合の時にでもしろ。あいつは負けた。これは事実なんだから」

そう告げると、俺はとつと部屋を出て行つた。まさかあそこまで

期待を裏切ってくれるとは思わなかつた。これが恋や愛に溺れた結果だというなら。そんな物はクソくらえだ、そう思いつつ俺は試合会場に歩き始めた。

本戦七回戦（2）

「ああて、それじゃあ始めるとしようか

「…………」

俺達はもう向かい合っていた。試合開始のホイッスルはすでに鳴り響いた。だが俺達は向かい合っているだけだった。レジルが一向に動こうとしない。機先を制すりやいいというもんでもないが、このまま睨みあっても何も変わらないな。しゃあない、フエノリル神喰狼。

『なんだ？』

あれをやるぞ。準備は良いか？

『いつでも構わん。出来るだけ早くしてくれ』

あいよ。わかった。

「我が身に宿りし神狼よ。今汝が力を我が下へ来たれ」

『シンクロ
同調』

普段の俺だつたら、こんなもん唱えずにさっそく鎧を纏つだらつ。これを唱えることと、完全な形で鎧を纏い力を振るう事が出来る。

「最終警告だ。やる気が無いといつのなり、とつとと降参しろ。今のお前とは戦う気がしない」

「それは嫌、かな？慎也、悪いけどこの勝負は僕がもうひつ

「ほつ？ 言つたな？ やれるもんなら、やつてみやがれ！」

俺は走つてレジルに近づいた。するとレジルはイフリートを召喚していた。そいつで一体何をするつていうんだ？

「汝、火を司りし精靈よ！ 我が敵を討つ力となれ！」

憑依^{ヨツソク}装着

「

火の精靈を纏う、ね。また無茶をしたもんだな。それは精靈の持つ特性を受け入れるという事だ。火を使うという事は、火を浴びているのと同じだ。

この試合が終わつたらあいつ、火傷を負つてるかもしれないな。まあ、軽いのだろうけど。

「だが、面白い！ 神狼の爪よ、我が力となれ！」 フェンリスワールブ

俺の掌に神喰狼^{フェンリル}の爪の力が宿つた。前に説明したような気がするが、神喰狼^{フェンリル}の能力は三つしかない。

総てを喰らう神狼の牙『フェンリスヴァルフ』、総てを切り裂く神狼の爪『フェンリスワールブ』、それに他者を圧倒するだけの身体能力だ。

その爪の力を宿した。つまりどんな攻撃だろうと、今の俺に届く事は無い、という事だ。

さて、この爪にどうやって対抗するのかな？

本戦七日目（۲）

「火精靈！」
「イフリート

「ちつ！厄介だな。というよりは邪魔くさい。この炎はさ」

俺の周りには凄い熱量の炎があつた。レジルがイフリートの力を使つて増やす所為で、どれだけやつても一向に消えない。
面倒くさつ！しゃあないかな？こんなところで明かす氣はこれっぽちもなかつたんだが。

「総てを飲みこみし虚無の力！今魔力を我が糧とせよ！虚無・喰！」
アビス・イーター

俺の体から透明な光が照射された。それと同時に周りに広がつて炎が俺に集まってきた。周りから見れば、俺が焼かれているよう見えるだろう。

だが実際は炎を魔力へと戻し、俺の魔力として取り込んでいるだけ。この術は非常に燃費が悪いから、今はこの程度が限界だが。というか消費した量と取り込んだ量でやつと相殺だよ。

「……ちやうさまでした」

「まさか慎也、君は僕の魔力を喰らつたっていうのか！？」

「『名答』これが俺と俺の父さんの手によつて完成された新しい魔術。『虚無魔術』だ」
アビス・マグナ

「馬鹿な！？新しい魔術体系を作り上げたっていうの！？」
「レジル。光と闇が混じる場所には一体何があると思つ？」

「そりやあ、無じやないの？」

「そう。光が存在するからこそ、闇は存在する。その逆もしかり。だが、その境界線上に存在する物はなんだ？それを考えて作り上げ

た術式だ。

「ぶつちやけ新しいんじゃなくて誰もが考えたが、完成させる事が出来なかつた事をしただけだ」

「それを新しいというんじゃ……。別に構わない。それなら肉弾戦にするだけだ！」

そういうと、炎を纏つたまま俺に殴りかかってきた。いい度胸してるじゃねえか！

「フェンコル神喰狼！もつと回調率を上げろ！」

『了解だ！』

俺とレジルはそのまま殴りあつた。だが、やはりこちらに分がある。俺は超至近距離での肉弾戦が専門だが、レジルは万能タイプ。なんでもできるが故に、どれかに突出する事が無い。それじゃあ、俺に勝つ事は出来ない。それでもどこにそんな力があるのかと思うほどに攻撃していく。

「答える、レジル！お前は俺に勝つてどうするんだ！？」

「あの男を倒して、ジエルザの敵を討つ！」

「その程度か！？お前の覚悟は、お前の思いはその程度の物なのか！？」

誰かの為にしか、お前は戦えないっていうのか！？」

俺はレジルの腹に掌底をくらわして吹き飛ばした。そして顔面を思いつきり殴りつけようと右拳を握りしめると、レジルがそこに掌底を当ってきた。

「悪いのか！？大切な誰かのために戦う事が悪いというのか！？」

「悪いとは言わねえよ。それでも！自分の為には戦えないお前じや

俺には勝てない！

お前にとつて、ジヒルザつてのはどういう存在なんだ！？俺を倒してでも、決勝に行くというその思い、それは一体何なんだ！？」

「決まつてるだろ！それは僕が彼女の事を、ジエルザの事を好きだから！愛しているからだ！」

それだけじゃあ、駄目だつていうのか！？」

「駄目とは言わねえ。お前らの思いはよく知ってる。でも、俺の願いの為に！俺は勝たせてもらう！」

左拳を鳩尾に叩きつけて、呼吸を止めた所で魔力を纏わせた右拳を顔面に叩きこんだ。レジルは五メートルぐらい吹き飛んだ。意識が途切れただろう。

試合終了のホイッスルは鳴り響いた。しかし、こりやあ俺も結構な数の痣が出来てるな。あいつの強烈で峻烈な思いの力がこちらに響いてきた。

「お似合いだよ。お前さんらは

俺はレジルを抱え上げて、医務室にまで運んだ。そして会場に戻ると、暖かい拍手が俺たちを迎えてくれた。

本戦七回戦・試合後

「兄さん、大丈夫?……って、うわ、どうしたの?その髪
「ん?なんか変か?」

試合も終わり、俺は観戦室に取りつけられたシャワーを浴びてち
ょうど上がってきた所に、明美と真由美さんがやつてきた。ちなみに
に城宮君は少しへいに行っている。

「だつて、ねえ?」
「どうして髪の色が白色になってるんです?脱色ですか?」
「脱色とか言わないで! 神喰狼との同調率を上げると、こいついう事
になるんですよ」

俺の髪の色が白銀の色になつてた事に驚いてたのか。一応言つて
おくが普段の俺は黒髪黒目だ。
まあさすがに、田の色は変わらなかつた。しかし同調なんてした
のは久しぶりだ。さすがにいつもやつてる訛じやない。普段
は生身のままだし。

「さて、それじゃあ帰るとしようか」
「お待たせしましたー。って、あれ?お一人ともどうしたんです?」
「あ、城宮君。これから帰るうか、つてところだよ
「そなんですか」

そして四人で駐車場に向かつて歩き始めた。最初は俺が車を動か
すから待つていてほしい、と言つたんだがついていくと言つて引か
なかつた。なんでだろ?

「それにしても、改めて乾さんの認識を塗り替えられた気分でしたよ」

「そりゃあ、普通の人にある芸当はできないでしちゃうね。何？城宮君はあれぐらじで見るよつになりたいの？」

「そこまでは言こませんけど。それでも強くなりたい、とは思いましたよ。やっぱり」

「……一人つてさ、結構仲いいよな？」

「な、何言つてんのよ。そんな訳無いじゃない。これ位普通だつてねえ？」

「なにどもつてんだよ。余計あやしさを盛増じやないか。……」

けの話、城宮君はどう思つてんの？」

「えつ？どういう意味なんですか？」

「天然かよ。まあ、それはそれで面白いから別にいいんだけどな」

そして歩いたところで、九条さんに出会つた。

どうも彼は俺に用があるらしかつたので、三人には先に駐車場に行つて貰つた。真由美さんが最後までこねていたが、何とか言つくるめて行つてもらつた。

「……それで？どんな御用なんですか？まさか文句を言つに来た訳ではないでしょ？」

「相変わらずだな。君は。なに、おめでとうと言つに来たんだよ。だが君は決勝で負けるだろう。それは見えてる事だ。あの程度の試合しかできない者に、私が負けるはずなど無いのだから」

「それじゃあもう用は済んだな？俺は失礼するぞ」

「待ちたまえよ。まったくこれだから乾家の人は困る。どいつもこいつも話を訊こいつとしない愚か者ばかりだ。それに頑固な千葉家の血が混ざれば、いつも偏屈になるのは当たり前か」

「……今、なんて言った？」

俺の声がここ最近で最も低く冷たい物となつた。だが興に乗つたのかその声に気づかず、九条の声は上がつていつた。

「なに、簡単な事だ。『魔術の神童』と『千葉の天女』の息子はこ
うも愚かだという事だ。

どちらの家も愚かだが、君の家は特に、だな。大体

「

「言いたい事はそれだけか？もしそれだけなら、俺は行かせてもら
う」

「ふ、ふん。勝手にしたまえ。ま、せいぜい無様な様を晒さないよ
うにするのだな」

そう俺に告げると、高らかに笑いながら去つていつた。だが、そ
の声は震えを紛らわすかのようだつた。それもそうだろう。なんせ
俺が強烈な殺氣をぶつけているのだから。

「お前だけは絶対に……殺す」

俺はそつそつと歩き、皆が待つてゐる駐車場に向かつて歩き始め
た。

本戦最終日（1）

翌日、つまり本戦最終日。俺は、いや俺と九条はフィールドに立っていた。

いや、ただまだ試合開始のホイッスルが鳴り響いていないだけで、攻めあぐねている訳じやない。ぶっちゃけ、見た限りじや隙だらけだと言うしかない状態だしな。

「ファン、負ける言い訳は考えてきたか?」

「自分が負ける可能性を考慮していない段階で愚かだよな。お前の親父殿……」当主は何も言わなかつたのか？」

だ。親父殿も心配症だから困る上

愚かなのはお前じや、ボケ！と言いたくなつたが、ぐつとこらえた。俺は秘密裏に行われた決闘で当主を倒している。その忠告もろくに訊かずにこの態度。本当に愚かすぎる。

真由美さんには何か心配そうな顔をされた。心配する要素なんかどこにもないというのに。それとも微妙にまき散らしてた怒氣というか殺氣を感じ取られたかな？

貴様のよつな出来損ないを倒し、私が真由美さんを手に入れる。

をな！」

「そりが、そこまで死はないとこだらけで黙り通じ……殺してやるよ」

ピイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ

ちょうどよく試合開始のホイッスルも鳴り響いた。こいつだけは

「……殺す！」

『マキシマムコネクト フル・シンクロ
「最大接続！完全同調！」』

『珍しいな。最初からここまで飛ばすのか？』

「黙つてろ。いいから力を貸せ！こいつだけは！俺の家族を侮辱したこいつだけはここで…殺す！」

俺は鎧を纏い、そして鎧は今まで以上に光を放つた。そういうえば昔、誰かが言っていた気がする。

『俺達の力は思いによって、その幅が変わる。とてつもない怒りの所為で力が強大化するとかな。だけど、怒りには呑まれるなよ？それはお前に滅びをもたらすだけだからな』

怒りに呑まれるな？無茶を言つな。この男は家族を侮辱した。俺の事は別に構わない。それでも、身近にいる人の侮辱に対しては俺の沸点はとてもなく低い。

そんな俺にこれだけの罵倒を浴びせたのだ。その罪は死を持つて贖うぐらに当然の事だらう。

「それがお前の力か？恐るるに足らんな！」

俺はなにも喋らずに、九条の目の前まで駆け抜けた。速過ぎるせいで知覚できなかつたようだ。俺が目の前に現れると驚いたように目を見開いていた。

俺は九条の顔をつかむと、思いつきり地面にたたきつけた。今の俺は神喰狼の力と精神と同調させている。

そんな状態で叩きつけられれば、頭蓋骨が粉碎されて死んでいるだろう。だが、どうやら騎士団の鎧と同じ素材を頭の後ろに集めて

粉碎だけは防いだらしい。

顔を歪ませてはいるが死んではいなかつた。俺はそれを良い事に、九条の顔を掴んで空中に放り投げて、もうアホらしい威力の拳を何十発も叩きこんだ。

とてつもないだろうな。さしもの俺もこんだけの攻撃を再起不能確定つてレベルだ。だが、まだだ。まだ足りない。

「天竜砲・轟！」

俺は止めどばかりに鎧通しの技術を発展させた、対遠距離用の技を放つた。だが意識を取り戻したのか、鎧の力を残面に収束させていた。

「しゃらくさいんだよ！とつととくたばれ！雷・炎・氷・光！四天烈波・霸！」

鎧通しの攻撃は当たるまで時間がかかる。その間に四属性を纏わせた拳でその盾を破壊した。そして天竜砲の攻撃が直撃した。

本戦最終日（2）

「まだ意識があるとは、さすがに驚いたよ。ま、今の内に訊いといてやる。昨日言った物を含め、俺の家族に対する罵倒を撤回する気はあるか？」

「ある訳が無いだろ？ 貴様が良い証拠だ。己の感情の為にしか動かない、そんな輩がいる家を侮辱して何が悪い！？」
グハッ！」

「そうか。良くわかつたよ。
貴様が途方もない愚か者だつてことがな」

俺は足を九条の体の上に置いた後、思いっきり押しつけた。それこそ衝撃が地面に伝わるほどだ。

お、今骨が折れた音がしたな。一、二本は折れたかな？ それでもまだこちらを睨みつけていたので、さらに力を込めるときさすがに悲鳴を上げた。俺の怒りはそんな物で薄くなるほど甘くないんだ！

「もう止めてよー兄さんー！」

俺が肩越しに振りかえると、肩で息をしている明美と真由美さんが立っていた。
どうやってきたんだ
つてそりや魔法陣で来たに決まってるよな。

「何の用だ？ 明美。一応まだ試合中だぞ？」

「もういいよ。そこまでして私達の為に怒らなくてもいいよー！」

「……お前が良くて、俺は全くよくないんだよ。特にこんな何も知らない奴にそんな事を言われるととてもなくむかつくんだよー！」

ミシミシッ！

骨が軋む音が聞こえてくる。こんな何も知らない奴に俺の家族が侮辱される。ここまでいらっしゃる事がそつあるものか！

「俺の事は別に構わないよ。俺はいろんな事をしてきたから、罵倒されようとも侮辱されようとも甘んじて受けよう。だが、俺の家族は関係ないだろ！？」

こんな輩がいるから迫害なんかが絶えないんだよ。そして俺はそういう輩が大嫌いだ！

何か言いたい事があるなら、そいつだけにしろ！ 何も関係ない奴を、巻き込むんじゃねえよ！」

俺の脚の力がどんどん大きくなつていぐ。ついに下の地面に亀裂が走り始めた。そして同時に氣を失つたらしい。眼を閉じながら荒い息を吐いていた。

そして相手が気絶したせいで、俺達は強制的に元の世界に戻された。そして周りには恐れるような顔をしている観客達がいた。当然の反応だが。俺は鎧を解除して真由美さんに顔を向けた。

「そしてこれは、貴女にも言える事なんですよ。真由美さん」「えっ？」

「俺は、貴女の道具じゃない。例え俺の力が稀少だからと言つて、そのために婚約するとか……ふざけないでもらいたい。俺はあなたの事は別に好きでも嫌いでもないんです。

そんな相手に対してもう婚約とか、できる訳無いじゃないですか」「それは……」

「兄さん、とやかく言つてゐるけど要するに自分の傍に居させたくないだけでしょ？」

「分かつてゐるならいちいち言つたな。ぶつちやけて言つてしまえば、俺の傍にいる人間は不幸になる。それがわかっているのに、それを

見過したことなんて俺には出来ない。出来ぬなりば、幸せになつてほしいから」

「それなら大丈夫です」

「え……？ それはどういつ

「私はもうすでに幸せですよ。あなたと出合えて。何とも思わない相手に對して婚約して下さい、なんて言こませんよ。私が選んだ『幸せ』なんですから」

「でも、俺の所為で父さんも母さんも死んでしまったんですよ？ そんな俺と一緒に居たつていい事なんかありませんよ？」

「一体何を言つてるんだ、この人は。俺と出合えて『幸せ』だ、だつて？ そんな訳無いだろ？ 俺は神すらも喰らう神狼だ。そんな俺と会えて幸せだつて？

「それなら、俺の葛藤はなんだつたんだ？ 長い間悩んでいた俺はなんだつていうんだ？」

「むづ。いちいちやかましいですよ。そんなお喋りな口にはいつしちゃいます」

いきなり俺にキスをしてきた。あまりにも突然過ぎて体が反応できなかつた。観客達もあまりの出来事に驚いて誰もが口を開けたままだつた。そして一人の硬直が解けると連鎖的に声が上がつた。

「「「えええええええ————————」」

「な、何を……」

「てへ。家に帰つたらもつと凄い事をしちゃいますからね？」

「冗談ではなかつた。その後、しばらくの間俺は唇が引きつっていた。まあ、柔らかかつたんだけどね？自慢じやないけど……。

それはもう頭から追い出しておこう。午後からは一花さんと闘う。もう誰と闘つかは大会委員会に伝えてある。後はそれに備えるだけさ。

本戦最終日・Hキシヒシヲノマツチ(一)

「それではこれより、一桁数字の第一位一花花蓮選手対本戦優勝者
乾慎也選手のエキシビションマッチを始めたいと思います！」

——ウオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

午後になつて俺達は試合会場に居た。今回も今までどおり、魔法陣で移動すると思つたらそういうじゃないらしく特別ステージに移動した。

「さて準備は良いですか?」

「私はいつでもオッケーだよ？それよりもむしろ、賭けしない？」

「賭け? 何を賭けるんです?」

「そうだね……。私が勝つたら名前で呼んでもらおつかな?」

それだけにいいんであるが、それよりお前の城主君を元の世界に返すのを手伝つて下さいよ

「別に構わないよ? それにしてもこれでお別れか、なんだか来る物

たあるよね」

「あああんざは。せうがいをうせうわく、さうむらわくにまつわる。

「分かりましたよ」

「それでは両者準備はよろしいですね？」

「ああ」「ええ」

「それでは試合開始！」

「マキシマムコネクト」パーフェクト・シンクロ
「最大接続！最大同調！」

俺は先程の試合より洗練された形の鎧を纏い、一花さんは黄金の衣とモノクルを掛けていた。

「じゃあ、開幕そつそつなんだけど、いかせてもらひつよ

汝は絶対必中の神槍なり。今我が下に顯現し我が敵を撃ち
抜け。グングニル神槍！

空間を割いて現れたのは一本の槍だった。だが、その穂先にはローン文字が刻まれていた。その術式によつてどこまでも追いかけ相手を貫く。

「行きなさい。我が宿敵、フヨンリル神喰狼を 射ぬけグングニル！」

車が猛スピードを出したかのような速度で俺に迫ってきた。さすがにこれを完全に回避するのはキツイな。どうしようかな？

本戦最終日・Hキシビショノマツチ(2)

「それがどうした！ 総てを喰らいし神狼よ、汝が牙の力を我に！」
フヨンリストヴォルフ！」

俺は背を^{グングニル}反り返して槍をかわしつつ、右拳で槍の穂先を殴つた。すると、^{グングニル}神槍に刻まれていたルーンが消えて無くなつた。そりやもうあつさりと。

だけどその事に対し、一花さんは驚きもしなかつた。そりやそうだ。これは前に俺が暴走した時に開発した対神槍用の技なんだから。

「前は暴走してた時に使つてたよね。あの時はさすがに一人じゃ勝てないと思ったよ」

「あれは完全に俺の身体の限界を無視して、^{フヨンリスト}神喰狼が動かしてましたからね。あれから数日は全然動けませんでしたよ」

「数日で済んだなら大した物でしょ……。あれで結構な被害が出たんだからね？」

「世界最強の呼び声の高いあなたを含め、二木さんと三橋さんの二人がかりで俺は攻撃されたんですけどね！？」

「仕方ないじやん。あなたは一応『神喰狼の魔物』なんだから」

「それでもあれはひどかった。なんせ三橋さんに吹き飛ばされ、二木さんに^{クラブノス}雷霆をぶつけられ、貴方に神槍を当てられる。悪夢のようでしたよ」

その後キチンとした処置を施されていなければ、ぶつちやけ死んでいたと思う。治療班の人には感謝の気持ちで一杯だよ。

「それじゃ今度はこちらが行かせてもらうとしましようかね。

汝は雷霆。あらゆる者を射抜き、我が前に骸を作り上げよー。

ケラブノス

「ー?」

俺の掌の先に雷が集まり、その色はどんどん紫色になつていった。
そして限界まで収束させきつたそれを一気に放つた。

一花さんが驚くのも無理はない。これは本来一木さんの技だ。誰にも真似する事が出来ないギリシャ神話の天空神の技だ。

「その雷霆を貫き破壊しなさいー。『グングニル』ー。」

まあ、その攻撃も至極あつさりと破壊されてしまつた訳だが。これを再現するの結構大変だつたんだけどなあ。

それでも驚愕だつたのかしばらくは攻撃してこなかつた。

「どうして?今は魔力じやなかつた。確かに神力で構成されていた」「そりや、雷神^{テウス}の力を使ってますからね。構成されてなきやおかしいですよ。

それに俺達に停まつている時間なんかありませんよ?」

俺は瞬時に一花さんの懷に入ると、右ストレートを叩きこんだ。が、神力で瞬時に防御陣を構成されて防がれた。ちい、おしかつたな。

「それならこいつするだけだよー。

数多の神槍よ!今我が敵を撃ち抜け!
ベン!」

「ざつと一十本ぐらいかな?だけど、それがどうしたつていうんです?」「

俺は瞬時に動いて、総ての槍の穂先を殴った。それだけでグングニルは力を失い落下してきた。もちろん、下には一花さんがいる。まあ、当たり前というか簡単に弾かれたんだけど。そしてまた膠着状態に持つていかれた。いつたいどうやって打開しようか？

本戦最終日・ヒキシビシヨンマッシュ(3)

そこからはほぼずっと平行線だった。どんな攻撃をしても対応してくれる所為で、どんな攻撃も効かないんだから仕方ないだろ？

「氷結の世界よ。今その力を現界させ、この世界を飲みこめ。『ブルヘルーム』！」

「灼熱の世界よ。今その力を限界させ、この世界を焼き尽くせ。『ムスペルヘルーム』！」

俺は氷を。一花さんは炎の術をぶつけあつた。急激に空気中の温度が変化したため、霧が発生した。俺はこれを狙つてたんだがな。

「全ての者を凍てつかせる悠久たる大地よ。今我が敵を深き眠りに誘え。『ロキュートス』！」

俺の放つた術は水系統最強の術である『ロキュートス』だ。この術は一気に零下三十度を超える勢いで空間を凍らせる。

この術を壊すには、圧倒的な魔力をぶつける或いは炎系統最強の『ラグナロク』をぶつけるしかない。

だけど、そんな事をすればただでは済まない。ダイナマイド二十個分ぐらいの爆発が起きるんじゃないかな？俺は鎧だからまだ大丈夫だけど、一花さんは神力を帶びているとはいえ、ただの布だ。耐えきれる訳がない。

俺はそう確信し、霧が晴れた所で結果を確認しようとすると、そこには驚きの結果が待っていた。

「なつ……！？グングニル神槍を身代わりにするだと…？」

「君の策は面白かったよ。でも、それもここでファイナーレだよ！」

汝、絶対必中の神槍よ！我が敵をその無限の槍にて討ち貫け！

『グングニル・インフィニティア』！

「つてなんて数だよ！？」

俺がざつと確認しただけでも、三百本以上あつたぞ！？無限の名を冠するだけはあるな。この場ではめんじくさい限りだがな！

「光と闇交わる時、そこには『無』があるのみ。全てを呑み尽くせ！虚無！」

俺は『虚無魔術』で何とか喰らいまくつた。ちなみにこの術で喰らつた物は何でもかんでも魔力に変換される。俺の魔力回復も兼ねてるんだよね。この行動は。

でもやつぱりそれでは間に合わなかつた。まず両足の甲に当たられて、動きを制限された後に腕・肩・太もも等etc。

俺が鎧の中で喀血すると同時に、一花さんは神力で作り上げあげた神力の塊を槍状にして俺に飛ばしてきた。もちろん俺が動ける訳もなく。

腹の辺りに直撃すると、俺はそのまま場外まで浮き飛ばされた。そこで試合は終了。

長かつた十日間の日程は、一花さんの勝利によつて幕を閉じた。え？その後俺がどうなつたかって？そりやもう分かりきってるでしょ。魔力とは血に含まれる成分だから、使いすぎた所為で血が少なくなる所に、体中を槍で刺されたから血が圧倒的に足りなくて死にかけたよ。あつはつはつは。

まあ、そのあと笑い事じやないでしょ！つて真由美さんと明美に怒られたんだけど。痛かったしすげえ怖かった。今まで一番の衝撃だったね。

本戦最終日・ヒキシレジニアム・マッシュ（三）（後書き）

ついに世界代表トーナメントも終了です。次からは異世界冒険編になります。それではまた後ほど。

異世界への出発

大会が終わり一日たつた今日、俺は城宮君を彼の世界に戻すために彼を連れて異世界へ行く事になつた。一花さんが座標を調べてくれたらしく、準備が終わつたら自分も行くらしい。

その事を真由美さんに伝えると、「だつたら私も行きます」と言つてきた。理由を訊いてみると、こう答えられた。

「だつて、花蓮さんつて慎也さんとの距離が近いんですねん」

と言われた。距離？なんの事かいまだにさっぱりわからん。そう告げると、でしううね。つて呆れられたような返答が帰つてきた。これひどくね？

「さて城宮君。準備は大丈夫かい？」

「はい。最後までお付き合いでござります」

「気にしないでよ。俺も君にいろいろと教えてもらつたし。ギブアンドテイク、だろ？」

「あはは、そうですね。乾きんで何回異世界に行つた事があるんですか？」

「数えたらきりが無いからわからん。まあ、十回以上は軽く行つてるよ。なに？次元移動術でも知りたいのかい？」

「ええ。欲を言つなら。たぶん無理なんでしょうけど」

「別に無理じゃないよ？失敗してもいいなら、だけど」

「え？」

えーと、どこに入れたっけ？俺は扱いでいた袋を開いて、中身をあさりだした。後ろで城富君の何をしてるんだろ？といつ視線を感じるが無視。お、あつたあつた。

「はい、これ。次元移動術の術式の論理とか構成が書いてある本だよ。ま、自分で練習してみなよ」

「あ、ありがとうござります。……でもいいんですか？こんなのもらつちやつて」

「大丈夫、大丈夫。俺はもう使えるし、それにもう数冊書庫に入ってるから」

「「お待たせ（しました）」」

「人が準備を終えたらしく、一緒に現れた。つていうか一人とも化粧してるんじゃないかな？」

「なんでオシャレなんかしてんの？まあ、綺麗だとは思つけども、『いいじやん。つていうかそろそろ教えて下さいよ。城富君の世界の座標。一花さん全然教えてくれないから、分かんないんですよ』

「止めて下さこよ。つていうかそらつと褒める辺り誇しの才能あるんじゃない？」
「そこだよ。賭けで私が勝つんだから、名前で呼んでくれないと教えてあげない。後敬語禁止ね」

「分かったよ。それじゃあ、教えてくれよ。これでいいのかい？花蓮」

「バツチリ！この紙に書いてあるのが座標だよ。まあ、見なくても私の肩に手を置いておいてくれればいいんだけど」

……やつぱりこの世界か。なんとなくそういうじゃないかと思つてた

んだけビ、ドンピシャだつたな。俺と真由美さんが肩に手を置き（何故かわざわざ手を重ねてきたけど）、城宮君はなぜか手を握られていた。

「それじゃあ、行くよ

掛け声と共に、俺達は今いる自分達の世界を旅立ち異世界に向けて出発した。

光が収まつて周りを見回すと、そこは普通の住宅街だった。変哲もないが、平和を感じる。そんな空氣の住宅街だ。そして目の前の家の名前には『城富』と書いてあつた。

「帰つてこれたんだ……。本当に戻つてこれたんだ」

「よかつたね。それでどうするの？すぐ帰るの？」

「まさか。俺はもう一個用事があるんですよ。城富君、この辺りに雨富さんっているかな？」

「え？ ひうの隣ですよ？ ほら、あそこ」

城富君が指をさした先を見てみると、そこには『雨富』と二つ名前が書いてあつた。

「マジかよ。ま、それなら後回しでいいか。取り敢えず君の家族の人に挨拶しこうか」

「え？ いいんですか？」

「あのね、君の親御さんから見れば君の安全が大事なんだから当たり前でしょ。

つていうか家に居るのかい？ いないんだつたら後でもいいけど

「いえ、いると思いまーす」

俺がインター ホーンを押すと、ピンポーンという間抜けな音が鳴り響いて少し待つと扉から苦労しているのがわかる女性が出てきた。

「はーい。つて……貴……也……？」

「…………うん。ただいま、母さん」

城宮君がそう語つとその女性、つていうか城宮君のお母さんは無言で城宮君に抱きついて泣き始めた。内心不安だつたんだろう。

いきなり息子にいなくなられて、怖かつたんだろう。それだけに元気で戻ってきた姿を見るのは、嬉しい事なんだろう。
それがわかるだけに、俺はずつと黙つてこの二人の親子を見守つていた。しばらくすると、立ち直つたのか俺達を家の中に招いてくれた。

「あの、名前をお伺いしてもよろしいでしょうか？」

「あつと、これは失礼しました。俺は乾慎也と申します。こちらは神崎真由美さん。そして最後に一花花蓮さんです。この度は早く帰す事が出来ず、申し訳ありませんでした」

「いえ、帰つてくれただけで、私は安心しています。連れてきて頂き、ありがとうございました。あの、それでこの子はどういひたんですか？」

「申し上げにくいんですが……異世界、と言つたら信じますか？」

「……なるほど。まだどうしたらそんな所に行くのやら、分かりませんね」

城宮君のお母さんは、予想外に簡単に信じてくれた。あれ？異世界人つてメジャーなのかな？

「此処の住宅街は魔術師が住んでいますので。私の夫もそうでした。ですから今更異世界やらなんやらで驚く気にはなれませんね」

「それはそれは。うちの世界でも魔術はメジャーですけど、それなら信じられるでしょうね」

「貴也、あんたちょっと学校に行つて皆に安全を伝えてきなさい。みんな心配してたのよ？特に竜美ちゃんが」

「竜美が？……うん、わかつた。あの、申し訳ないんですけどついてきて貰つても良いですか？」

城富君が何を言つてゐるのか、ぶつちやけわからない。日本の治安は世界でも高い方なのに、何を心配する事があるんだろう？

「うん？ なんで？ 学校の位置を忘れてる訳じゃないだろ？」

「そうですけど。でも心配させたんだから、という理由で無理難題を吹つかれられそうな気がして……。お願いします！」

「あはは。いいよ。もしかしたら覚えるかもしれないな。結構久しぶりだけど、どうしてるかな？」

「え？ 何か言いました？」

「いや？ 何でもないよ。それじゃあ、行くとしようかな。一人はどうする？」

「ついていきます」

「OK。それじゃ、行こつか」

『竜美ちゃん』は元気にしているかな？俺の体感時間だと五、六年経つてるんだけど。久しぶりだ。俺の事を覚えてるかはわからないけど。

それで俺達は城宮君の家から歩く事、二十分ほどが経つた場所つまり学校に着いていた。見た目だけは変哲も無い、どこにでもありそうな学校だった。俺も疑わなかつただろう。結界が無ければ。

そう、もう明らかに結界が張つてあるんだよ。信じられるか？結界だぜ？ここにはどこの軍事主要施設なんだよ、とでも言わんばかりに厳重だし。

「なあ、城宮君。思いつきり結界が張つてあるんだけど、俺達は入れるのか？」

「あ、大丈夫ですよ。この書類に名前とか書いてくれれば、俺が印章押しますから」

「ふうん。つていうかこの学校、生徒は全員魔術師かい？」

「よくわかりましたね。そうですよ」

「いくらなんでもこれはわかるよ。ねえ、花蓮さん？」

「さんはいらない。ま、そうだね。このむせ返るほどの量の魔力。一人じや無いなら複数。でも結界が張られている所から見て、全員が魔術師だと判断するのが妥当だろうね」

「そりなんだよな。どう見ても、この量の魔力は普通じゃありえない。い！」

「え？魔力は見えるものなかつて？厳密にいえば、見てる訳じやない。うーん、なんていうか気配みたいな物だと考えればいいのかな？」

「見えないけど、そこには確かにある物……とでもいうのか。ま、空氣みたいなもんだ。しかしこの中でも際立つてるのは、ざつと十人ぐらいかな？」

「さて、これでいいのかい？」

「はい、これで大丈夫です。それよりも神崎さん、どうかしたんですか？」

「えーと、もう人来てるみたいなんだけど……」

「え？」

周りを見ると、確かに何人かの生徒が立っていた。しかも猛烈な敵意をぶつけられている。そして代表の……明らかに高慢な女生徒が出てきた。

「おい、貴様ら。この学校に何の用だ？」

「一応、職員室の先生とか彼の友達とかに用事があるかな。そういう君たちこそ何？それだけかい？」

「無論、まずは退いてもらおう。確かにその生徒は、失踪中だった城宮貴也君なのだろうが。それでもまずは連絡を入れておくのが普通ではないか？」

「なるほどね。確かにそりやそうだ。でも、こちとらそんな事は知つたこつちゃないのさ。

君たちに選択肢をあげよう。普通に退くか、俺に倒されて退かされるか。どっちがいい？」

「貴様、ふざけているのか！？」

「そこまでにしなさい」

全員が声のした方を向くと、そこには副会長の腕章をはめた女生徒がいた。うん？っていうかもしかしてあの子は……。

「ふ、副会長。どうしてここにいる？」

「それは私のセリフよ。どうして君にこんな所にいるのかしら？」

私は貴也を迎えに来ただけだけど

「こんな不審者を放置する訳には参りません」

「……ん？もしかして君が雨宮竜美さん？」

「ええ。そうですけど……失礼ですがあなたは？」

「あはは、覚えてないか。久しぶりだね、『タツちゃん』」

「もしかして……慎也さん？でしたらその呼び方やめて下さい」

「ご明察。今はこんな状態だけど。しかし、君が副会長ね。中々面白そうじやないか」

「貴様、副会長になつて口を訊くんだ！」この人は学園で一番目の実力者なんだぞ！」

「そりゃ。じゃあ、君は黙つてなよ。雑兵には欠片も興味無いから

「貴様、ふやけるなよ！」

その高慢な子は、俺に無詠唱の魔術を放つてきた。属性は氷、か。

甘いな、甘過ぎる。

いくら無詠症とは言え、この程度しか出せないのか。なんだかがっかりだな。俺が手を打ち払うと、その衝撃にすら耐えられず粉々に砕け散った。

「これで満足かい？もう面倒だし、行こうか」

「ま、待て！」

「まだ何か用か。これ以上俺達を無駄な事で立ち止まらせると言つ

のなら」

「言つのなら？」

「怪我ぐらいは覚悟にした。そしてまだ智恵が回るつづりかい
け。俺はもう優しくないぞ」

俺の止めの言葉が効いたのか、その生徒と取り巻きの子たちは黙つて俺達を見過ごした。少々厳し過ぎじゃ？とも言われたけど、俺はああいう輩が嫌いだ。

自分の持っている力が他の人は持っていないと分かると、そいつはやたらと図に乗る。俺はそうやって他人を蔑む輩が嫌いなんだ。そう告げると、俺は竜美ちゃん先導のもと職員室に行つた後、城富君の教室に向かつた。

生徒達と模擬戦（1）

「それでまた、どうしてこうなるの？」

「何言つてるんですか。いいでしょ？別に減るもんじやないでしょ」「減るけどね！？俺の魔力とか色々な物が！」

あの後、城宮君の教室まで付いていくとそこには結構な魔力を持つた子達がいた。そして再会を喜んでいる所を見ていると、俺に唐突に挑んでくる生徒がいた。

「あの、俺と闘つてくれませんか？」

「一応訊いておくけど、君は？」

「あ、すいません。俺は天条櫻次てんじょう もりつぐとあります。現代魔術の一派の次期党首です」

「ほう？そりゃ面白そうだね。俺は別に構わないよ？精々足搔けるだけ足搔きなよ」

「ありがとうございます」

「え！何それずるい！慎也さん、私も良いですか？修行の成果見て下さこよー」

このセリフを皮切りに、教室中からじやあ私も！といつ声が多発。今じゃほぼクラス全員が俺の目の前に立っていた。

「それじゃあ、皆準備は良いかい？」

「大丈夫です」

「そんじや、試合開始！」

城宮君は審判。参加したげだったけど、無理やり止めた。さすがにこれ以上増えるのは避けたい。大体、これでも結構無理してるつ

て詰つた。これ以上はとてもじゃないが無理だ。

「はあ、一回や多いな。小隊戦形式にしどいて正解だつたな。さてはて、相手も面倒だな。よし、これで行こう。全てを零へと還せ『ラストエレメント 最終元素』」

俺は右手に白の手袋を現界させて、飛んできた魔力の球の数々を消し去つた。相手が驚いてる間に、魔力で作った衝撃波を放つて脳震盪を起こして気絶させた。

でもやっぱり一筋縄ではいかなかつた。竜美ちゃんが魔力で壁を作つて阻んだらしい。まだ立つていた。面倒くさいなあ。

「祖は全てを貫く光槍！ 我が敵を撃ち抜け！『メタトロン』！」

鋭い光が飛んできたが、俺はそれを現界させた『最終元素』で受け止めて消し去つた。うん、前見たよりは術も洗練されてるし強くなつてるみたいだね。

「でも、甘い。それにメタトロンの術式はそれじゃない。

汝は神の代理人なり。汝が持ちし炎の柱を用いて我が敵を焼き尽くせ！『メタトロン』」

俺の左手からとんでもない熱量の炎が噴き出し、目の前にある全てを焼き尽くさん勢いで放たれた。

え？ そんなことしたら火事になるつて？ 大丈夫だ。言い忘れてたけど、ここは演習で使われる場所らしいから外にあるんだ。

竜美ちゃんは炎を何とか受け止めきつたが、魔力の使い過ぎでふらふらになつっていたので、さつきの衝撃波を撃つて気絶させた。ま、効力は二十分がせいぜいなんだが。

しかし、最初のメンバーでこれだけつて後が大変じゃねえか。

ああ、本当に面倒だなあ。

生徒達と模擬戦（2）

「さて、後どんだけ残つてんだ？」

「ええつと、これで最後ですね。一チーム六人編成でもう五試合しましたから。うちのクラスは三十一人でしたから、残りは一人ですけど」

「ふーん、それで君たち準備は良いかい？」

残りの一人は俺に名乗ってきた天条君と桧原さんだつたかな？この二人が相手だった。この二人は俺が、感じた数少ない魔術師の人だった。

「「大丈夫です」」

「そりゃ結構だな。さあ、さつさつとかかってこいよ」

「其は焰。全てを焼き尽くす炎獄の元に我が全てを薙ぎ、祓いたまえ！」

『フェイス・ヘルト・ハルビア
天神炎獄』』

「汝は雷。我が敵を葬り、全てを灰塵すらも残らぬほどの大地へ帰せ！」

『アルナス・エンフェルビア
雷霆葬送』』

『ムスペルヘイム』に匹敵するほどの大火力と『ライティング・ジャッジメント』と同等の出力の雷がこちらに迫ってきた。

そして俺に当たり、とんでも無い量の爆発を誘発した。俺が何もしなかつた事に慌てているのが空氣で分かる。

「いやあ、これはこれは。さすがにこれ位は出るか。面白いな」

「 「...?」 「

「おいおい、これ位で驚いてもひつちや困るぜ? ま、いいけどさ。
そして君たちに見せてあげよ。本当の魔術という物をな」

汝は光。

これはまずいと肌で理解したのか、また新たな術式を練り始めた。
無駄なんだけどな。

総てを裁きし断罪の光を持ちて

全てを原初の世界へ帰す。

全てを始まりへ。『始まり』とこの名の『終わり』へと導
け。

ジャッジメント
断罪光!

「その全てを無くと歸せ。『最終元素』」

俺は放ちかけた術を強制的に最終元素で解除した。危なかつた。
今の放つてたら、ここから三十キロ四方が吹っ飛んでたわ。おい、
勝手に俺の身体を操るんじゃねえよ。いくらこんな異世界で強い子
に会えたからってさ。

『まあいいではないか。お前も面白かっただろ?』

そういう問題じゃないっての。一人の方を向くと、放心したよう
な顔で俺を見ていた。ありや、やっぱりちよつとやつ過ぎたかな?

「一人とも、大丈夫か……」

「あ、あのー！」

「へ？」

「今の、どういう術なんですかー？？あんな術は生まれて初めて見ました！」

「そりや見てたら怖いよ」

三十キロ四方を吹つ飛ばす魔術だからな。初見の時こそ死ぬ時だ
ら。

「名前を教えてもらつても良いですかー？」

「構わんから落ち着け。冷静な心を失つた魔術師に残されるのは死
だけだぞ」

「あ、すいません。じゃ、じゃあ食堂で話してももらつても良いです
か？」

「あ、ずるー！私にも教えてよ、乾さん！」

すると教室の一の舞とばかりに皆が騒ぎ出した。仕方ないので思
いつきり地面に足を叩きつけた。すると皆の騒ぎがぴたりと止ま
った。

「俺は聖徳太子じゃねえんだから騒がれても分からん。竜美ちゃん
はまた後で教えてやるよ。

どうせ後で叔父さんに会いに行くしな。それじゃ、食堂だつけ？」

「あ、はい。案内します。俺についてきて下さー」

そして俺達は、天条君先導の元食堂に向かつて歩き始めた。

食堂での再会

「それで？何を訊きたいんだい？」

食堂にて俺達は飲み物だけを買って座っていた。まずは一番最初に話しかけてきた天条君達だ。

「あの魔術は何なんですか！？」

「俺の持つている光系統最強の魔術。俺を中心に三十キロ四方が吹っ飛び未恐ろしい魔法だ。

俺がこれを最初に使った時、気づいたら周りに誰も残って無かつたからな。ありや怖かつた」

「はあ、なんでそんな魔術を使うかな？しかも神喰狼フンリョウに意識乗っ取られてたでしょ。駄目じやん、ちゃんと制御してないと」

「それは申し訳ないと思つてます。はい。でも、いつの間にか制御を奪われてたんだよね」

俺が一花さんも交えて話をしていると、その声は入口から唐突に聞こえてきた。そして同時に何かが飛んできた。

「光よ」

俺はそれを視認すると同時に咳いていた。

「ジズレイル、消し飛ばせ」

俺の足元の影から狼が出てきて、飛んできた光を咆哮で消し飛ばした。まあ、もちろんその後すぐに戻つていったが。基本的に面倒くさがりだから。

「それで唐突に何の用だ？」冥王 クロムウェル

「なんで君がこんな所にいるんだ？不法侵入者にはそれ相応の罰を。当然だろ？」「黙れよ、ガキ。五年前みたいにぼこぼこにされたいのか？」

「私だってあれから何もしていなかつた訳ではない。今度は立場を逆にしてやる」

「それ、死亡フラグだぜ？」過重力^{グラビティ}「

俺は術式を作動させて、クロムウェルを地面に叩きつけた。そして俺は近づいた。もちろん一歩歩く毎に、重力は増していく。俺が魔力を流し続けているからだ。

「お前が俺の事を恨んでいるのは知っている。が、それでもお前程度じゃ到底俺には敵わないのさ。

それぐらい、いい加減理解したらどうだ？アラザルト・クロムウェル

「黙れよ！狼風情が！貴様は山なり自然を駆け回っていればいいんだよ！どうせ貴様の家族だつて同じなのだろう！」

「黙れって言ってんだろ？お前が喋る権利なんかねえよ」

空気を揺らすほどの拳打を腹に向かってぶちこんだ。なおも喋ろうとしたから、震脚の要領で足を動かし鳩尾に打ちこんだ。そして一気に意識を刈り取つた。

「悪い。今日は気が削がれた。また今度でもいいかな？連絡先は後で竜美ちゃんに伝えておくから。

それじゃ、行くとしようか。こいつの傍には一秒たりとも居たくないし」

俺はそう告げると、残っていた皆に背を向けて歩き始めた。まったく苛々するな。なんでこんな感情を抱かねばならんのだ！腹立たしい。

「それじゃあ、竜美ちゃん。家に行つても良いかな?」

「多分いいと思いますよ。居ると思いますし。それにしても学園長に勝てる人がいるとは思いませんでした」

「え? あいつはそんなに強くないよ。あいつは氣絶している者とかを操る力に長けてるだけだから」

「それでも、ですよ。ただの魔術の技術も結構高いですから」

道中、俺達は談笑しつつ竜美ちゃんの家に向かっていた。城宮君は職員室に呼ばれたので、俺達の傍にはいない。

「それで一人はどうしてさつきから黙つてんの?」

「いや、あんな姿を見れば仕方無いんじやない?」

「俺からすれば、人様の家族を侮辱するような輩は死ねばいいと思つてるから。」

大体、実力で劣つているからと言つて全く関係の無い者を侮辱するのは間違つてゐるとは思わないのかい?」

「それはそうですが……。でも、あそこまでするべきはなかつたのでは?」

「だから、俺にはそんな事はどうでもいいんだよ」

「どうでもいいって、それはひどいんじゃないですか?」

「何が? 人様の家族や知り合いを侮辱しといて、そんな事をぬかす奴がいるんだつたら連れてきなよ」

「どうするんですか?」

「再起不能になるまでぶん殴つてやる。大体、都合がよすぎるのでしょ?」

人様の事を侮辱するんだから、自分も肉体的にせよ精神的にせよ、負傷を受けるのが筋つて物じゃない？」

「それは、あんまりだと思います」

「因果応報、自業自得。やつたからには自分が責任を持つ。何をされても、決して文句を言つちゃいけない。やるからにはやられる覚悟を持ってってね。家の家訓の一つか」

「乾家の、ですか？」

「そうだよ。竜美ちゃんだつてそうだらう?..」

「ええ。お父さんから訊いています。

世界を改变する力を持つ魔術を使う者は、それに伴つて起こる全てを受け止めなさい。つて

「うん、全然言いたい事が違うね。それじゃあ、こいつ例えでいいこうか。

魔物に殺された人がいる。その人は剣士で、でも弱かつた。この場合はどうなの？」

「そりや弱いからいけないんでしょ？」

「同じ事だよ。強い者ならば、そんな事はしない。弱い自分が悪いんだから、悪意のある言葉で無関係の人を傷つけるのはお門違いも甚だしい、つともんわ」

取り敢えずはそれで納得してくれたのか、反論が飛んできたりはしなかつた。俺は城富君の家に荷物を取りに行つた後、兩富家に着いた。

「ただいま。お母さん、慎也さんと知り合いの人が来てるよ」

「え?本当に?……あらあら、久しづりね。その髪、どうしたの?」

「ちょっと色々あります。叔父さん、いますか?」

「いるわよ。まあ、取り敢えずあがつてちよつだい

そして俺達は居間まで通された。しかし五年ぶりに見たというの

に、あんまり変わって無いんだな。俺の家でもあんなに変わっちゃつてるのに。

「やあ、久しぶりだね。元気にしてたかい？慎也君」

叔父との再会

「久しぶりだね、荒爾叔父さん。元気だつた?」

俺は久しぶりに、父さんの弟である荒爾叔父さんと再会を祝つていた。

「まあね。問題は特に無いよ。つと、これは失敬。初めまして。私は雨富荒爾と申します。旧姓は乾ですが」

「初めまして。神崎真由美と申します。一応慎也さんの婚約者です」「初めまして。一応名前は訊いておりましたが、自己紹介しておきます。一花花蓮と申します」

「婚約者、ね。君も隅に置けないねえ、慎也君」

「止めてよ叔父さん。はい、これ頼まれてた本だよ」

「おつと、済まないね。そちらの世界に行く用事が無いから、中々行けなかつたんだよ」

「そんな事よりも叔父さん、訊いたよ?叔父さんが『現代魔術^{アリストル・マグナ}』を作つたんだつて?どうして教えてくれなかつたんだよ?」

「まあ、落ち着いて。はい、ダージリンティー。好きだつたでしょ?」

「?」

「まあね。それでどうして教えてくれなかつたの?」

「その技術はまだ不完全だからさ。今は携帯に入つてあるシステムが、自動で術を作りそれを僕が作ったサーバーで自動収集しているんだよ。だから」

「現代魔術師はそのサーバーからデータを取り出しているにすぎないから、実用化までにはいつて無い。そういう事?」

「そうだよ。相変わらず頭の回転が速くて助かるよ」

「それでも娘の魔術ぐらい、ちゃんと教えなよ。『メタトロン』の

術式間違つてたよ?」

なんで炎系統の術なのに、光系統の術に変わってるんだよ。元々その術式を作った先人に対して失礼にも程があるよ。それにこれ第三種の禁忌の術式なんだけど。ジャッジメント断罪光は特急の禁忌魔術だ。

「そう言つて事は君も習得してるのかい？禁術を」

「当たり前じやん。魔術の名家『乾』の名が泣くよ?といふか、普通に地下の書庫漁つてたら有つたんだけどね」

「兄さんつてば、そういうとこズボラだよね。亡くなつた人を悪く言つのは嫌だけど、変わらないよね」

「叔父さん、万物は変化するのが定めなんだよ。俺の今の関係も境遇もそうだ。変化しない物は存在しない。俺はそれを『零』にするのが役目なんだ。だから、早い内に戻つてきた方がいいよ」

「滅びは近いのかい？」

「さあ？神託を受けるのは俺じゃないからね。分からんよ」「それもそうだね。まあ、今日は魔術の事で色々と語り合つてもらうが」

「あの～？ちょっとといいでですか？」

顔を向けると、真由美さんが不思議そうな顔をしていた。逆に花蓮さんは苦々しい顔をしていた。

「『滅び』って何ですか？」

「「「はあー？」」「

叫びはほぼ同時だつた。お偉方や実力のある人は知つてゐる単語を、総局長の娘であるこの人が知らない？どういう事だよー？

真由美さんの回答

『滅び』 それは人間達が挑む事になる試練の事。

北欧神話で言う「神々の黄昏」みたいなもんだ。いろんな伝説上の生物が世界を滅ぼすためにやつてくる。

そこには神殺しの魔物である俺も、敵として戦わなければならぬ。本来なら俺は神を殺し世界を滅ぼすのが役目なんだが、そんな俺が神と共にいるなんて世も末だよな。

そんなふうに説明すると、さすがの真由美さんも真剣な表情をしていた。

「どう? これでも俺の事を好きだとか、婚約者だとかいつてられる? 俺なら到底無理だね。俺には昔一人だけ彼女がいたけど、そのこと話したら軽蔑されたよ。当たり前だと思つてたから、何も言わなかつたけどね」

「……」

惱んでいる、か。ま、当然の行動だろう。こんな事を即答する人なんてそれこそ信用できない。俺はそのまま待つていたが、真由美さんは何も喋らなかつた。

叔父さんと花蓮さんも真由美さんがどうこう答えを出すのか気になつてゐるのか、黙つたままだつた。

「多分ですけど、言つてられるでしょうね。私は」

「え? ……な、何を言つてるんです? 俺は『滅び』をもたらす者の一人なんですよ?」

それなのに、なんでそんな事が言えるんですか!?

「簡単ですよ。一度きりの人生だからです。例えあなたの事を嫌い

になつても、世界は変わらず回つていぐ。それなら楽しんだ方が良いじゃないですか」

「あははははは」

一人して大笑いをしていたが、俺には到底信じられなかつた。そんな事を、俺と共にいるなんて選択をするこの人の言葉が。

「そりやいいわね。確かにその通りだわ。そんな答えをこの場で出してくるとは思わなかつたけど」

「人生楽しまなきや損、か。想像以上だね、君の婚約者はさ」「そんなのは詭弁だろ？！？俺と共にいれば、否が応でも『滅び』を自覚せずにいられない！それを知つて悲しんでいた人を、俺は知つているんだから！」

「それは、貴方の事を思つて悲しんでいたんだよ。あなたは、今まで自分は一人でいなきやいけない、と思つていたんじゃない？」

「当たり前だろ？！？こんな不吉な奴の傍にいて嬉しい訳ないだろう！？」

「少なくとも私は嬉しいよ。あなたの傍にいる事が出来て、知る事が出来て」

「どうして……？どうしてそんな事が言えるんだよ？俺は自分の両親を殺してしまつてる。それでなくとも、数多くの人を殺めてる。こんな人殺しの手を、あなたは握れるつていうのか！？」

俺は目から流れている物を、拭いもせずに右手を目の前に向けた。すると、何の躊躇いもなく俺の右手を優しく握つた。そして膝をついた俺を優しく抱きしめた。

「今まで辛かつたでしょ？苦しかつたでしょ？でも、もう大丈夫だよ。その罪も罰もそして贖いも一緒にしていくから」

「本当に？こんな俺と共に歩み続けてくれるつていうのか？」

「ええ。だつて私はあなたの事を」

「

「愛しているから? ただそれだけ?..びつしてそんな事を言えるのか、俺には分からぬ。分からぬよ」

「簡単ですよ。愛つていうのは世界で最も強い『魔法』なんですか

「ら

俺は真由美さんの優しい手つきに、母さんの事を、いや両親の事を思い出していた。

その悲しみを、辛さを、嘆きを、清濁合わせて全てを呑みこむ。その手に誘われ、己が持ち続けていた重荷が軽くなっているように感じられた。

そして三人が見守る中、俺は静かに両親の事を思い出し泣き続けた。

花蓮さんの想い

「慎也君、どうしてこんな所で黄昏てるの？」

「花蓮さん……」

あれから一時間後、それぞれ自由に行動し始めた。花蓮さんはさつきまで風呂に入っていたのか、髪が濡れていた。俺は、と言えば庭で星空を見ながら黄昏ていた。

さつきまでは叔父さんと魔術の話で盛り上がり過ぎたから、その熱を冷ましているっていう面もあるんだが。

「さんはいらないよ。それで何してんの？」

「見て分かりません？星空を見上げていたんですよ。この世界は俺達の世界よりもはっきりと星が見えますから」

「ん~？ああ、確かにね。でも、多分それだけじゃないんでしょ？」
「よく分かりましたね。ただあなたに訊きたい事があつたんですよ」「ふうん。それで訊きたい事つて？」

「あなたは、俺の事をどう思つてるんですか？」

「どういう、意味？」

「俺は、今まで俺に対する感情を理解しようとしてきませんでした。それは、俺が怖かったから」

「何が怖かったの？」

「もしその人が俺に対して愛とか、そういう感情を抱いているとしたら。俺はそれに応えなくちゃいけない。でも、本当の事を話せばその人は俺の傍から離れて行ってしまう。

言いましたよね？俺には昔、付き合っていた人がいたって。あの人に本当の事を話し、その結果あの人は俺の傍から離れた。あんな思

「はもう、したくないと思つたから」

「だから理解しなかつたっていうの！？それは

」

「ええ。ただの逃げですよ。それでも一緒にいた人に拒絶されるつていうのはそれだけ痛みを背負うんですよ。でも、俺はもう逃げない」

空から田を離し、花蓮さんの眼をじっと見つめた。すると怯んだように、体を後ろに下げるけどまたすぐに元に戻して俺達はそのまま一分ぐらじじと見つめ続けた。

「だからこそ、俺は知りたい。あなたが俺に対し、一体どんな感情を抱いているのかを。

だから教えてくれないか？あなたの想いを」

「……あ、仕方ないかな。これだけ言われて語らなかつたら一生の恥だし」

そして一回深呼吸をした後、真剣な顔つきでその『想い』を語つた。

「好きです。ううん、これはもつ愛してる、かな？出来るなら一生を共にしたい」と思つてる」

「……そうですか。ところで、ちゃんと出てきたらどうですか？真由美さん

「「えー！？」」

俺が家の方に目を向けると、窓を開けて真由美さんが出てきた。気配で分かつてたんだけどね。

「もしその人が」「の辺りから訊いていたのかな？

「答えさせてもらつなら、俺としてはOKですよ。でも、俺は同時に真由美さんの事も大切なんですよ。異性として、ね」

「慎也さん……」

「俺としては両方に幸せになつてほしいんだよ。さて、どうしたものか……」

「何か考え事してる所なんだけど、そろそろ家に入つてきたりどりだい？一応初夏とはいえ、まだ夜の風は冷たいんだから」

「あ、叔父さん。そうだね。戻るとしようか、二人とも」

俺は一人を引き連れて家の中に戻つていった。そんな楽しい日常も翌日には脆く儚く砕け散るとも知らずに。

異世界の『滅び』（1）

「ちょっと、そろそろ起きなさい。とつと起きなさい。」

「おわっ！？」

安らかに眠っていた俺は唐突に布団を剥ぎ取られた。眼を擦りながら、布団を剥ぎ取った犯人を確認しようとすると、そこには花蓮さんが立っていた。

「何するんですか、花蓮さん？」

「さんはいらないの。いい加減やめて」

「はいはい。それじゃあ花蓮、何の用なんだい？」

「この世界の『滅び』が始まつたわよ。早く準備しなさい」

「何だつて？」

俺が素早く窓に近づき、カーテンを全開にするとそこには黒い羽根を備えてはいるがけして鳥などでは無く、むしろ人に近い形をした者が飛んでいた。

そう。浮いているんじやなくて、飛んでいたんだ。羽思いつきり動いてるしな。俺はもともと服を着ていたから、即行で動き始めた。

「それで、現状はどうなつてんの？」

「取り敢えず一般人は全員シェルターに避難してもらつたわ。正体不明の犯罪者が表れたって事でね」

「……今時そんな事を真に受ける人がそんなに大勢いるとはまあ、誰でも被害は受けたくないしね。っていうかなんでこの町が狙われたの？」

「この町はなぜか龍脈が集中してるからね。そのエネルギーを得るためにでしょ」

「ふーん。それで私達はどうするの？」

俺はピタッと足を止めて不思議そうな表情を浮かべながら、花蓮の方を向いた。

「なんで俺達が何かしなきゃいけないんだ?」「

「はあ? だつてここには知り合いだつているでしょ?」

「それなら一緒に連れて帰ればいいだけだし。俺達がここで頑張る必要性つて限りなく零だから」

「それは…… そうだけど」

「という訳で俺は特に何もする気はない」

俺達が居間に辿り着くと、そこは一種の作戦会議の場所になつた。ちょっと迷惑だよな。作戦会議ならもつと広い場所でやればいいだろ?」

「慎也さん、遅いですよ!」

「はあ? 何が? 言つとくけど、俺は何もする気ないよ

「何いつとるんだ君は!?」

唐突に金切り声が聞こえてきた。鬱陶しいな、一体誰だと思ったら白髪の男性が立っていた。スーツ着てるし、官僚の人かな?

「この世界の危機なのだろう! ついこの事の為に、君たち魔術師がいるのだろうが!」

「あなたが何を勘違いしているのか知りませんが、俺はそもそもこの世界の人間ではありません。

協力する義理がありませんし、俺の所属している組織は無断で力を使うことを禁じている。俺はどうする事も出来ないんですよ

「それなら

話に紛れ込んできたのは、竜美ちゃんだった。これだけ言ったのにまだ俺に手伝わせる気かよ？

「私が依頼します。私達の世界の救済を」

「これは『滅び』だ。つまりはこの世界に対する試練なんだよ？それに俺が手を出すのは^{ルール}撻違反だ」

「それでも、私はこの世界を救いたいんです」

「ではこれだけ訊いておこう。君たちは救われた世界で一体何をするんだ？」

「私に世界の全てを代弁する事はできません。でも、私は色々な人を救える人になりたい。全部なんておこがましい事は言わない。でも、私の手が届く範囲の人は救える。そんな人になりたいんです！」

「いいだろう。依頼を受理した。ただし、一つだけ条件と頼みがある

る

「なんですか？」

「まず条件だが、俺は単体で動かさせてもらひ。いわゆる独立部隊と言う奴だ」

「なつ！？ふざけるなよ、あさ

」

俺は騒ぎたてようとする官僚の口を抑え込んだ。まつたくつむさいな。誰だよこんな奴を呼んだのは。

「やがましいぞ。戦わない人間がぐちゃぐちゃと騒ぐな。そうでなくとも俺に戦う必要性など無いのだから、俺が認めた人間だけ俺の世界に送ることだってできるんだぜ？」

「それで頼みというのは？」

「ん？ああ、聖剣を一本用意してもらいたい。一本はあるんだが、もう一本が俺の剣術には必要なんだよ」

「わかりました。正教会に要請しています」

「ギリシア正教会にか？あのけち臭い連中が貸してくれるかねえ？」「分かりませんけど、世界の危機なんですから協力してくれるでしょう」

「はあ、まあいいや。真由美さん、契約をしよう。君の力を引き出すために」

「分かりました。それじゃあ、お願ひします」

俺は真由美さんを連れて中庭に歩いていった。他の面々は置いてけぼりで、さつきの喧しがった官僚は、強烈な気迫をぶつけて気絶させた。

「汝我との契約を求める者よ。今^{ソレ}汝が誓^シいを立てよ」

「誓^シい、ね。そんな物が必要なのか。さて、どうしようかな。……

決めた。

俺は汝を自分の為には振るわない。誰かを守るために振るつ事を、わが命に誓^シつ

「……宣言は受理それました。それでは剣を引き抜いて下さ^セ」

そう。今、剣は地面に突きたてられて^リいる。まるで話の通り、これを抜けた者だけが所有者だと主張するよ^リう。俺は剣の柄を握つて一気に引き抜いた。

「ふんっ！　　ぐあっ！？」

「慎也！？」

なんだよ、これ！？王を選定する剣とはよく言つたもんだな！單にこいつの生^{オゾ}氣を吸い取る力に耐えきるのが試練かよ！？だがよ、これがどうした。こんな痛みは俺が、真由美さんが味わつてきた孤独の痛みに比べればな。俺はむしろ一^ヒちらから生氣を流してやつた。

「軽いんだよ！これがどうした？その程度か！？聖剣の名が泣くぜ？そんなんじゃあな！」

「駄目だ！それ以上、生^{オゾ}氣を取りだしたら君の命が！」

「止めないでくれよ、叔父さん。大体、この程度で俺が死ぬ訳無いだろうが！」

おひ、どうした？もう疲れ切つたのか？ふざけんじやねえぞ！

「こんな物じやねえんだよ、真由美さんが耐え忍んできた心の痛みはな！だが、突如俺の手から握っていた剣の感触が消えた。そしてそこで俺は体勢を崩した。

しかし俺は、地面に頭を打つたりはしなかった。突然俺の後ろに真由美さんが表れて、俺の頭を自分の膝に置いたからだ。

「もう、駄目じやないですか。あんなに生氣オドを流し込んだりしちゃ」「でも、俺は」

「分かっています。あなたの思いが私の中に流れ込んできたから」

俺は立ち上がった。オド生氣を流し続けた所為もあって、まだ体は揺れていたがなんとか立ち上がった。

「さて、それじゃ行くとするか。花蓮、君には魔術師たちの統制を頼むよ」

「え？ なんであたしが？」

「君は指揮したりするのなれていそุดだから」

「あはは、冗談。私が出るときはほとんどの兵ヒンが死んだり倒れている時だから、指揮する時なんかないわよ」

「そつか。じゃあ、付いてくる？」

「もちろんよ」

そうした後にもう一回前を向くと、真由美さんが頬を膨らませていた。なんか可愛いな。そう思っていたが、俺の胸を叩き始めた。

「ちょ、ちょっと何？ 俺なんかした？」

「寧ろしてないのが問題なんでしょう」

「……もしかして自分も名前で、っていうか呼び捨てで呼んでほしいって事？」

思いつきり頭を縦に振っていた。「うん、しょうがないか。この様子じゃ呼ばない限り絶対動かなさそうだし。

「真由美。これでいいのかい?……ってなんで顔を赤くしてんのさ。ほら、早く行くよ」

俺は一人の手を握つて歩き始めた。一人とも黙つてはいたが、顔を真つ赤にしていた。そんな顔をされるところからも恥ずかしいんだけど……。そう思いながら、俺達は静かに街を歩き始めた。

黄金の剣

「慎也さん、お待たせしました。ギリシア正教会から頼まれていた物が届きましたよ」

「え、もうかい？ また早いね」

俺が渡された包みを開くとそこには驚く事に凄くメジャーな聖剣が入っていた。

「デュランダル？ 最強の破壊力を持つ聖剣を送つてくるとは驚きだね」

「そうですね。でもこれなら勝てるんじゃないですか？」

「まだわからない。勝負事に絶対なんてあり得ないんだから」

「それでも楽になる事は確かよね」

花蓮の言葉は否定できない。確かに生半可な、それこそ聖剣師と呼ばれる鍛冶共が急場で作つた剣なんか送られたら大変だつただろうし。竜美ちゃんはさつさと帰つた。

「そう言えば慎也さん。聖剣についてですけど、変わった事があるんですね」

「変わった事って？」

「剣になつた時の形態が三つに増えました。

通常形態のエクスカリバー。速度特化のカリバーン。威力重視のコールブランド。この三つです」

「どれも呼び方が違うだけだよね。どれも結局エクスカリバーを指してゐるし」

「そう言つ茶々はいらないんです！」

「でも、それなら戦い方にもバリエーションが出来るからありがた

「よ

俺はそう言いつつ、真由美の髪をゆつくりと優しく撫でていた。傷ついたりしたらいけないからな。すると気持ちよさそうな顔をしていた。

それを見た花蓮までせがんできて大変だつた。一人ともなんだか安らいでいる猫のような顔をしていた。ためしに顎の下ら辺を触つてみると、嫌がりつつも幸せそうな表情を浮かべていた。

「さて、そろそろ行こうか。花蓮は援護射撃を頼むわ」

「了解。二人とも気をつけてね」

「「もちろん」」

花蓮が少し離れたビルに隠れた。そして俺達はそのまま立ち止まつて、上を見上げた。ざつと数は三百人以上つてところだな。

「さあ、行こうか。我が妃」

「ええ、行きましょう。我が王よ」

俺は剣に変化した真由美を右手に掴み、俺は左手にデュランダルを掴んだ。そして聖皇剣エクスカリバーの加護を受け、全身に黄金の鎧を纏いそして背中に天使のような純白の羽で空に飛翔した。

異世界の『滅び』（2）

「儀礼として言つとくけど、止まつてくんね？」

「「「はあ？」」

いきなり空中に現れた俺に驚いたのか、相手方の全員に動搖が広まつて全員の動きが止まつた。その中で六枚羽持つてゐるしそいつがリーダー？とか思った奴に声をかけた。

「いや、どうせ止めるんだろ？」

「まあね。でも平和的な方が良いじゃん？」

「そら、そうだな。それで？お前さんは何者だ？」

「俺か？俺は異世界の住人さ。つてそりやあんた達も同じか？」

「この羽が見えるんだから、そうに決まつてるだろ。俺は、まあ聖書風に言えばアザゼル」

「わお、神を見張る者『グリゴリ』のトップか。俺は乾慎也。フン神喰狼リルを宿す者にして、今は聖皇剣の主だ」

「こりやまた強敵だな」

「それはどうでもいいけど。それじゃ、ハハハの要求は一つだ。とつとこの世界から出て行け」

「それが出来るなら、この世界には来てないぞ。悪いが、今いる奴ら以上の者を抱えている俺としては飲めない要求だな」

「それなら、あとは

「戦うのみ、つてな！」

アザゼルは出現させた光を剣状にして。俺はエクスカリバーを光を纏わせてぶつけた。光と変化した魔力が辺り一帯に咲き乱れた。

それは同時に、戦争の始まりを表す光景だった。アザゼルの傍に控えていた副官みたいな男が、腕を振つて叫んだ。

「突撃！」

「しゃらぐせえんだよー！『デュランダル！』
『やらいせる訳無いだろ？』が！」

アザゼルは持っていた光を今度は槍状に変えて、俺に投げてきた。これ使つたら面白くないって事で花蓮との試合の時は使わなかつた術を使つた。

「はじき返せ！『無限鏡』」^{フオーチュン・ミラー}

「何だとー？」

飛ばした光が跳ね返ってきたんだから、そりや驚くだろ？。これはアマテラスが持つ絶対の盾『ハ咫鏡』^{やたのかがみ}を術式版にした物だ。

「我が眼前の敵を薙ぎ祓え！俺の大切な者を守るために。力を貸せ！『デュランダル！』

『オオオオオオオオオオ！

デュランダルから強烈なほどの光が伸びた。しかも聖の力を纏っている。なんで分かるのかって言つと、俺が魔の力を宿している所為で肌がチリチリして痛いからだ。

ともかくその力で五十人以上を薙ぎ払つた。これで少しは楽になるだろ？。そう思つてアザゼルの方を向くと怒りの表情を浮かべていた。

「よくもやつてくれたな。俺の民を！」

「そう思つなりとつと帰れつて言つてんだろ？が！」

それからしばらく、俺達は刃をぶつけあつた。しかし実力が均衡している所為で決着がつかない。これはどうするべきだ？

異世界の『滅び』・終幕

それは唐突に起きた。花蓮が隠れていたビルが破壊された。もちろん、それで傷つくようなやわな鍛え方はしていなかった。

でも、地面に着地した所で他の墮天使が放った槍に当たりかけた時には、さすがにひやつとした。その後も危険を強いられていた。

そして一発の攻撃が肩に当たると俺も我慢の限界だった。アザゼルの腹に強烈な蹴りを叩きこむと、俺は反転して花蓮の元に駆けつけ周りにいた墮天使の連中をデュランダルで撫で切りにしてやった。

「俺の家族を傷つけた事を後悔させてやるよ…神喰狼！」

『なんだ？ 何か用か？』

「俺との契約を認可しろ。」 いつもまとめて吹き飛ばすためには力が足りない。それにもう時期だらう？

『まあ、いいだろ。我を宿してもう一十年も経つしな。

汝に問う。我との契約を交わし汝は何をする？』

「喰らう。俺の家族を傷つける全てを喰らつてやる。手始めに、この墮天使どもだな」

神喰狼^{フエンリル}がニヤッと笑つたような気がした。ちなみに仮契約の状態の俺が百パー^{パー・フェクト・シンクロ}セントで最大同調^{パー・フェクト・シンクロ}をしても、大体六十パーセントぐらいしか力を引き出せない。

聖皇剣の加護が無くなり、鎧は黄金ではなく全てを反射する白銀の色となっていた。

「デュランダルを右籠手に着装」

デュランダルは剣の形ではなくなり液体状となつて、籠手に纏わ

りつき固まつた。もちろん解装すれば元に戻るけどな。

俺が右手を払つよう振ると、その線上にあつたあらゆる者が切斷された。ビルの破片、飛び交う魔術、光、墮天使の肉体、果ては雲すらも切り裂いた。

「何なんだ、それは！？」

「見ても……分からんか。仕組みは単純だ。右の籠手に『デュランダルの性能を宿しただけだ』

「デュランダルの能力はその圧倒的なまでの破壊力にあるからか。厄介な！」

「期待はしないが、一応最終警告だ。さつと自分の世界へ去れ。これ以上戦闘行為を続行するのならば、俺はお前らの世界に乗り込んでお前の民を全員殺すぞ。老若男女、差別なくな」

「くそつ！」

「アザゼル、ここは退くべきです！」

上を向くと、そこにはアザゼルと同じように六枚の黒い羽根を備えた男が立っていた。つていうかこいつ、さっき見た副官の野郎じやん。傍には筋肉質な男が立っていた。

「何を言つてるんだ！？」ここ以外に攻める場所など無いだろう！？」

「同じ場所になるのは癪ですけど、悪魔側と同盟を結び他の世界を攻めましょう！」

「それでいい。ひとつこの世界を去れ。俺は手を出さない

「だがそれではこちらの気が持たないのでな。傷の一つは負つて貰うぞ！」

「！？止める、ベリアル！お前に勝てる相手じゃない！」

「それでも皆が逃げる時間ぐらいは稼げる！さあ、行けアザゼル！」
我らが王よ！」

「来る者は拒まない。だがあんたみたいな武人に剣は卑怯だな。真由美、離れてろ。デュランダル、解装」

エクスカリバーの実体化を解いた真由美にデュランダルを任せた後、俺達は向かい合つた。他の墮天使の連中は空間を割いて違う世界へ去つていった。

「行くぞ！」「いつでも」

俺は拳を鳩尾に叩きこみ、ベリアルは俺の脇腹に蹴りを叩きこんだ。同時に吹き飛び、ビルにぶつかつた。

結果から言えども、俺が勝つた。だけど、ベリアルは最後に残った力で光を飛ばしてきた。さすがに不意を打たれた所為もあって左目をやられた。

その代わりに俺は、ベリアルの心臓を掴み潰した。そして俺は格好悪いが氣を失つた。でもこの世界の『滅び』はこれで終わつた。

「そろそろ起き下せー。慎せさん」「そんなことしても無駄よ。それよりはいつした方が早いわ、よー」「どわつ…?」

いきなり布団を剥がされたような感覚だつた。あれ?こんなやり取り前もあつたような、と思いつつ俺は床を転がつていた。眼を開けると、そこには真由美と花蓮がいた。っていうか、あれ?

「俺確かに左目を潰されたはずじゃ……」「私が治しました」

真由美が自信満々に「褒めて下せい」オーラをバリバリ出しながら言つてきたので、俺は髪を撫でながらお礼を言つた。ついでに花蓮に鏡を取つてもらつた。

するとそこには、左田が金で右田が銀色の普通ではあり得なくて、カラコンでもつけなきや無理じやね?という感じになつていた。オツドマイでもこんな感じの心境に何のかな?

「あれからどれだけ経つた?」「ええっと、一日です。それで皆下で待つますよ」「何をさせる気だよ。『滅び』がこれで終わりとは限らないんだから、修練でもしてればいいだろ?」「それ言つちやダメよ。引き止められる可能性大だから」「わかつてるよ。でも叔父さんはこの事を理解してる。これとなつたら、叔父さんに任せると」「投げやりね。ま、賛成だけど」

そんな会話をしつつ、俺は居間に入った。そこには模擬戦の時に戦った子達とその家族？がいた。あれ？結構面倒そうな予感がするぞ？

「初めまして。天条樺次の父、天条匡と申します。以後お見知り置きを」

「初めまして。桧原遙香の母、桧原美鈴と申します」

「こちらこそ。乾慎也です。それで何が」「用でしようか？」

「報酬をお支払いしようと思いまして」

「ああ、そのことか。あなた方は現代魔術師なのですよね？」

「ええ」

「それなら叔父さん。今の段階でいい。俺に現代魔術を教えてくれ「そんな事でいいのかい？」

「そんな事って。他の世界の情報は貴重なんだよ？それが『現代魔術』ともなれば、その貴重度は半端じゃない」

「はあ、それはいいけど。情報で渡せばいいのかい？」

「うん。お願い。どれぐらい時間がかかる？」

「一日か二日は欲しいかな」

「OK。俺はその間せいぜい暇つぶしさせてもらうよ。一人とも、もううたら帰るからね」

「はーい」

元々、城宮君を帰してあげて叔父さんに物を渡すだけだった。それがこんだけ延びてしまった。問題は特に無いけど。明美が駄々をこねる以外は。

「そ、それじゃあ学校に来て下さいよー魔術の事で色々教えてほし

いんです！」

「あ、私も！良いですね？慎也さん！」

「いいよ。だから落ち着きなよ。一人とも。つていうか城富君は？」

「行方不明だつた間の宿題で今地獄を見てますよ」

その事を訊くとその場にいた皆が一斉に笑い始めた。それで思つたんだ。この世界は一度とはいっても救われたんだと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3483y/>

白銀の鎧と黄金の剣

2012年1月1日21時09分発行